

国保事業費納付金等算定標準システム
インストールガイド（機器構築編）
（スタンドアロン構成）

第 3.0 版

令和 8 年 3 月 26 日

MSB-1101-006

このマニュアルは、国保事業費納付金等算定標準システム SB03-00 の発行によって、第 3.0 版 (MSB-1101-006) として作成したものです。

このマニュアルでは、機器調達業者が国保事業費納付金等算定標準システムの OS やミドルウェアのインストール、各種設定をする手順や、注意事項などについて説明しています。

ご使用にあたっては、このマニュアルおよび関連マニュアルを良くお読みになっていただき、記載どおりに正しくご使用ください。

■ご使用上の注意

このマニュアルは、次の条件でご使用くださいますようお願い申し上げます。

1. 日本国内で自己の業務の目的の範囲内でご使用ください。
2. このマニュアルの海外への持ち出し、非居住者への開示などが必要となった場合は、あらかじめ文書で国民健康保険中央会の同意を得てください。なお、この場合、日本国の輸出関連法規や、必要に応じて米国などの輸出関連法規を遵守してください。
3. このマニュアルの内容の一部または全部を無断で転載したり、複製することはできません。
4. このソフトウェアの仕様およびマニュアルの内容は改良のため、予告なしに変更することがあります。
5. このソフトウェアおよびマニュアルの使用に関し、生じた損失に対する賠償については、このソフトウェアを開発した団体ならびに開発委託を受けた会社は責任を負いません。
6. このソフトウェアに関連した他の製品などの使用に関し、生じた損失に対する賠償についても、上記と同様に責任を負いません。
7. 重要なユーザーファイルは、バックアップを取得してください。
8. このマニュアル中で使用している一部絵柄などの著作権は、このマニュアルの作成会社に帰属しています。このマニュアル以外で使用することはできません。
9. このマニュアルでは、画面の右上に表示されるバージョン情報を非表示にしております。

■商標

Adobe は、米国およびその他の国における Adobe の商標または登録商標です。

Windows は、マイクロソフトグループの企業の商標です。

Microsoft Edge は、マイクロソフトグループの企業の商標です。

Microsoft Office は、マイクロソフトグループの企業の商標です。

Oracle および Java は、Oracle、その子会社および関連会社の米国及びその他の国における登録商標です。

WebLogic は、Oracle、その子会社および関連会社の米国及びその他の国における登録商標です。

SVF は、ウイングアーク 1st 株式会社の登録商標です。

Apache HTTP Server は、Apache Software Foundation の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

Amazon Corretto は、Amazon.com, Inc. またはその関連会社の商標です。

その他記載の会社名、製品名は、それぞれの会社の商標または登録商標です。

■ 改版履歷

2016 年 6 月	(第 1 版)	MSB-1102-001
2016 年 8 月	(第 1.1 版)	MSB-1101-001
2016 年 9 月	(第 1.2 版)	MSB-1101-001
2016 年 10 月	(第 1.3 版)	MSB-1101-001
2020 年 4 月	(第 1.4 版)	MSB-1101-002
2021 年 4 月	(第 2.0 版)	MSB-1101-003
2023 年 2 月	(第 2.1 版)	MSB-1101-004
2023 年 2 月	(第 2.2 版)	MSB-1101-005
2026 年 3 月	(第 3.0 版)	MSB-1101-006

【このページは白紙です】

はじめに

「国保事業費納付金等算定標準システム インストールガイド（機器構築編）（スタンドアロン構成）」は、機器調達業者が国保事業費納付金等算定標準システムの OS やミドルウェアのインストール、各種設定をする手順や、注意事項などについて説明しているマニュアルです。国保事業費納付金等算定標準システムのマニュアル全体の構成（マニュアル体系）や、このマニュアルの位置づけは、サポートサイトの[システムについて]－[マニュアル]に掲載されている「国保事業費納付金等算定標準システム マニュアル一覧」でご確認ください。

<マニュアルの構成>

このマニュアルは、次のように構成されています。

1 OS 基本設定	国保事業費納付金等算定標準システムのスタンドアロン端末の OS 基本設定について説明しています。 また、OS 基本設定の手順についても説明しています。
2 ミドルウェアインストール	国保事業費納付金等算定標準システムのスタンドアロン端末にインストールするミドルウェアの種類と作業フローについて説明しています。
3 ミドルウェアの詳細設定	国保事業費納付金等算定標準システムのスタンドアロン端末にインストールするミドルウェアの詳細設定について説明しています。
付録.A ミドルウェア入手手順例	国保事業費納付金等算定標準システムの納付金スタンドアロン端末にインストールするミドルウェアの入手手順例について説明しています。
付録.B ミドルウェアインストール手順例	国保事業費納付金等算定標準システムの納付金スタンドアロン端末にインストールするミドルウェアのインストール手順について説明しています。
付録.C セキュリティパッチ一覧	国保事業費納付金等算定標準システムのスタンドアロン端末の初期構築時に適用するセキュリティパッチの一覧を示します。

<マニュアルでの表記>

このマニュアルでは、製品名を次のように表記する場合があります。

製品名	マニュアルでの表記
Windows 11 IoT Enterprise LTSC 2024	Windows 11

目次

1 OS 基本設定	1
1.1 前提環境	2
1.1.1 各機器に必要な OS	2
1.1.2 前提となる BIOS 設定	3
1.2 納付金スタンドアロン端末の基本設定	4
1.2.1 対象機器と実施手順対応表	4
1.2.2 納付金スタンドアロン端末 OS の基本設定	5
1.2.3 納付金スタンドアロン端末 OS のネットワーク設定	37
1.2.4 納付金スタンドアロン端末 OS のプリンタ設定	42
2 ミドルウェアインストール	43
2.1 ミドルウェア一覧	44
2.1.1 納付金スタンドアロン端末のミドルウェア一覧	44
2.2 ミドルウェアのインストール	46
2.2.1 納付金スタンドアロン端末のミドルウェアインストール	46
3 ミドルウェアの詳細設定	48
3.1 納付金スタンドアロン端末の詳細設定	49
3.1.1 対象機器と実施手順表	49
3.1.2 納付金スタンドアロン端末 OS の詳細設定	52
3.1.3 データベースソフトウェアの詳細設定	87
3.1.4 Web サーバソフトウェアの詳細設定	138
3.1.5 アプリケーションサーバソフトウェアの詳細設定	145
3.1.6 帳票ソフトウェアの詳細設定	178
3.1.7 バックアップソフトウェアの詳細設定	194
3.1.8 ウィルス対策ソフトウェアの詳細設定	195
3.1.9 オフィス製品の詳細設定	196
付録.A ミドルウェア入手手順例	
付録.B ミドルウェアインストール手順例	
付録.C セキュリティパッチ一覧	

1 OS 基本設定

この章では、国保事業費納付金等算定標準システム（以下、納付金システムと記す）
（スタンドアロン構成）を導入するにあたって前提となる事項を説明します。

1.1 前提環境

納付金スタンドアロン端末に必要な OS と OS の環境設定について、次に説明します。

1.1.1 各機器に必要な OS

各機器へ導入する OS を次に示します。

表 1-1 導入する OS

No.	構成	機器の種別	OS
1	スタンドアロン構成	納付金スタンドアロン端末	Windows 11

OS のインストールと基本設定について

各導入団体で対象となる納付金スタンドアロン端末に、上記のインストールと基本設定（コンピュータ名の設定等）を実施した後、次ページ以降に示す追加設定を行ってください。

ドライバーについて

各導入団体で対象となる納付金スタンドアロン端末に、上記の OS に対応したハードウェアドライバーをインストールした後、次ページ以降に示す追加設定を行ってください。

1.1.2 前提となる BIOS 設定

納付金システムを使用するにあたり、納付金スタンドアロン端末の BIOS 設定にて HDD または SSD パスワードを設定してください。HDD または SSD パスワードの設定方法は各機器により異なるため、各機器に添付されるマニュアルを参照してください。

また、ハードウェア個別仕様として各機器に BIOS 設定が必要な場合は、個別に設定をしてください。

1.2 納付金スタンドアロン端末の基本設定

1.2.1 対象機器と実施手順対応表

本作業の対象となる機器と、対象機器にて実施する手順を次に示します。

表 1-2 実施手順対応表

No.	作業項目	納付金スタンドアロン端 末
1	1.2.2(1) ドライブ構成	○
2	1.2.2(2) ドライブ構成の変更	○
3	1.2.2(3) 仮想メモリの設定	○
4	1.2.2(4) イベントビューアーの設定	○
5	1.2.2(5) 画面サイズの設定	○
6	1.2.2(6) ビルトインアカウント有効化の設定	○
7	1.2.2(7) エクスプローラーオプションの設定	○
8	1.2.3(1) IP アドレスの設定	○
9	1.2.4(1) プリンタドライバのインストール	○
10	1.2.4(2) プリンタ情報の設定	○

1.2.2 納付金スタンドアロン端末 OS の基本設定

納付金システムの導入時に必要な納付金スタンドアロン端末の OS 環境設定手順を次に示します。

注意事項

以降の環境設定作業は、すべて「Administrator」権限で実施します。

(1) ドライブ構成

ドライブの構成を次に示します。

C:\ . . .	OS (Windows 11 のシステム領域)
	ミドルウェア (Web アプリケーションサーバ等)
D:\ . . .	アプリ領域 (業務システムを格納する領域)
E:\ . . .	データ領域 (業務システムが使用する動的なファイルを格納する領域)
	データベース
F:\ . . .	帳票データ領域

なお、上記の構成とインストールドライブが異なる場合、システムが正しく動作しない場合があります。

また、DVD ドライブのドライブレターが上記ドライブと重なる場合は、DVD ドライブのドライブレターを変更してください。

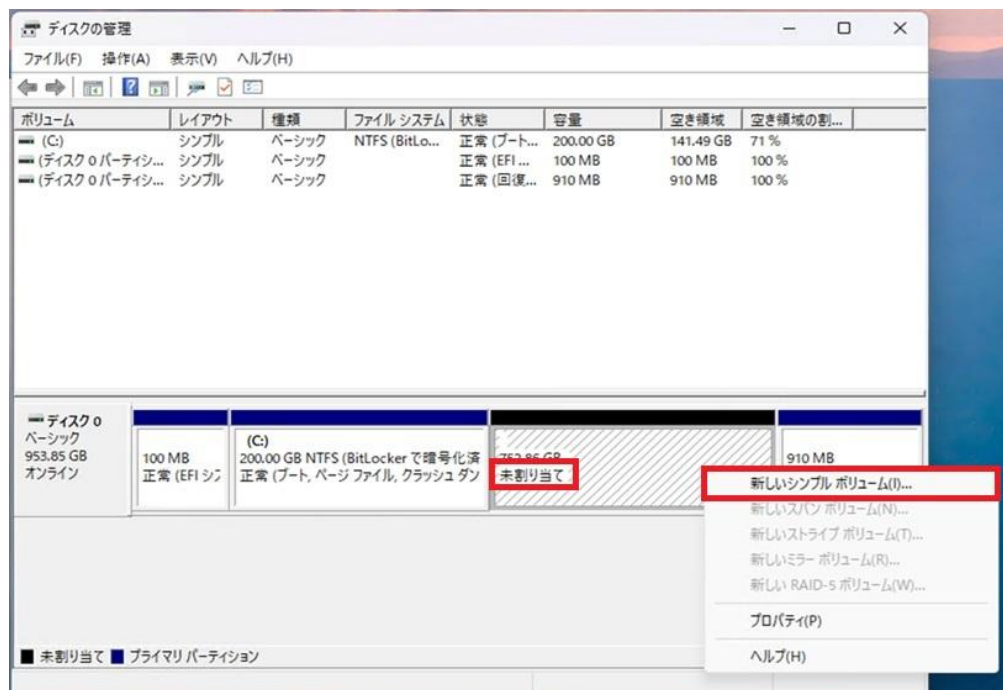
(2) ドライブ構成の変更

(1) に示すドライブ構成に変更します。

1. [スタート]アイコンを右クリックし、「ディスクの管理」をクリックします。



2. 「ディスクの管理」画面で、「未割り当て」領域を右クリックし、「新しいシンプル ボリューム」をクリックします。



3. 「新しいシンプルボリュームウィザード」画面で、「次へ」をクリックします。



4. 下記のドライブ構成（参考例）を参考に、「シンプル ボリューム サイズ (MB)」欄を入力し、「次へ」をクリックします。



《ドライブ構成（参考例）》

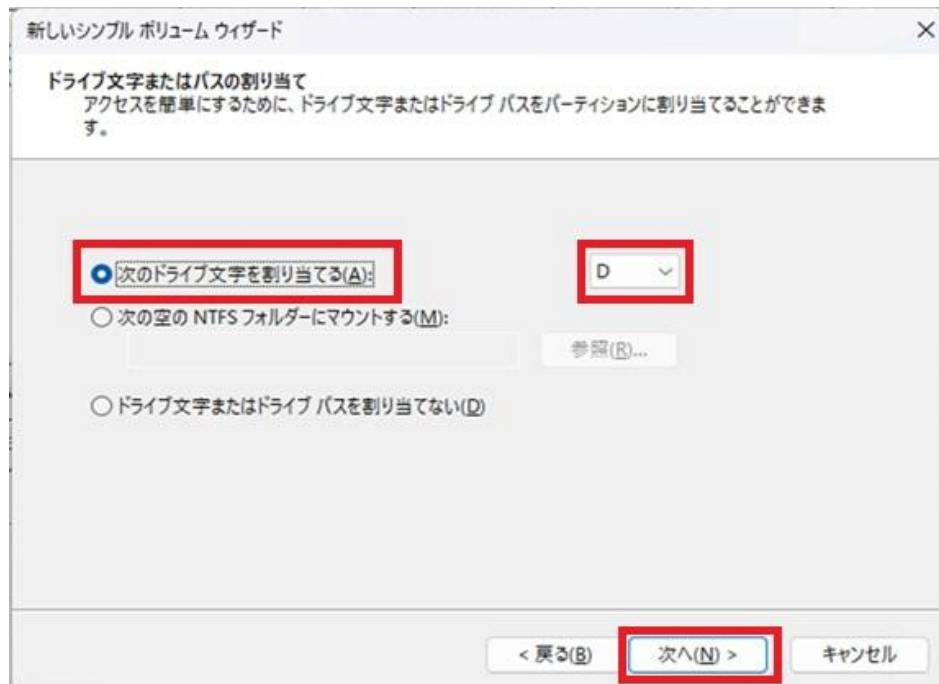
納付金スタンドアロン端末

・・・ C ドライブ : 204,804MB (200GB)
D ドライブ : 79,876MB (78GB)
E ドライブ : 残りすべての容量
F ドライブ : 102,404MB (100GB)

⚠ 注意事項

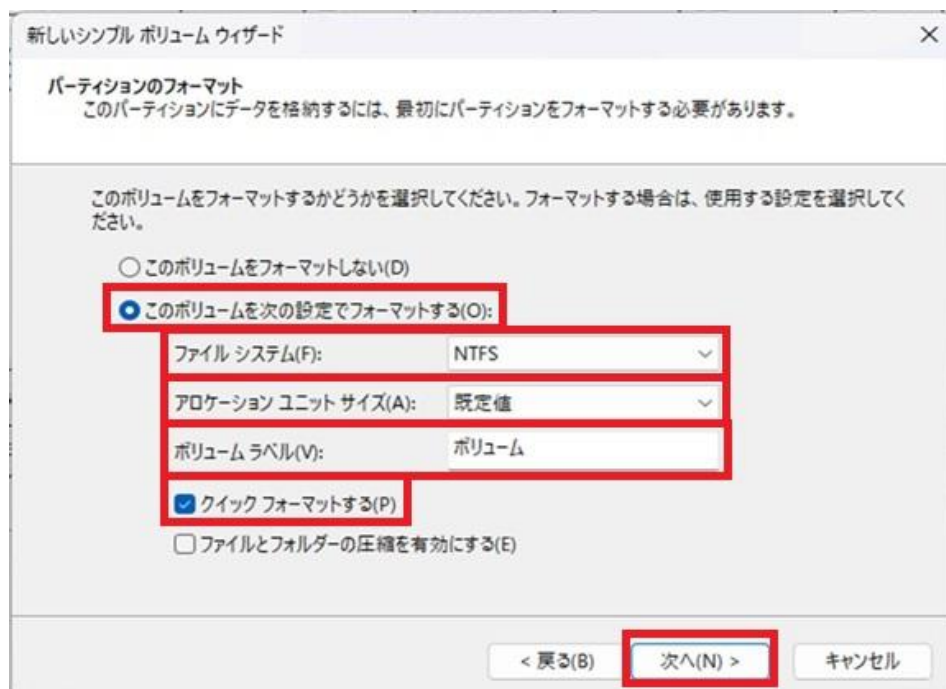
- ・ 初期状態で C ドライブが 200GB 以外の場合は、ディスクの管理にて C ドライブの容量を上記「ドライブ構成（参考例）」の値に変更してください。
- ・ 上記「ドライブ構成（参考例）」は、OS 認識容量が 512GB の場合の構成例となります。
- ・ また、C,D,F ドライブに上記「ドライブ構成（参考例）」の容量を割り当て、E ドライブに残りすべての容量を割り当てます。

5. 「次のドライブ文字を割り当てる」を選択し、上記ドライブ構成（参考例）を参考に、プルダウンメニューからドライブ文字を選択して、「次へ」をクリックします。



6. 「このボリュームを次の設定でフォーマットする」を選択し、以下の設定内容であることを確認して、「次へ」をクリックします。

「ファイルシステム」	: NTFS
「アロケーション ユニット サイズ」	: 既定値
「ボリューム ラベル」	: ボリューム
「クイック フォーマットする」	: チェックあり



7. 「完了」をクリックします。



8. 「Microsoft Windows」画面が表示された場合は、「キャンセル」をクリックします。



9. 「ディスクの管理」画面で、ボリュームが作成されていることを確認します。



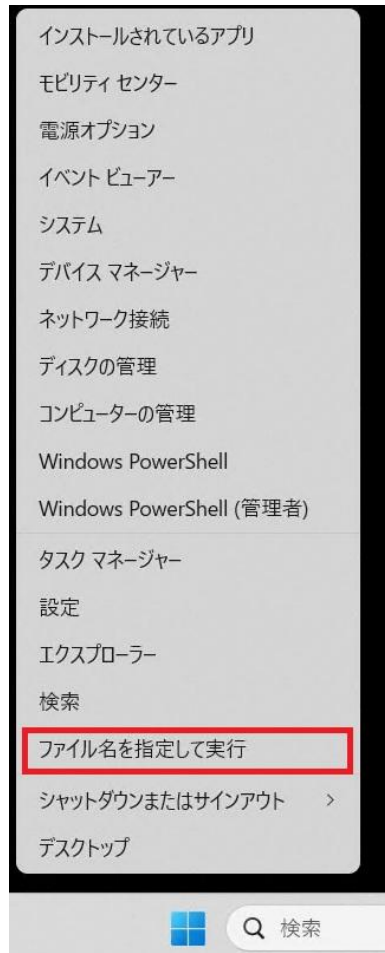
10. 作成するドライブの数だけ、手順 2. ～手順 9. を繰り返します。

11. 「ディスクの管理」画面を閉じます。

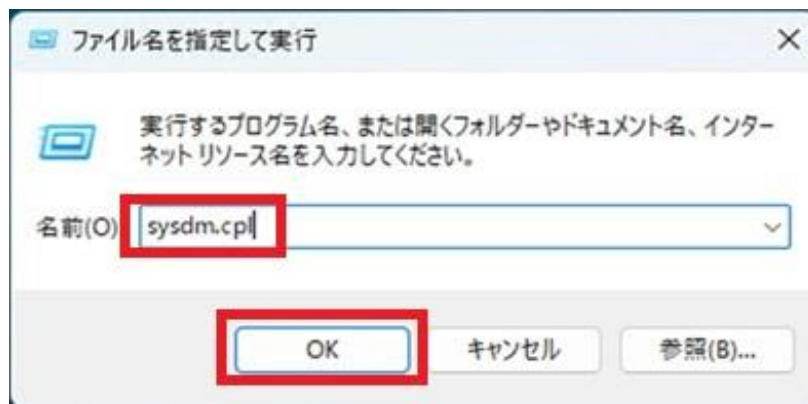
(3) 仮想メモリの設定

ページングのための仮想メモリサイズを設定します。

1. [スタート]アイコンを右クリックし、「ファイル名を指定して実行」をクリックします。



2. 「ファイル名を指定して実行」画面で、「名前」に「sysdm.cpl」と入力し、「OK」をクリックします。



3. 「システムのプロパティ」画面で、「詳細設定」タブ-「パフォーマンス」欄-「設定」をクリックします。



4. 「パフォーマンス オプション」画面で、「詳細設定」タブ-「プロセッサのスケジュール」欄-「バックグラウンド サービス」を選択します。



5. 「仮想メモリ」欄-「変更」をクリックします。



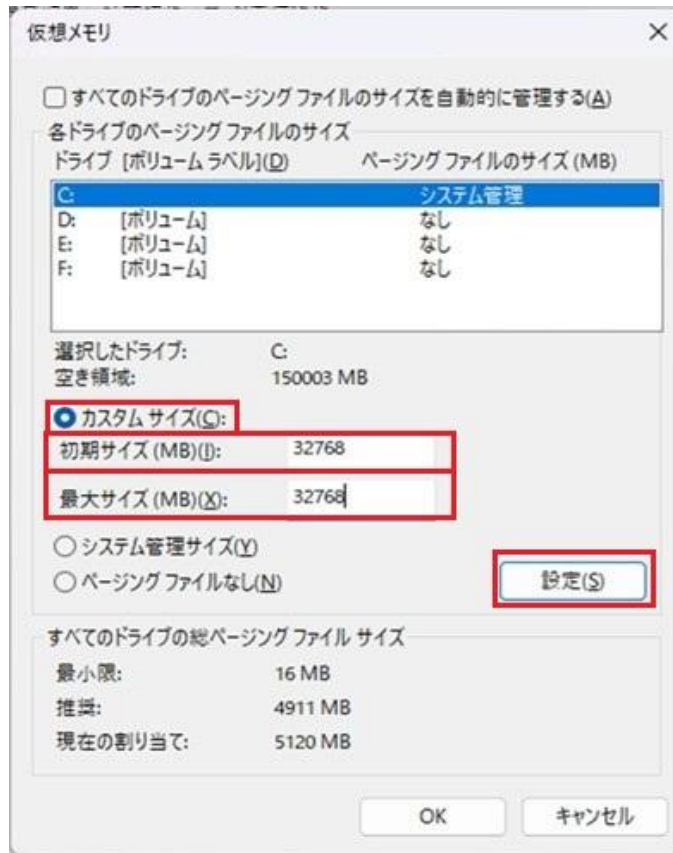
6. 「仮想メモリ」画面で、「すべてのドライブのページング ファイルのサイズを自動的に管理する」のチェックを外します。



7. 「ドライブ [ボリューム ラベル] ページング ファイルのサイズ」欄で C ドライブが選択されていることを確認します。



8. 「カスタムサイズ」を選択し、「初期サイズ(MB)」欄、「最大サイズ(MB)」欄に下記の参考例を参考に入力し、「設定」をクリックします。



(参考例)

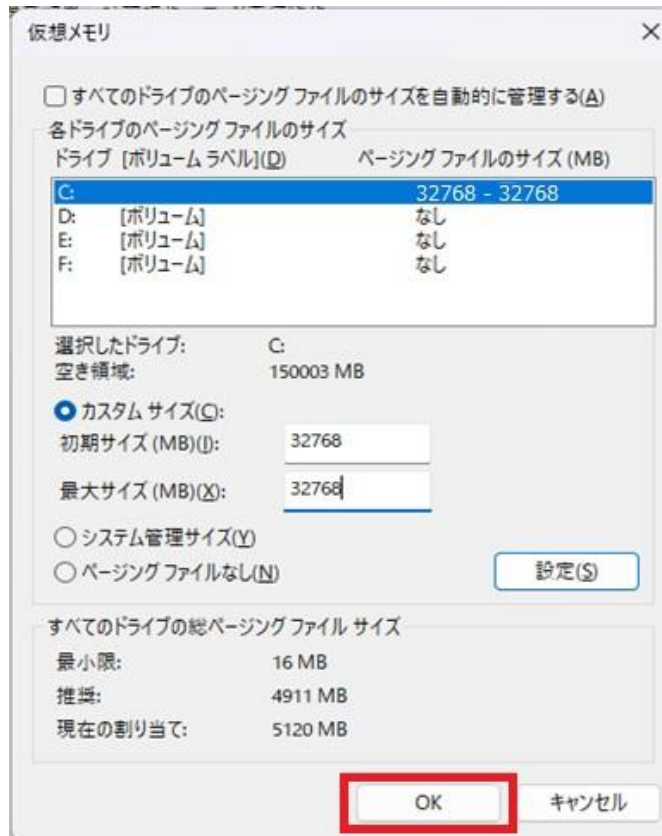
納付金スタンドアロン端末・・・「初期サイズ (MB)」: 32768MB

「最大サイズ (MB)」: 32768MB

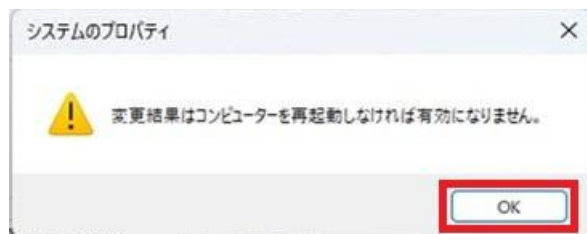
⚠ 注意事項

- ・ 上記、仮想メモリの「初期サイズ (MB)」および「最大サイズ (MB)」の値は、搭載メモリ容量が 32GB の場合となります。
- ・ 仮想メモリの「初期サイズ (MB)」および「最大サイズ (MB)」の値は、同じ値を設定し、設定値は搭載メモリ容量+400MB とします。

9. 「OK」をクリックします。



10. 「システムのプロパティ」画面が表示された場合は、「OK」をクリックします。



11. 「パフォーマンスオプション」画面で、「適用」をクリックし、「OK」をクリックします。



12. 「システムのプロパティ」画面で、「OK」をクリックします。



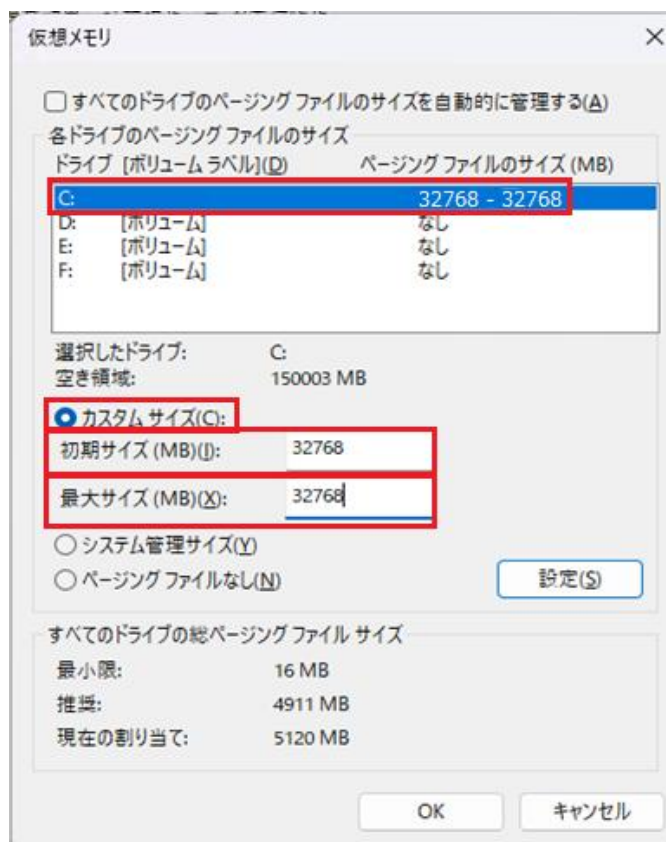
13. 「Microsoft Windows」画面が表示された場合は、「今すぐ再起動する」をクリックして、再起動を行います。



⚠ 注意事項

「Microsoft Windows」画面が表示されない場合は、仮想メモリ設定作業をした納付金スタンドアロン端末を再起動してください。

14. 納付金スタンドアロン端末の再起動完了後、ログインし、手順 1. ～手順 3. および手順 5. を実施し、「仮想メモリ」画面を開きます。
15. 「仮想メモリ」画面で、設定した値どおりになっていることを確認し、「仮想メモリ」画面を閉じます。



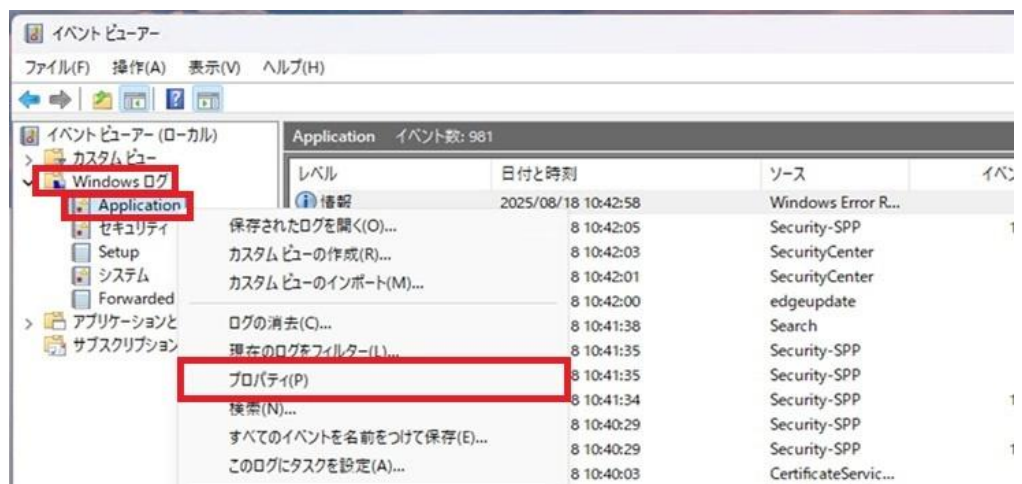
(4) イベントビューアーの設定

システムのイベントログを指定期間保管するために、イベントビューアーを設定します。

1. [スタート]アイコンを右クリックし、「イベントビューアー」をクリックします。



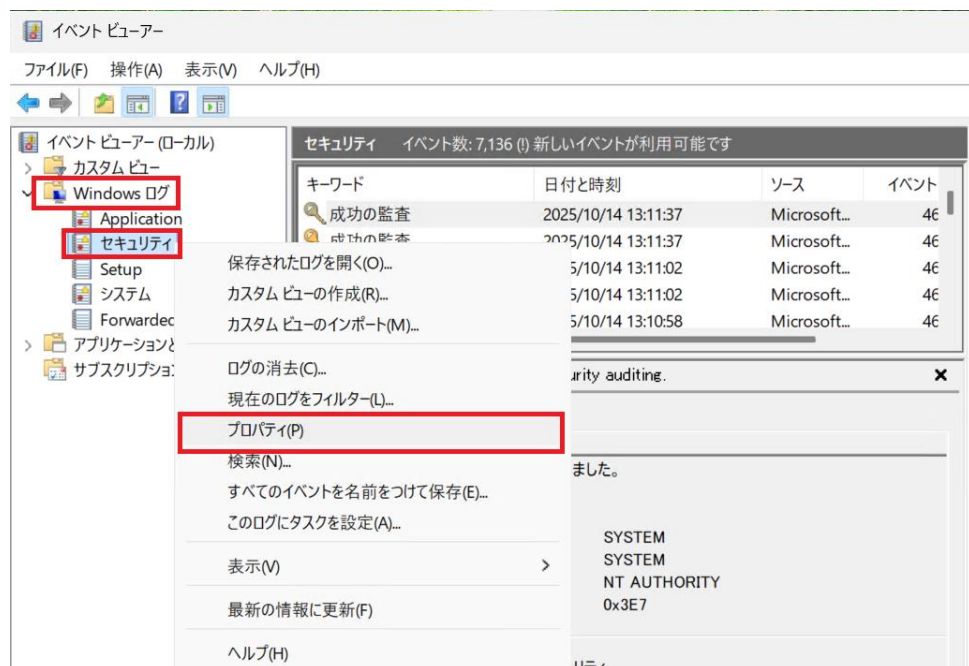
2. 「イベントビューアー」画面で、「Windows ログ」-「Application」を右クリックし、「プロパティ」をクリックします。



3. 「ログのプロパティ - Application(種類: 管理)」画面で、「全般」タブの「イベント ログ サイズが最大値に達したとき」欄の「イベントを上書きしないでログをアーカイブする」を選択し、「適用」をクリックし、「OK」をクリックします。



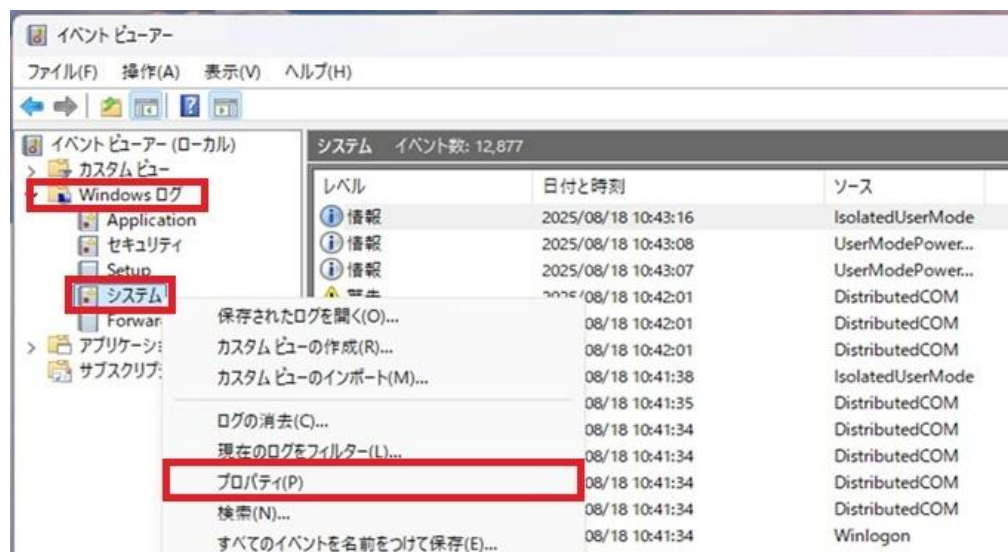
4. 「イベントビューアー」画面で、「Windows ログ」 - 「セキュリティ」を右クリックし、「プロパティ」をクリックします。



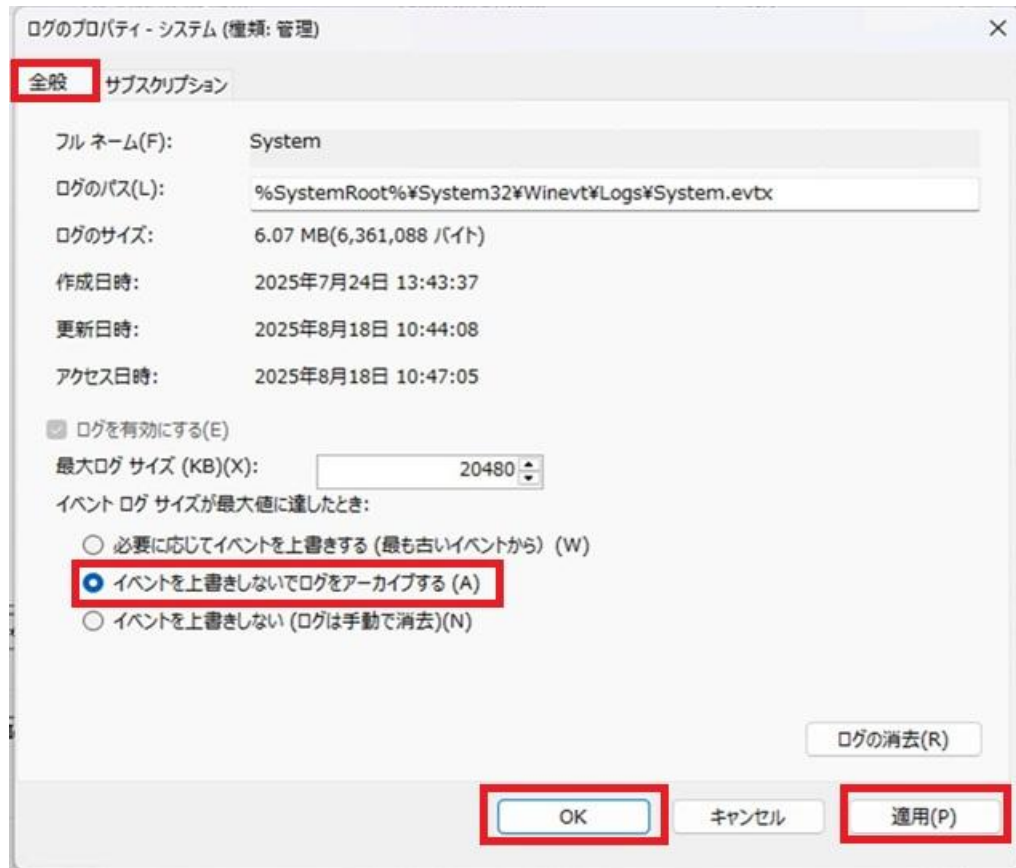
5. 「ログのプロパティ - セキュリティ (種類: 管理)」画面で、「全般」タブの「イベント ログ サイズが最大値に達したとき」欄の「イベントを上書きしないでログをアーカイブする」を選択し、「適用」をクリックし、「OK」をクリックします。



6. 「イベントビューアー」画面で、「Windows ログ」 - 「システム」を右クリックし、「プロパティ」をクリックします。



7. 「ログのプロパティ - システム (種類: 管理)」画面で、「全般」タブの「イベントログ サイズが最大値に達したとき」欄の「イベントを上書きしないでログをアーカイブする」を選択し、「適用」をクリックし、「OK」をクリックします。

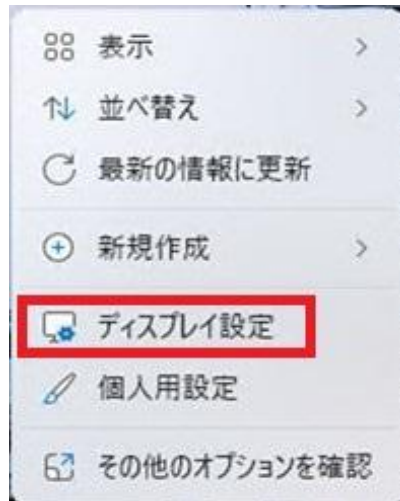


8. 手順 2.、手順 4. および手順 6. を実施し、設定した値どおりになっていることを確認し、「イベントビューアー」画面を閉じます。

(5) 画面サイズの設定

画面サイズについて以下の設定内容を確認します。

1. 「デスクトップ」画面上を右クリックし、「ディスプレイ設定」をクリックします。



2. 「設定」画面右側の「解像度」が「1280×1024」以上となっていることを確認してください。



⚠ 注意事項

「解像度」が「1280×1024」以上でない場合は、「解像度」のプルダウンメニューから、「1280×1024」以上の解像度を選択し、「変更の維持」をクリックしてください。

3. 「設定」画面を閉じます。
4. 手順 2. にてディスプレイの解像度を変更した場合は、手順 1. を実施し、「設定」画面右側のディスプレイの解像度で、設定した値どおりになっていることを確認し、「設定」画面を閉じます。

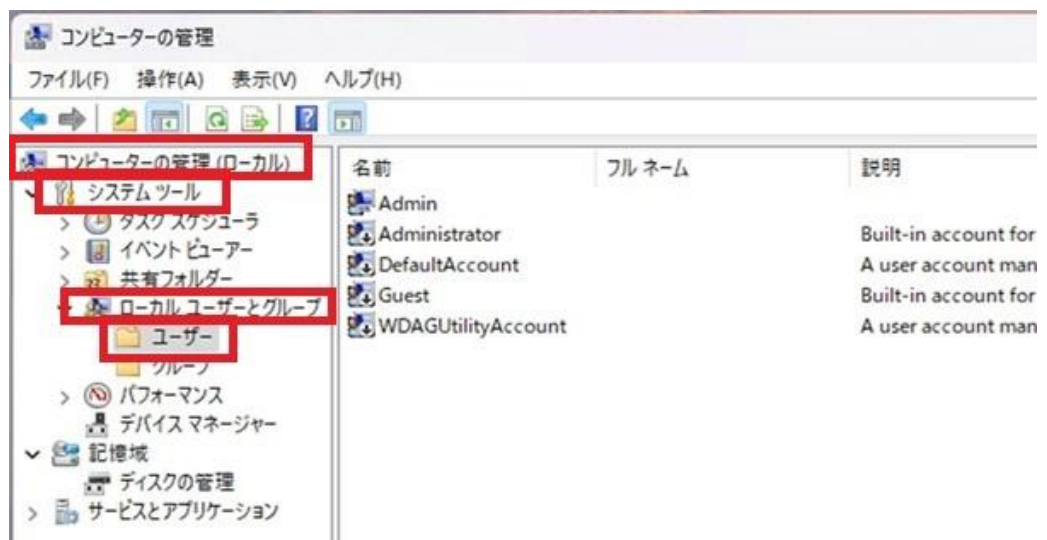
(6) ビルトインアカウント有効化の設定

ビルトインアカウントを有効化するための設定をします。

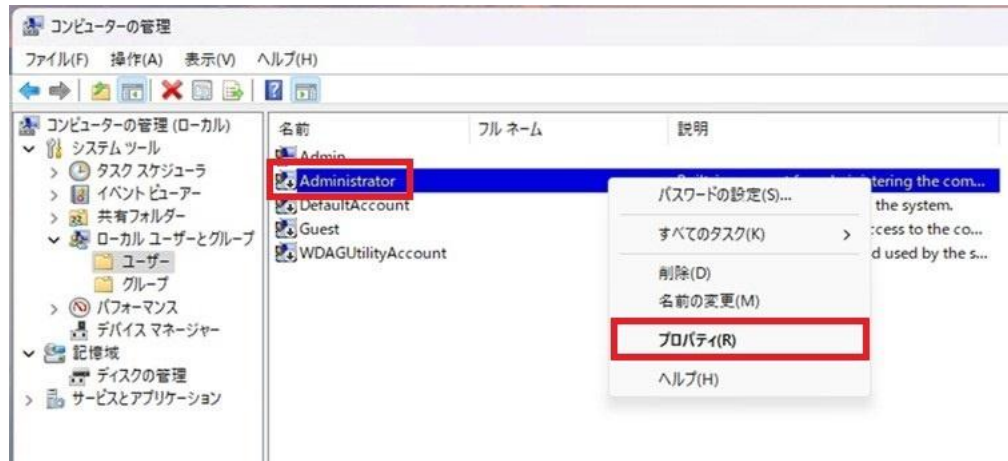
1. [スタート]アイコンを右クリックし、「コンピューターの管理」をクリックします。



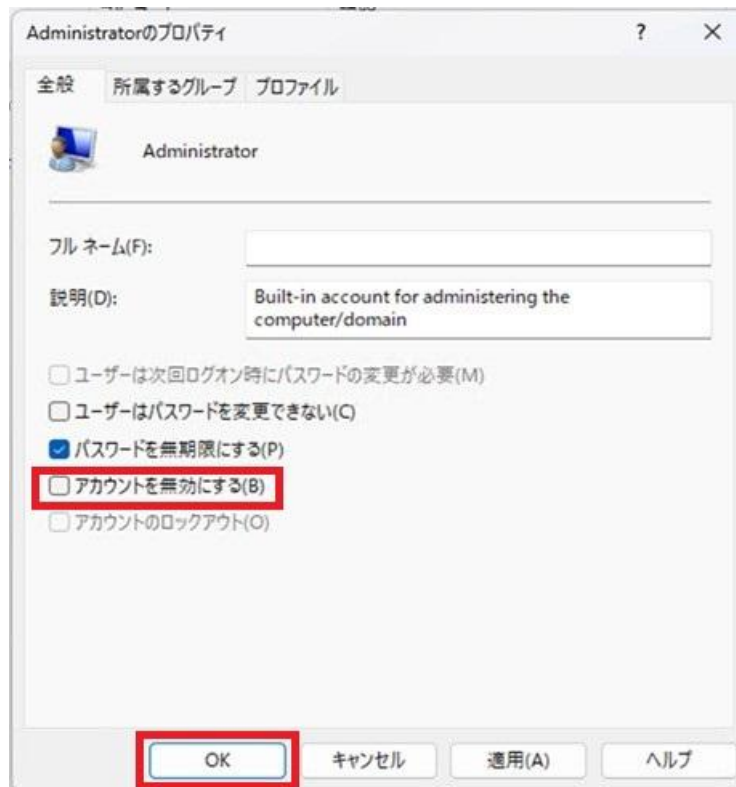
2. 「コンピューターの管理」画面で、「コンピューターの管理(ローカル)」-「システム ツール」-「ローカル ユーザーとグループ」-「ユーザー」をクリックします。



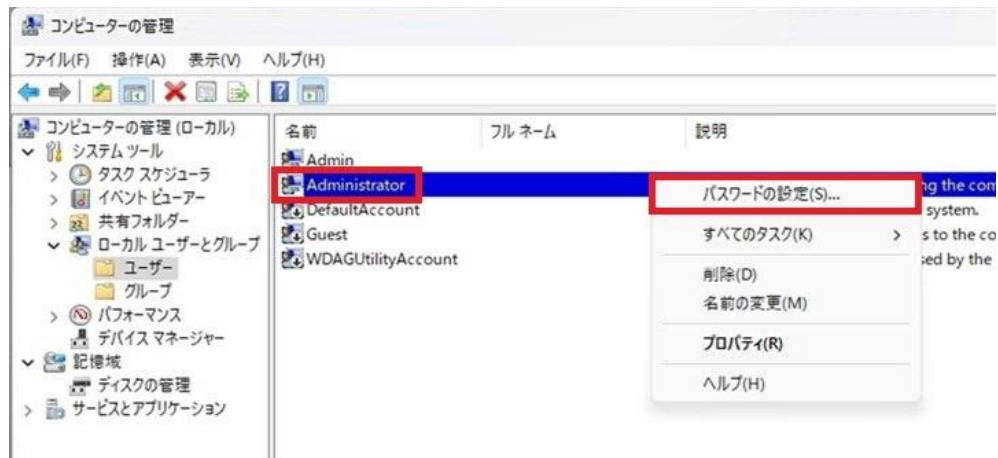
3. 「Administrator」を右クリックし、「プロパティ」をクリックします。



4. 「Administrator のプロパティ」画面で、「アカウントを無効にする」のチェックを外し、「OK」をクリックします。



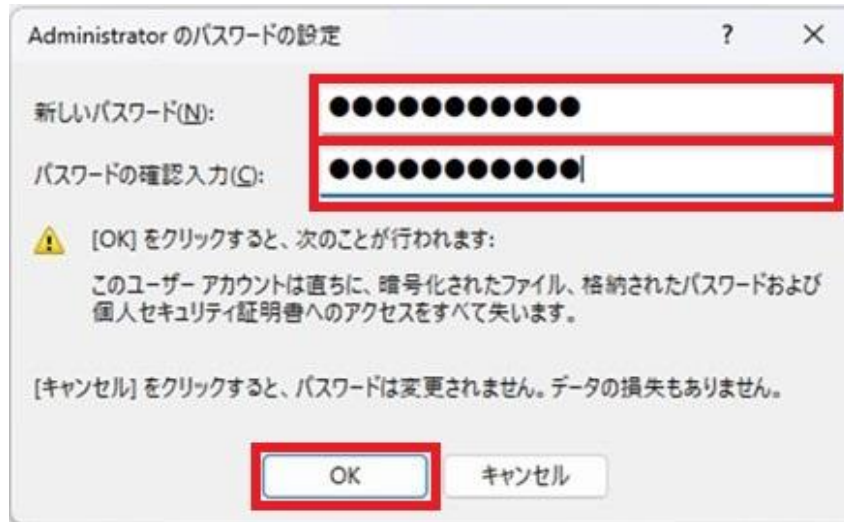
5. 「コンピューターの管理」画面で、「Administrator」を右クリックし、「パスワードの設定」をクリックします。



6. 「Administrator のパスワードの設定」画面で、「続行」をクリックします。



7. 「新しいパスワード」「パスワードの確認入力」に Administrator のパスワードを入力し、「OK」をクリックします。



⚠ 注意事項

Administrator のパスワードについては、各都道府県にて事前に設計してください。

8. 「ローカルユーザーとグループ」画面で、「パスワードは設定されました。」と表示されていることを確認し、「OK」をクリックします。



9. 「コンピューターの管理」画面を閉じます。
10. 手順 1. ～手順 9. を実施した「Administrator 権限のユーザ」をログアウトし、有効化した「Administrator」ユーザでログインできることを確認してください。

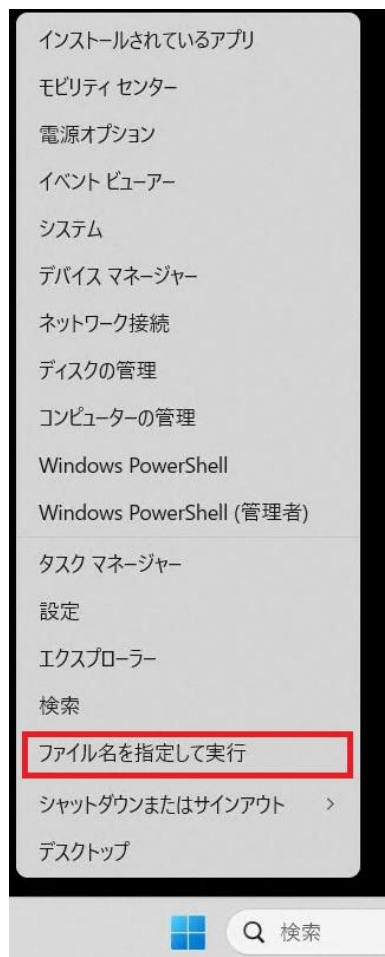
11. 「Administrator」ユーザの初回ログイン時に「デバイスのプライバシー設定の選択」画面が表示されるため、「同意」をクリックします。



(7) エクスプローラーオプションの設定

エクスプローラーオプションの設定をします。

1. [スタート]アイコンを右クリックし、「ファイル名を指定して実行」をクリックします。



2. 「ファイル名を指定して実行」画面で、「名前」に「control」と入力し、「OK」をクリックします。



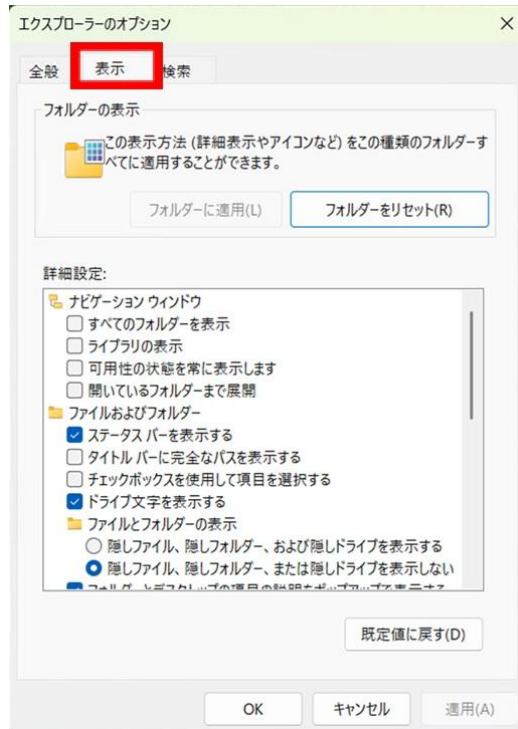
3. 「コントロールパネル」画面で、「表示方法： カテゴリ▼」のプルダウンから、「小さいアイコン」をクリックします。



4. 「すべてのコントロールパネル項目」画面で、「エクスプローラーのオプション」をクリックします。



5. 「エクスプローラーのオプション」画面で、「表示」タブをクリックします。



6. 下記画面例を参考に表 1-3 の設定値を入力します。

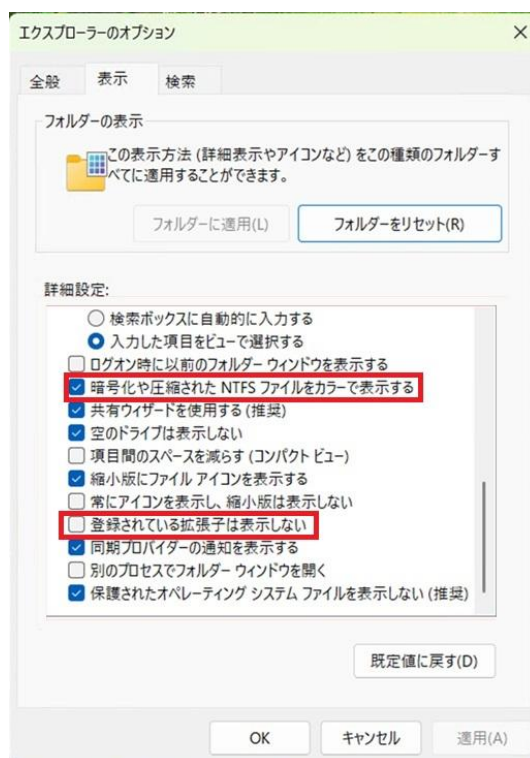
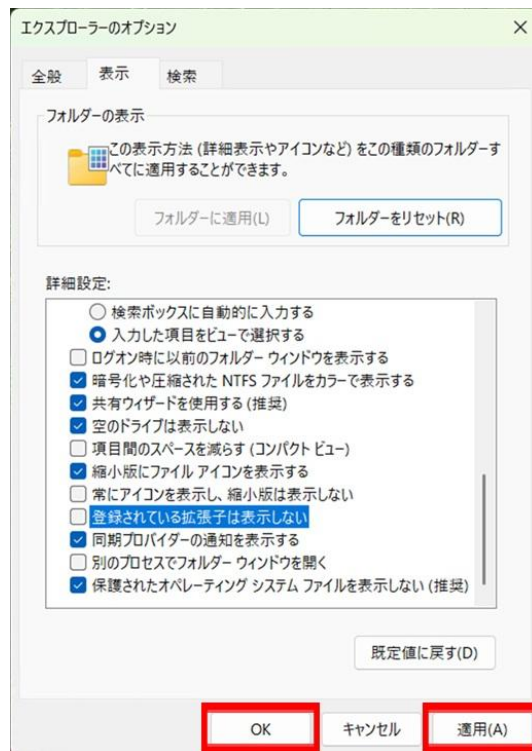


表 1-3 エクスプローラーのオプション

No.	対象機器	設定項目	設定値
1	納付金スタンドアロン端末	暗号化や圧縮された NTFS ファイルをカラーで表示する	チェックあり

2	登録されている拡張子は表示しない	チェックなし
---	------------------	--------

7. 「適用」をクリックし、「OK」をクリックします。

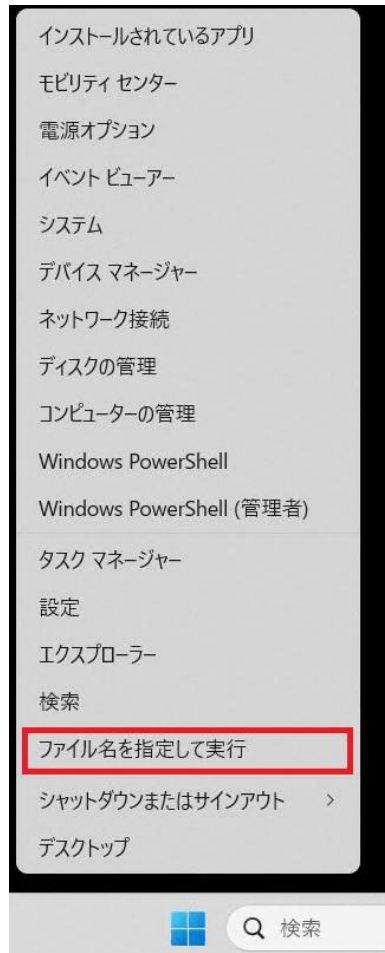


8. 「すべてのコントロールパネル項目」画面を閉じます。

(8) ストレージセンサーの設定

ストレージセンサーの設定をします。

1. [スタート]アイコンを右クリックし、「ファイル名を指定して実行」をクリックします。

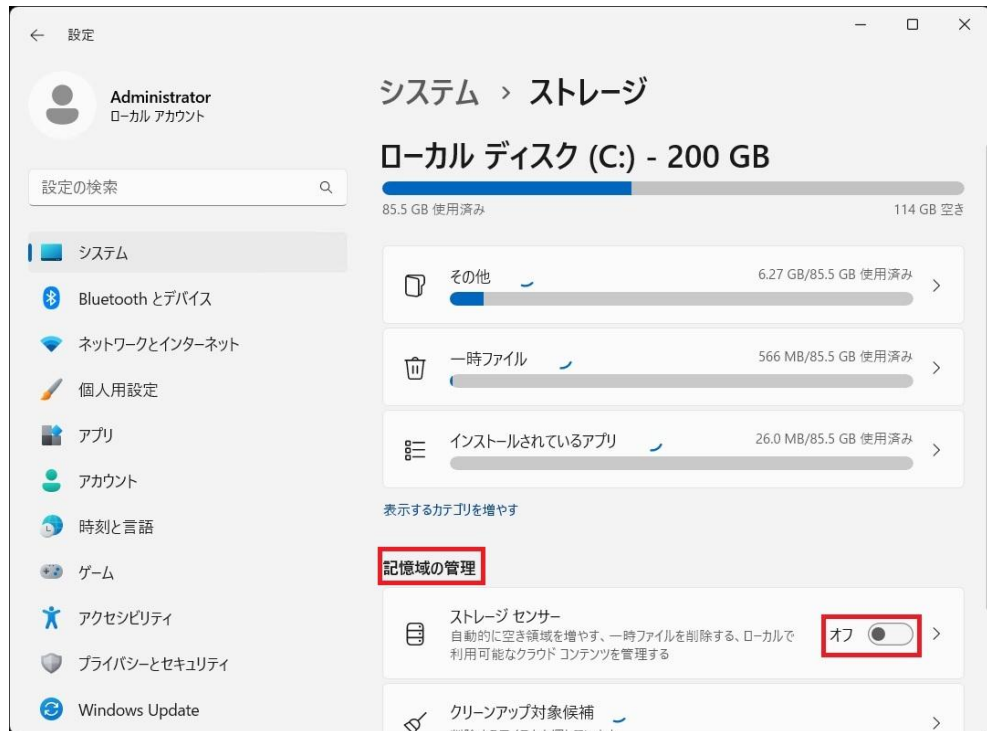


2. 「ファイル名を指定して実行」画面で、「名前」に「ms-settings:storageense」と入力し、「OK」をクリックします。



1 OS 基本設定

3. 「設定」画面右側で、「記憶域の管理」の「ストレージ センサー」を「オフ」にします。

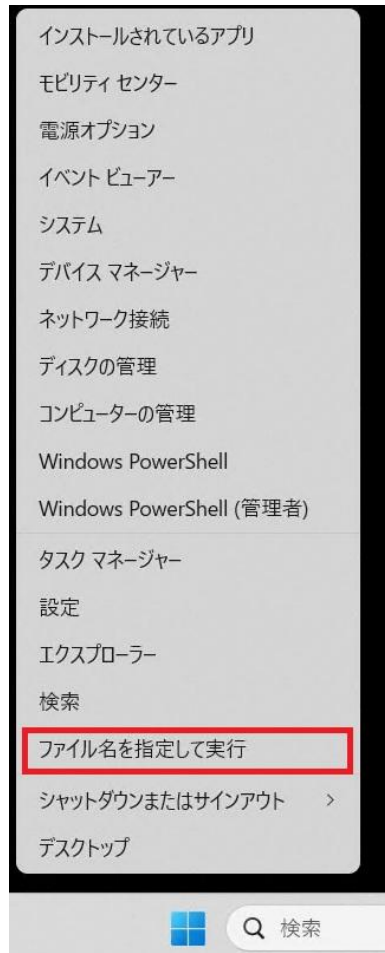


4. 「設定」画面を閉じます。

(9) Wi-Fi の設定

Wi-Fi の設定をします。

1. [スタート]アイコンを右クリックし、「ファイル名を指定して実行」をクリックします。



2. 「ファイル名を指定して実行」画面で、「名前」に「ms-settings:network-wifi」と入力し、「OK」をクリックします。



3. 「設定」画面右側の「Wi-Fi」を「オフ」にします。



4. 「設定」画面を閉じます。

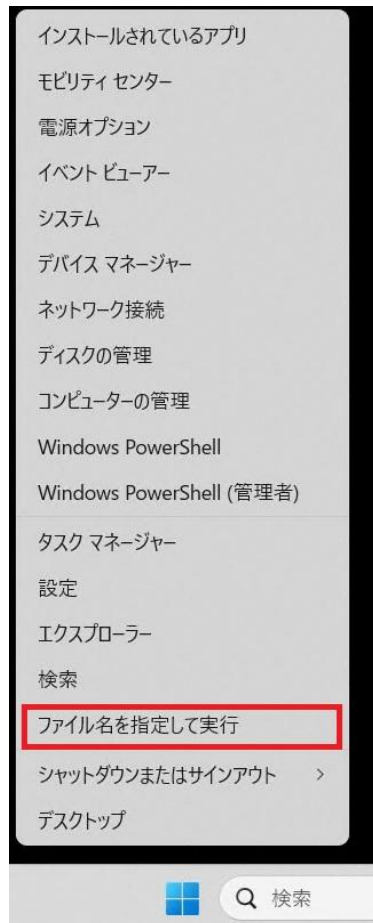
1.2.3 納付金スタンドアロン端末 OS のネットワーク設定

納付金スタンドアロン端末 OS のネットワーク設定について、次に示します。

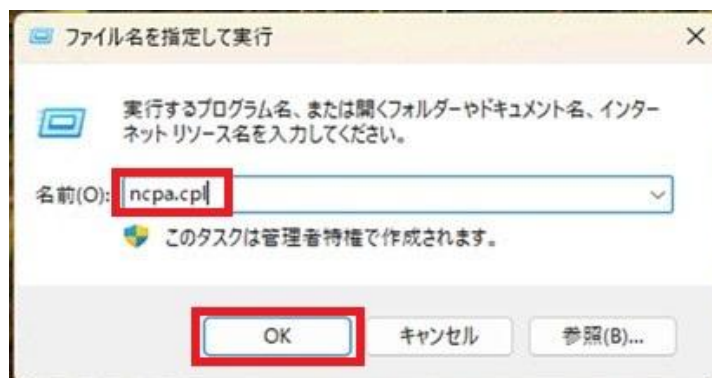
(1) IP アドレスの設定

ネットワーク上で特定のコンピュータを識別するための固有のアドレスを設定します。

1. [スタート]アイコンを右クリックし、「ファイル名を指定して実行」をクリックします。



2. 「ファイル名を指定して実行」画面で、「名前」に「ncpa.cpl」と入力し、「OK」をクリックします。



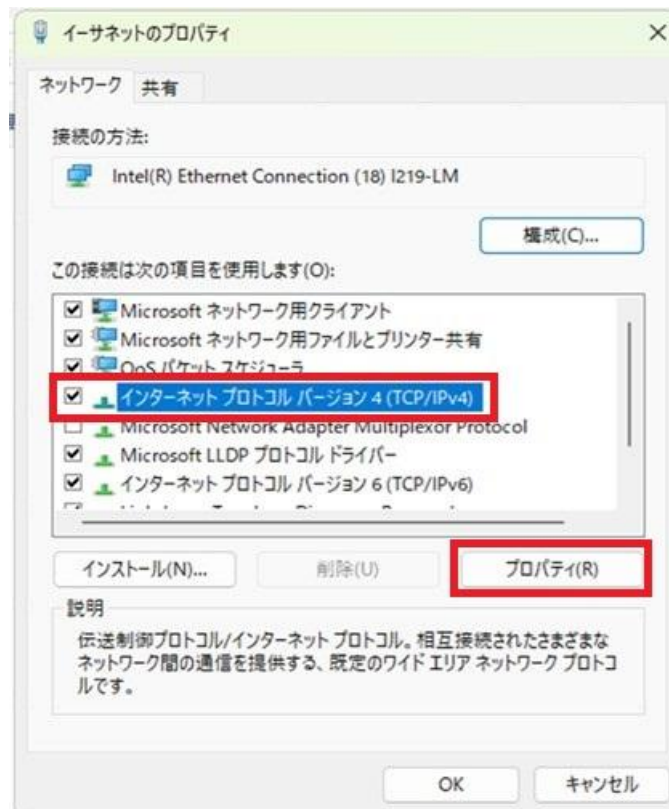
3. 「ネットワーク接続」画面で、「イーサネット」を右クリックし、「プロパティ」をクリックします。



⚠ 注意事項

使用するハードウェアによっては、右クリックするネットワークアダプタ名が、「イーサネット」以外の名称となっている場合があります。設定するネットワークアダプタ名に読み替えてアイコンを選択してください。

4. 「イーサネットのプロパティ」画面で、「インターネット プロトコル バージョン 4(TCP/IPv4)」をチェックし、「プロパティ」をクリックします。



5. 「インターネットプロトコルバージョン 4 (TCP/IPv4) のプロパティ」画面で、「次の IP アドレスを使う」を選択し、IP アドレス、サブネット マスク、デフォルト ゲートウェイをそれぞれ入力し、「OK」をクリックします。

インターネット プロトコル バージョン 4 (TCP/IPv4) のプロパティ

全般

ネットワークでこの機能がサポートされている場合は、IP 設定を自動的に取得することができます。サポートされていない場合は、ネットワーク管理者に適切な IP 設定を問い合わせてください。

☐ IP アドレスを自動的に取得する(O)

☒ 次の IP アドレスを使う(S):

IP アドレス(I):

サブネット マスク(U):

デフォルト ゲートウェイ(D):

☐ DNS サーバーのアドレスを自動的に取得する(B)

☒ 次の DNS サーバーのアドレスを使う(E):

優先 DNS サーバー(P):

代替 DNS サーバー(A):

☐ 終了時に設定を検証する(L)

詳細設定(V)...

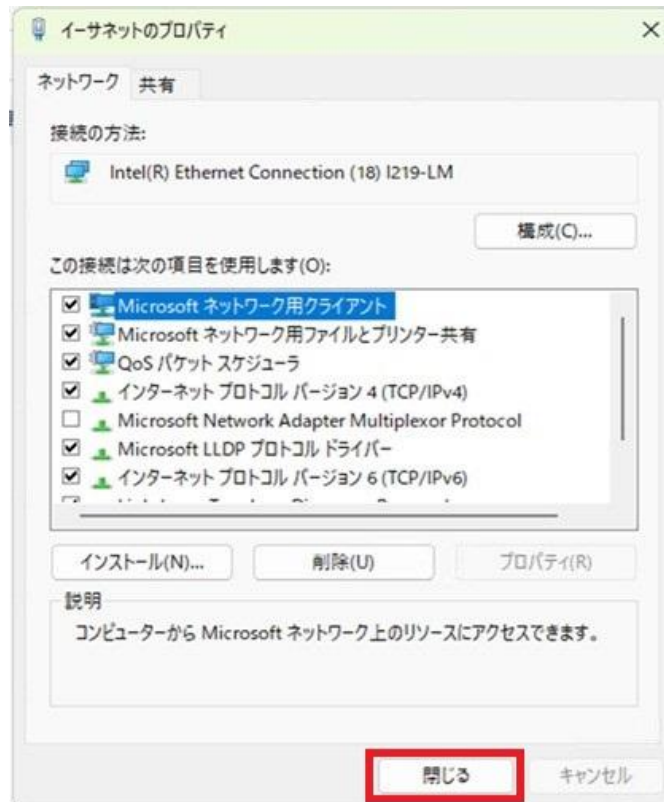
OK

キャンセル

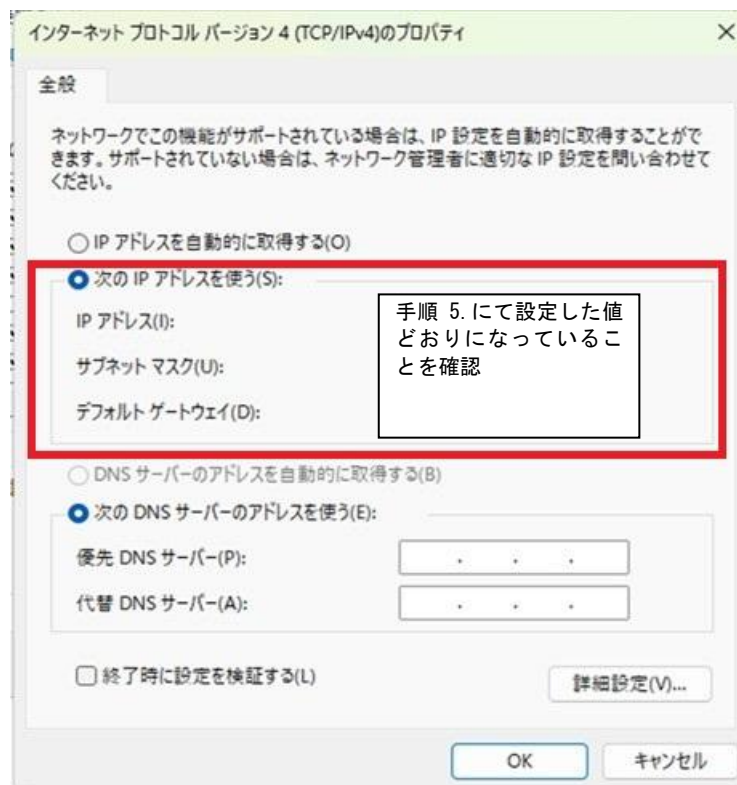
⚠ 注意事項

- ・入力する IP アドレス、サブネット マスク、デフォルト ゲートウェイについては、各都道府県にて事前に設計してください。
- ・ネットワークアダプタに関するその他の設定についても、各都道府県にて検討・設計し、必要に応じて設定してください。

6. 「イーサネットのプロパティ」画面で、「閉じる」をクリックします。



7. 手順 3. と手順 4. を実施し、「インターネットプロトコルバージョン 4 (TCP/IPv4) のプロパティ」画面で、設定した値どおりになっていることを確認し、「インターネットプロトコルバージョン 4 (TCP/IPv4) のプロパティ」画面を閉じます。



8. 「イーサネットのプロパティ」画面を閉じます。
9. 「ネットワーク接続」画面を閉じます。

1.2.4 納付金スタンドアロン端末 OS のプリンタ設定

納付金スタンドアロン端末 OS のプリンタ設定について、次に示します。

(1) プリンタドライバのインストール

プリンタを使用するに当たり、使用するプリンタのプリンタドライバをインストールする必要があります。

各都道府県にて、使用するプリンタ機器に該当するプリンタドライバを入手し、納付金スタンドアロン端末 OS へインストールしてください。インストール手順はプリンタのマニュアルを参照してください。

(2) プリンタ情報の設定

プリンタの設定内容（カラー/白黒、2in1 等）については、各都道府県にて設定を検討し、設定作業を行ってください。設定手順はプリンタのマニュアルを参照してください。

2 ミドルウェアインストール

この章では、納付金システム（スタンドアロン構成）で利用するミドルウェアの内容と設定手順について説明します。なお、本章と併せて、各ミドルウェアの関連マニュアル、オンラインヘルプなどを参照していただくことを前提とします。

2.1 ミドルウェア一覧

納付金スタンドアロン端末にて使用するミドルウェアを次に示します。

2.1.1 納付金スタンドアロン端末のミドルウェア一覧

納付金システムの納付金スタンドアロン端末で使用するミドルウェアを次に示します。

表 2-1 納付金スタンドアロン端末のミドルウェア一覧

No.	区分	製品名	バージョン	必須/任意	指定/未指定
1	Web サーバソフトウェア	Apache HTTP Server	2.4.63	必須	指定
2		Oracle WebLogic Server Web Server Plugins	12c R2 (12.2.1.4.0)	必須	指定
3	アプリケーションサーバソフトウェア	Oracle WebLogic Server Standard Edition	14c R1 (14.1.1.0.0)	必須	指定
4	帳票ソフトウェア	SVF KJNSS パック (クライアント版)	2026.0	必須	指定
5	帳票表示ソフトウェア	Adobe Acrobat Reader DC	2021.011.20039	必須	指定
6	プログラム実行環境	Oracle Java Standard Edition	1.8.0_341	必須	指定
7		Amazon Corretto	1.8.0_372	必須	指定
8	データベースソフトウェア	Oracle Database Personal Edition (※1)	19c (19.28.0.0.0)	必須	指定
9		Oracle Database Standard Edition2 (※1)	19c (19.28.0.0.0)	必須	指定
10		Oracle Client	19c (19.28.0.0.0)	必須	指定
11	バックアップソフトウェア	任意のバックアップソフトウェア	-	必須	未指定
12	ウィルス対策ソフトウェア	任意のウィルス対策ソフトウェア	-	必須	未指定
13	オフィス製品 (※2)	Microsoft Office LTSC Professional Plus	2024	必須	指定
14		Microsoft Office LTSC Standard	2024	必須	指定
15	圧縮・解凍ツール	7-Zip	22.01	必須	指定

※1 納付金スタンドアロン端末の利用者が 1 名の場合は、Oracle Database Personal Edition をインストールします。利用者が 2 名以上となる場合は、Oracle Database Standard Edition2 をインストールします。

※2 オフィス製品の購入者が都道府県の場合は、納付金スタンドアロン端末に Microsoft Office LTSC Professional Plus または Microsoft Office LTSC Standard をインストールします。オフィス製品の購入者が国保連合会の場合は、納付金スタンドアロン

端末に Microsoft Office LTSC Professional Plus をインストールします。

2.2 ミドルウェアのインストール

2.2.1 納付金スタンドアロン端末のミドルウェアインストール

(1) 対象機器と実施手順対応表

本作業の対象となる端末と、対象端末にて実施する手順を次に示します。

また、各手順の実施順序については、「(2)作業フロー」に示します。

表 2-2 実施手順対応表

No.	区分	実施手順	納付金 スタンドアロン端末
1	Web サーバソフトウェア	Web サーバソフトウェアのインストール	○
2	アプリケーションサーバソフトウェア	アプリケーションサーバソフトウェアのインストール	○
3	帳票ソフトウェア	帳票ソフトウェアのインストール	○
4	帳票表示ソフトウェア	帳票表示ソフトウェアのインストール	○
5	プログラム実行環境	プログラム実行環境のインストール	○
6	データベースソフトウェア	データベースソフトウェアのインストール	○
7	バックアップソフトウェア	バックアップソフトウェアのインストール	○
8	ウィルス対策ソフトウェア	ウィルス対策ソフトウェアのインストール	○
9	オフィス製品	オフィス製品のインストール	○
10	圧縮・解凍ツール	圧縮・解凍ツールのインストール	○

ミドルウェアインストール時における注意事項

- ・ミドルウェアのインストール先については、障害時の対応等を各都道府県で統一させるために「C:\S_Kokuho\PP」フォルダを作成し、その中にインストールしていただくことを前提とします。
- ・ミドルウェアのインストール作業に際し、各ミドルウェアのインストールおよび設定パラメータについては、事前に設計し、設定値を確定させておく必要があります。
- ・ミドルウェアのインストール後に、コンピュータ名を変更した場合、各ミドルウェアが正常に動作せず、再構築が必要となります。コンピュータ名を変更する場合は、ミドルウェアのインストール前に実施してください。

(2) 作業フロー

表 2-2 に示す実施手順について、実施手順フローを次に示します。

また、ミドルウェアの入手手順例を「付録.A ミドルウェア入手手順例」、各実施手順例を「付録.B ミドルウェアインストール手順例」に記載しておりますので、参照してください。なお、ミドルウェアのインストール手順の詳細につきましては、各ミドルウェアの関連マニュアル、オンラインヘルプなどを参照してください。

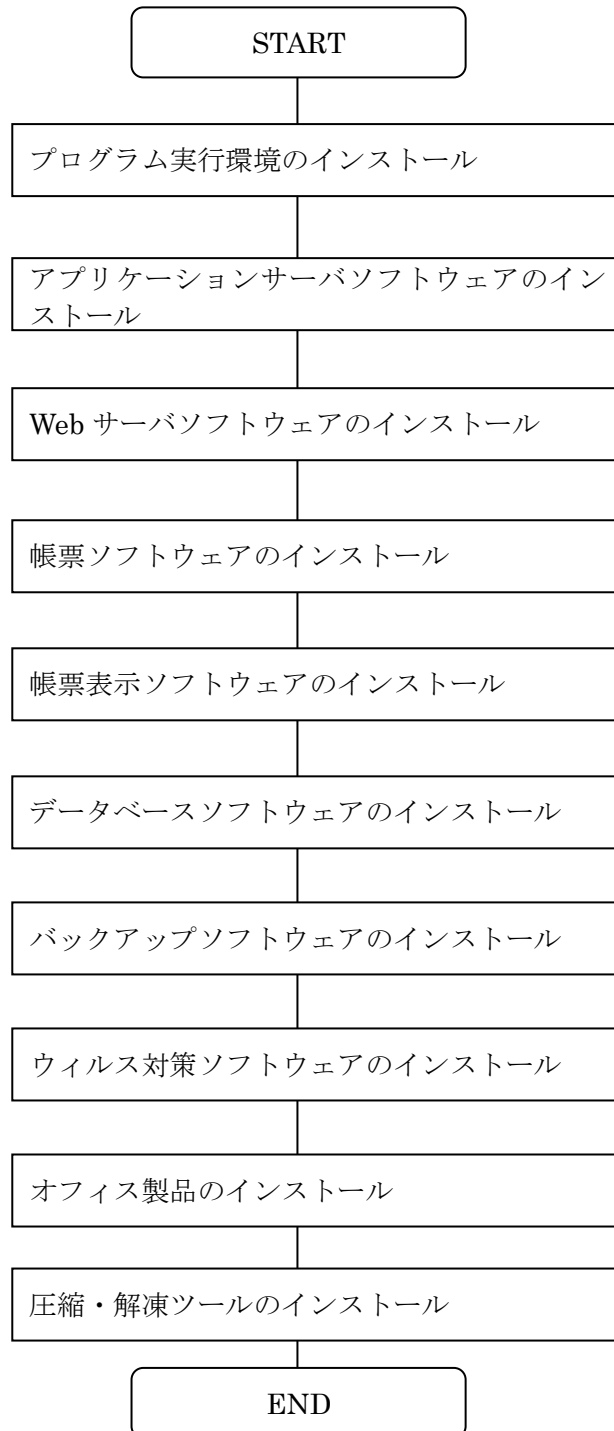


図 2-1 納付金スタンドアロン端末のミドルウェアインストール実施手順フロー

3 ミドルウェアの詳細設定

この章では、納付金システム（スタンドアロン構成）で利用するミドルウェアの詳細設定手順について説明します。なお、本章と併せて、各ミドルウェアの関連マニュアル、オンラインヘルプなどを参照していただくことを前提とします。

3.1 納付金スタンドアロン端末の詳細設定

3.1.1 対象機器と実施手順表

本作業の対象となる機器と、対象機器にて実施する手順を次に示します。

表 3-1 実施手順対応表

No.	区分	作業項目	納付金 スタンドアロン端末
1	納付金スタン ドアロン端末 OS	フォルダ作成	○
2		システム環境変数の設定	○
3		Windows Defender ファイアウォールの 設定	○
4		ローカルポリシーの設定	○
5		セキュリティパッチの適用	○
6		監査ログの設定	○
7		配信の最適化設定	○
8	データベース ソフトウェア の 詳 細 設 定 (※)	Oracle Database Personal Edition のセ ットアップ	○
9		データベースの構築	○
10		データベース構築後の設定	○
11	Web サーバソ フトウェア	Web サーバソフトウェアの詳細設定ファ イルの取得	○
12		httpd.conf ファイルの設定	○
13		Apache HTTP Server のサービス登録	○
14	アプリケーシ ョンサーバソ フトウェア	アプリケーションサーバソフトウェアの 詳細設定ファイルの取得	○
15		Oracle WebLogic Server Standard Edition のセットアップ	○
16	帳票ソフトウ ェア	SVF KJNSS パック (クライアント版) 環 境設定	○
		Java 入れ替え手順	○
17	バックアップ ソフトウェア	バックアップソフトウェアの詳細設定	○
18	ウィルス対策 ソフトウェア	ウィルス対策ソフトウェアの詳細設定	○

※ 本手順では、Oracle Database Personal Edition をインストールした場合の設定手順例となります。Oracle Database Standard Edition2 をインストールした場合は、「インストールガイド (機器構築編) (国保連委託構成)」の「3.1.3 データベースソフトウェアの詳細設定」を参照してください。

(1) 作業フロー

表 3-1 に示す実施手順について、実施手順フローを次に示します。

なお、ミドルウェアの設定手順の詳細につきましては、各ミドルウェアの関連マニュアル、オンラインヘルプなどを参照してください。

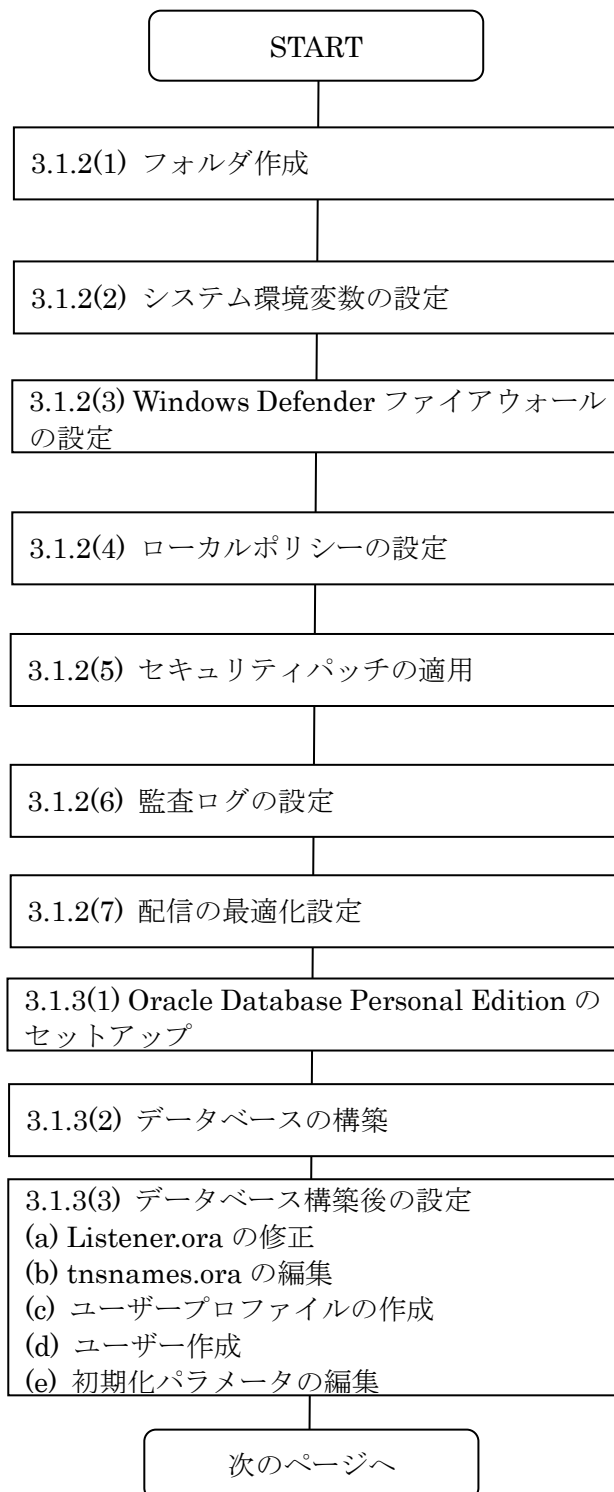


図 3-1 納付金スタンドアロン端末のミドルウェアインストール実施手順フロー
(1/2)



図 3-2 納付金スタンドアロン端末のミドルウェアインストール実施手順フロー
(2/2)

3.1.2 納付金スタンドアロン端末 OS の詳細設定

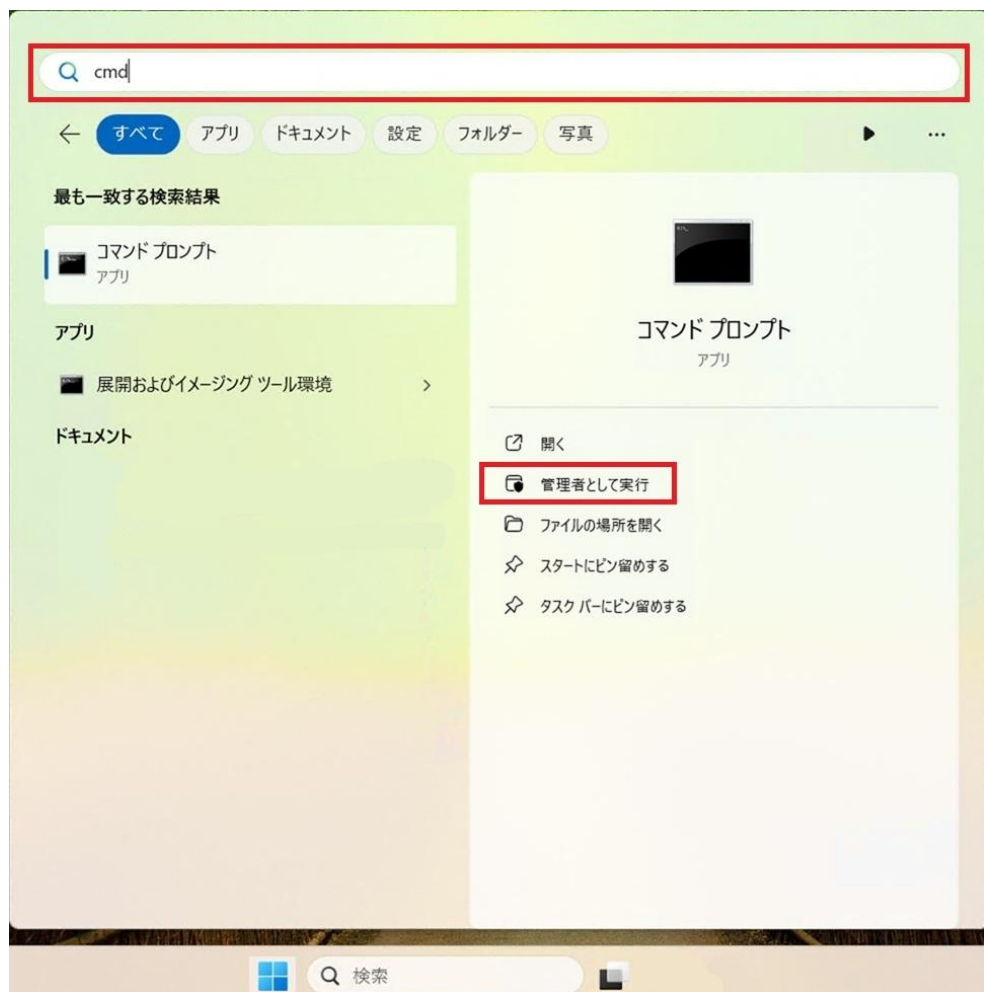
納付金システムの詳細設定時に必要な納付金スタンドアロン端末 OS の詳細設定手順を、次に示します。

⚠ 注意事項

以降の環境設定作業は、すべて「Administrator」権限で実施します。

(1) フォルダ作成

1. [スタート]アイコンをクリックし、検索ボックス欄に「cmd」と入力し、コマンドプロンプトの「管理者として実行」をクリックします。



2. コマンドプロンプト画面で、下記画面例を参考に次のコマンドを入力し実行します。(※ △は半角スペースを表します。)

mkdir△“表 3-2 に示すフォルダパス”



```

管理者: コマンド プロンプト
Microsoft Windows [Version 10.0.26100.1742]
(c) Microsoft Corporation. All rights reserved.

C:\Users\Administrator>mkdir C:\S_Kokuho\PP\Weblogic\user_projects\domains\noufukin\myJar
  
```

表 3-2 作成フォルダ

No	対象機器	フォルダパス
1	納付金スタンド アロン端末	C:\S_Kokuho\PP\Weblogic\user_projects\domains\ noufukin\myJar
2		C:\temp\com\myClasses

 注意事項

- ・画面イメージは、表 3-2 の No.1 「C:\S_Kokuho\PP\Weblogic\user_projects\domains\noufukin\myJar」フォルダを作成する例となります。
- ・納付金システムが使用するフォルダについては、「インストールガイド (アプリケーション編)」を参照ください。

3. エクスプローラーを起動し、手順 2. で作成したフォルダが存在することを確認し、エクスプローラーを閉じます。



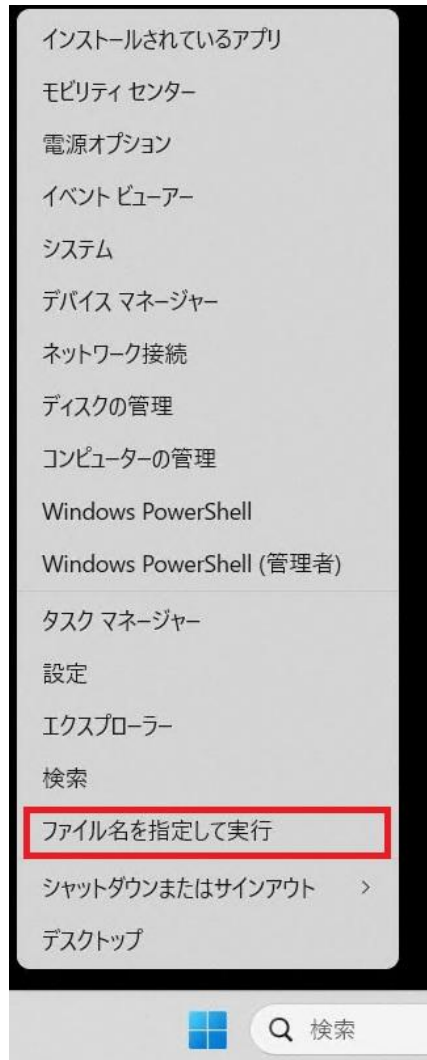
⚠ 注意事項

画面イメージは、表 3-2 の No.1 「C:\S_Kokuho\PP\Weblogic\user_projects\domains\noufukin\myJar」フォルダを作成する例となります。

4. 表 3-2 に記載されているフォルダパス分、手順 2. ~手順 3. を繰り返します。
5. コマンドプロンプトを閉じます。

(2) システム環境変数の設定

1. [スタート]アイコンを右クリックし、「ファイル名を指定して実行」をクリックします。



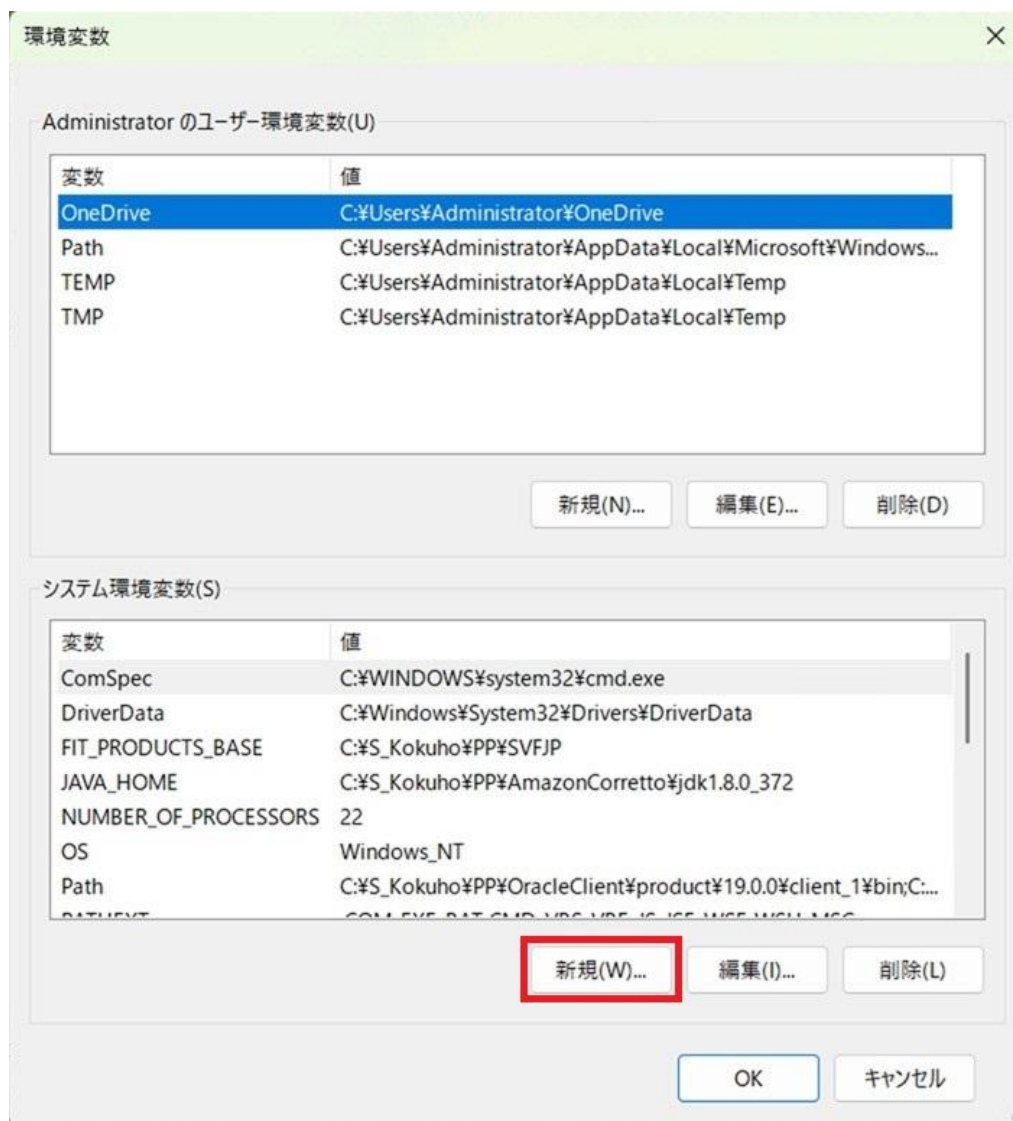
2. 「ファイル名を指定して実行」画面で、「名前」に「sysdm.cpl」と入力し、「OK」をクリックします。



3. 「システムのプロパティ」画面で、「詳細設定」タブをクリックし、「環境変数」をクリックします。



4. 「環境変数」画面で、「システム環境変数」欄の「新規」をクリックします。



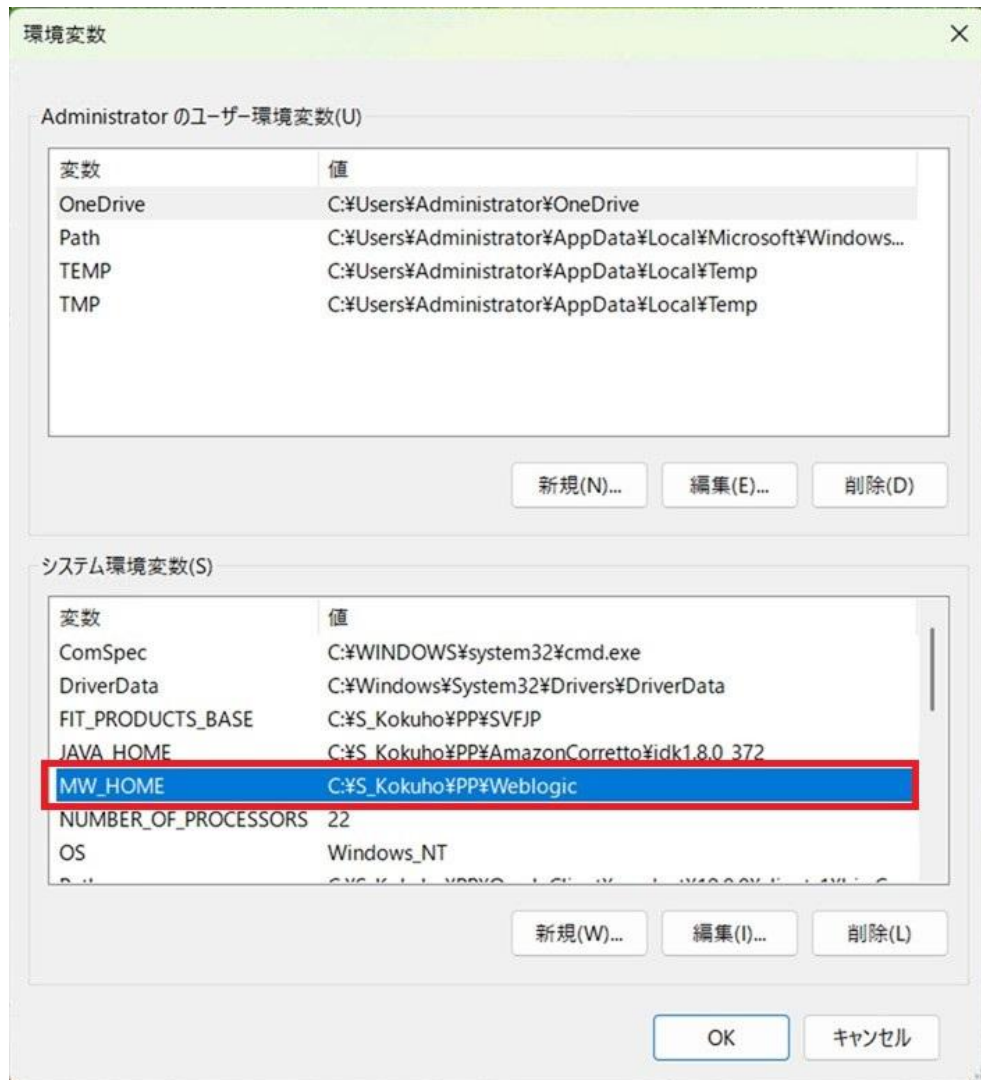
5. 「新しいシステム変数」画面で、下記画面例を参考に表 3-3 の設定値を入力し、「OK」をクリックします。



表 3-3 システム環境変数 1

No	対象機器	変数名	変数値
1	納付金スタンドアロン端末	MW_HOME	C:\S_Kokuho\PP\Weblogic

6. 「環境変数」画面で、手順 5. にて追加した変数が「システム環境変数」欄に追加されていることを確認します。



7. 「システム環境変数」欄で、下記画面例を参考に表 3-4 の設定値を選択し、「編集」をクリックします。



表 3-4 システム環境変数 2

No.	対象機器	設定項目	設定値
1	納付金スタンドアロン端末	変数	Path

8. 「環境変数名の編集」画面で、「新規」をクリックし、下記画面例を参考に表 3-5 の設定値を入力し、「OK」をクリックします。

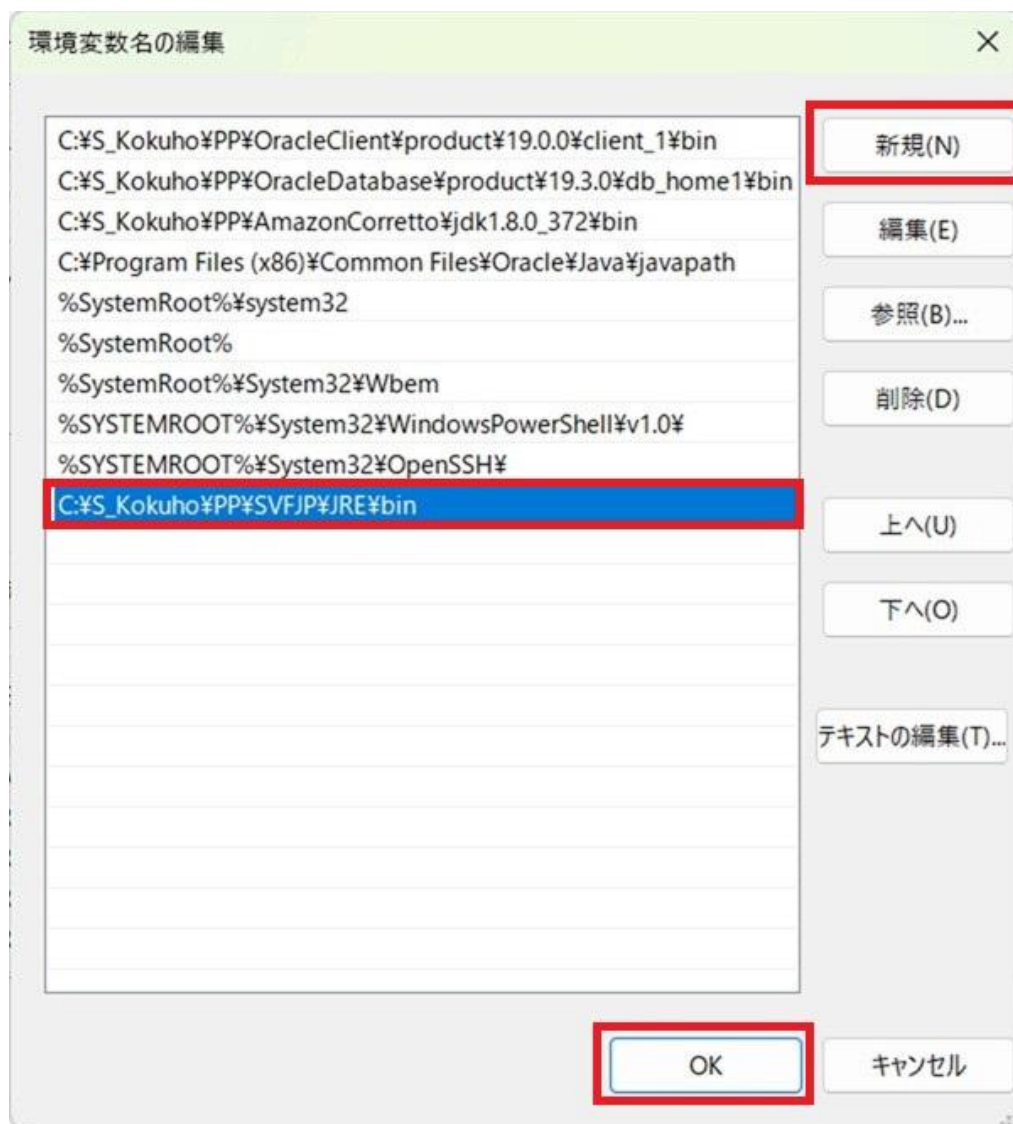
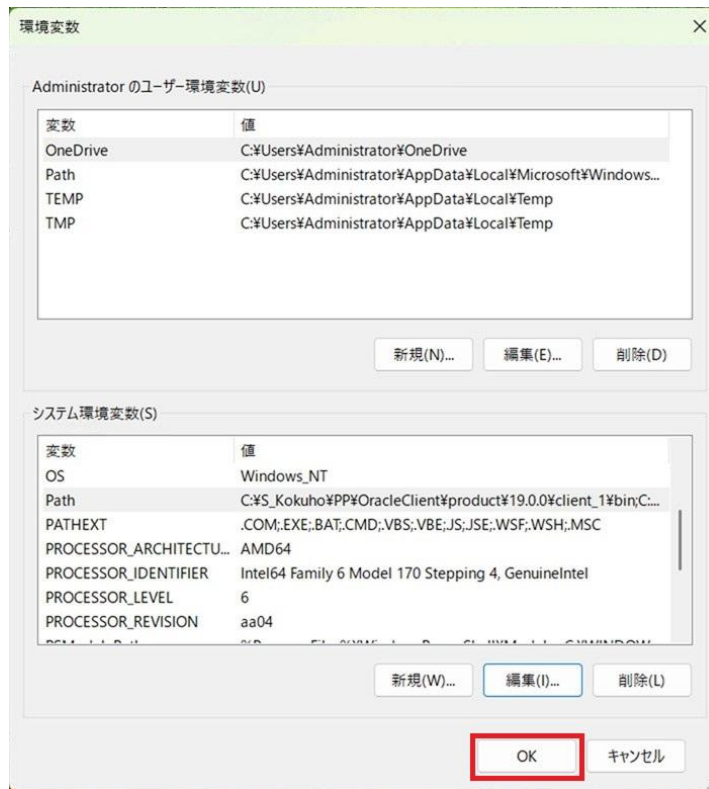


表 3-5 システム環境変数 3

No	対象機器	変数名	変数値
1	納付金スタンドアロン端末	Path	C:\S_Kokuho\PP\SVFJP\JRE\bin

9. 「環境変数」画面で、「OK」をクリックします。

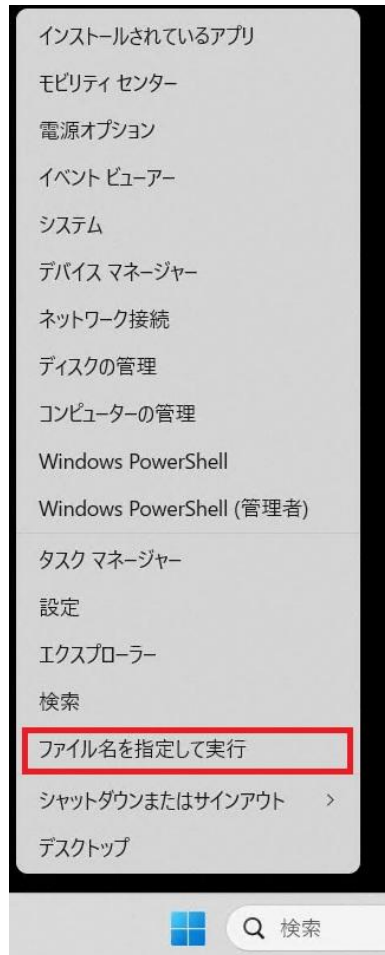


10. 「システムのプロパティ」画面で、「OK」をクリックします。



(3) Windows Defender ファイアウォールの設定

1. [スタート]アイコンを右クリックし、「ファイル名を指定して実行」をクリックします。



2. 「ファイル名を指定して実行」画面で、「名前」に「control」と入力し、「OK」をクリックします。



3 ミドルウェアの詳細設定

3. 「コントロールパネル」画面で、「表示方法：小さいアイコン▼」と表示されていない場合は、プルダウンから、「小さいアイコン」をクリックします。



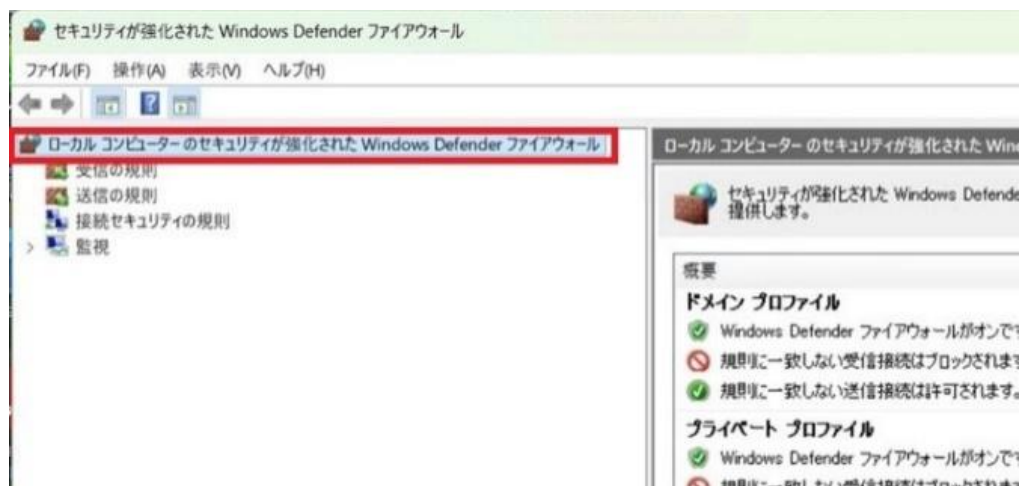
4. 「すべてのコントロールパネル項目」画面で、「Windows Defender ファイアウォール」をクリックします。



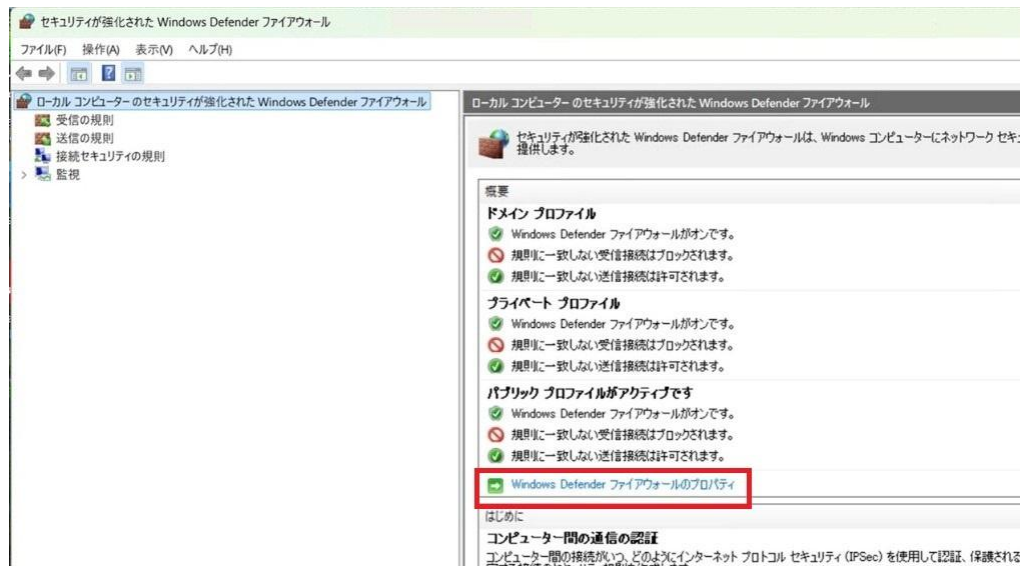
5. 「Windows Defender ファイアウォール」画面で、画面左側から「詳細設定」をクリックします。



6. 「セキュリティが強化された Windows Defender ファイアウォール」画面で、画面左側から「ローカルコンピュータのセキュリティが強化された Windows Defender ファイアウォール」をクリックします。



7. 「概要」欄にある「Windows Defender ファイアウォールのプロパティ」をクリックします。



8. 「ローカルコンピューターのプロパティのセキュリティが強化された Windows Defender ファ...」画面で、「ドメインプロファイル」タブをクリックし、「状態」-「ファイアウォールの状態」のプルダウンから「無効」をクリックし、「適用」をクリックします。



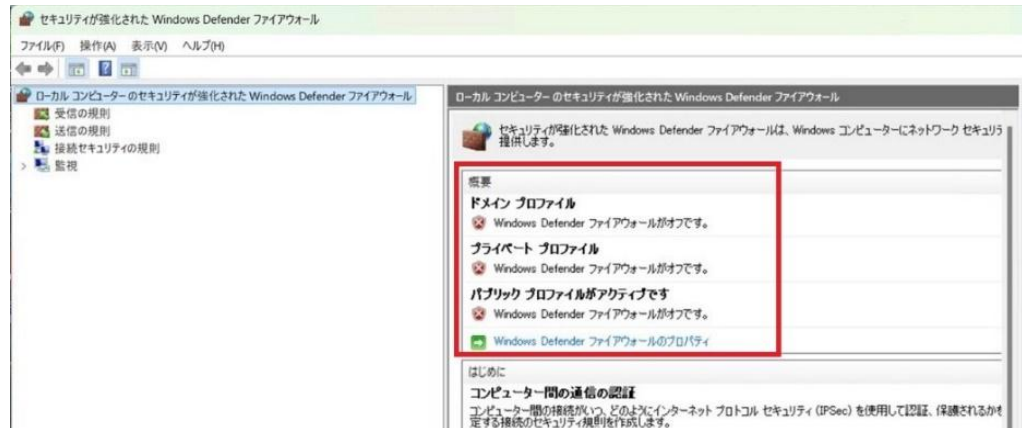
9. 「プライベートプロファイル」タブをクリックし、「状態」-「ファイアウォールの状態」のプルダウンから「無効」をクリックし、「適用」をクリックします。



10. 「パブリックプロファイル」タブをクリックし、「状態」-「ファイアウォールの状態」のプルダウンから「無効」をクリックし、「適用」をクリックし、「OK」をクリックします。



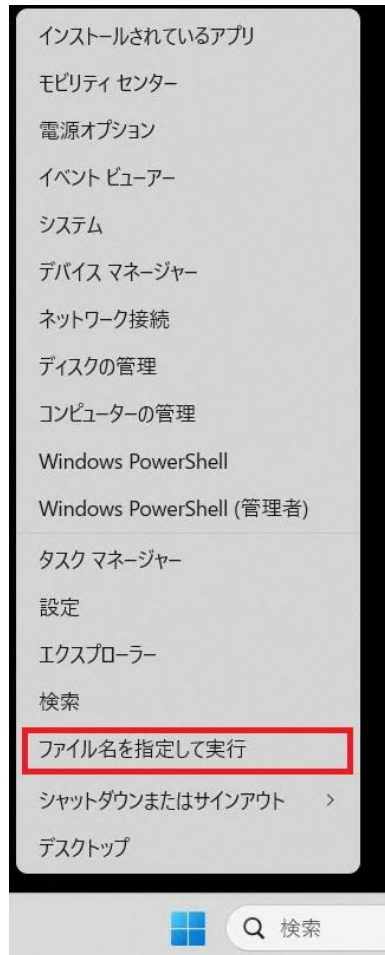
11. 「セキュリティが強化された Windows Defender ファイアウォール」画面で、「概要」欄に表示されているすべてのプロファイルにおいて、「Windows Defender ファイアウォールがオフです。」と表示されていることを確認し、「セキュリティが強化された Windows Defender ファイアウォール」画面を閉じます。



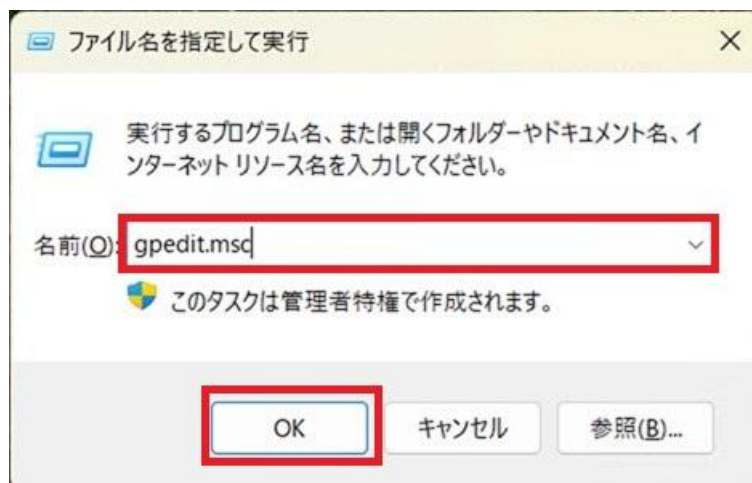
12. 「Windows Defender ファイアウォール」画面を閉じます。

(4) ローカルポリシーの設定

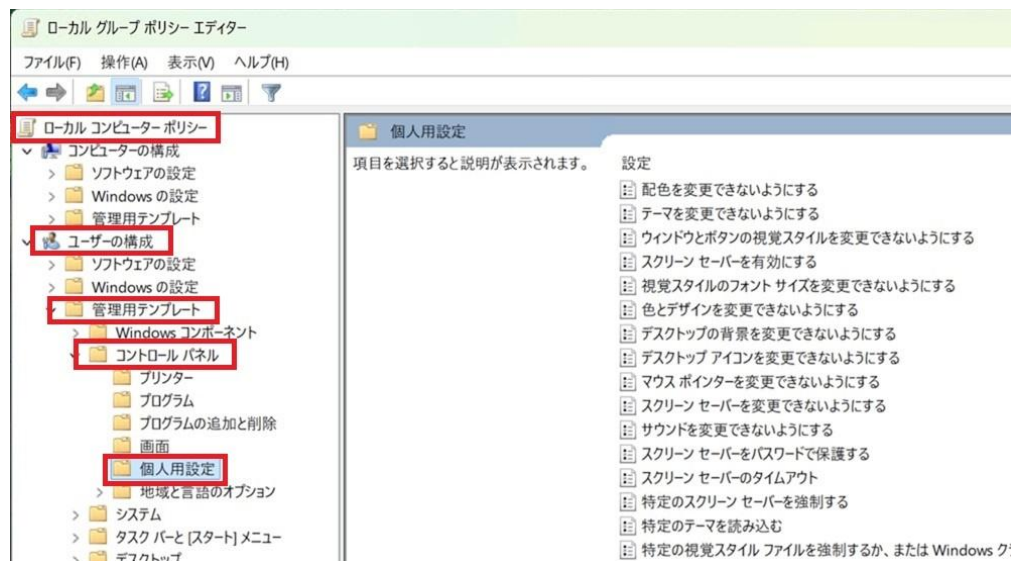
1. [スタート]アイコンを右クリックし、「ファイル名を指定して実行」をクリックします。



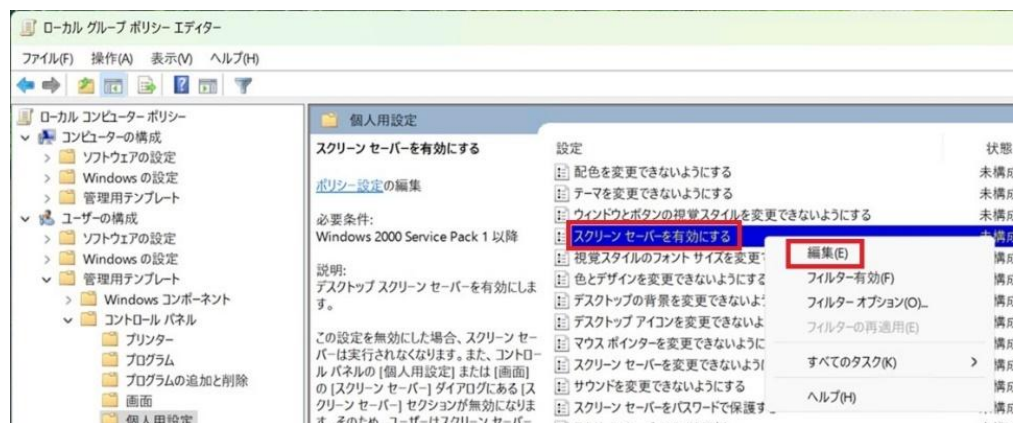
2. 「ファイル名を指定して実行」画面で、「名前」に「gpedit.msc」と入力し、「OK」をクリックします。



3. 「ローカルグループポリシーエディター」画面で、画面左側から「ローカルコンピューターポリシー」-「ユーザーの構成」-「管理用テンプレート」-「コントロールパネル」-「個人用設定」をクリックします。



4. 画面右側の「個人用設定」の設定列から、表 3-6 に記載されている設定項目を右クリックし、「編集」をクリックします。



⚠ 注意事項

画面イメージは表 3-6 の No.1 を設定する場合となります。

表 3-6 ローカルグループポリシー（個人用設定）

No.	対象機器	設定項目	設定値
1	納付金スタンドアロン端末	スクリーンセーバーを有効にする	有効
2		スクリーンセーバーを変更できないようにする	有効
3		スクリーンセーバーをパスワードで保護する	有効
4		スクリーンセーバーのタイムアウト	有効
5		スクリーンセーバーを起動するまでの時間	600
6		特定のスクリーンセーバーを強制する	有効
7		スクリーンセーバーの実行可能ファイル	C:\Windows\System

		名	m32\scrnsave.scr
--	--	---	------------------

5. 手順 4. にて選択した設定項目の編集画面が表示されるので、表 3-6 の設定値を設定し、「適用」をクリックし、「OK」をクリックします

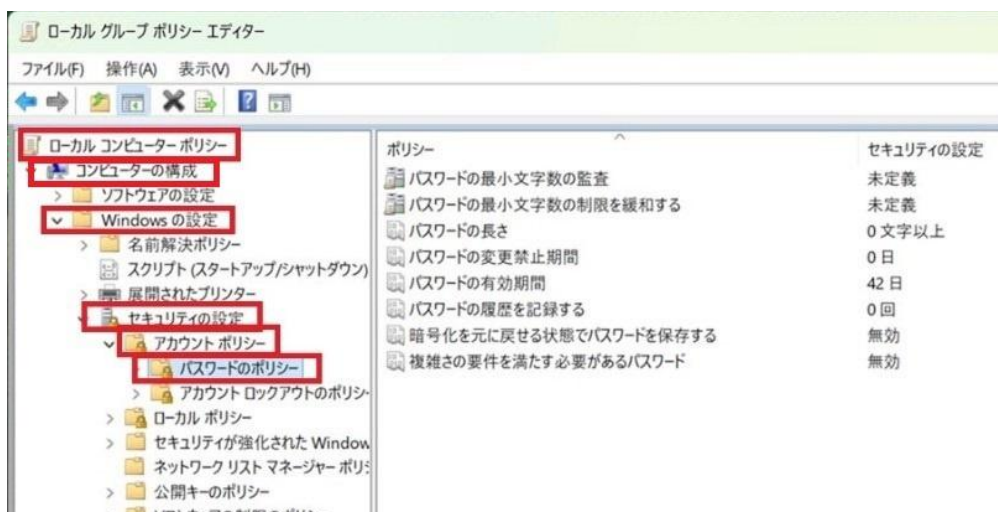


⚠ 注意事項

画面イメージは表 3-6 の No.1 を設定した場合となります。

6. 表 3-6 に記載されている設定項目数分、手順 4. と手順 5. を繰り返します。

7. 画面左側から「ローカルコンピューターポリシー」－「コンピューターの構成」－「Windows の設定」－「セキュリティの設定」－「アカウントポリシー」－「パスワードのポリシー」をクリックします。



8. 画面右側のポリシー列から、表 3-7 に記載されている設定項目を右クリックし、「プロパティ」をクリックします。

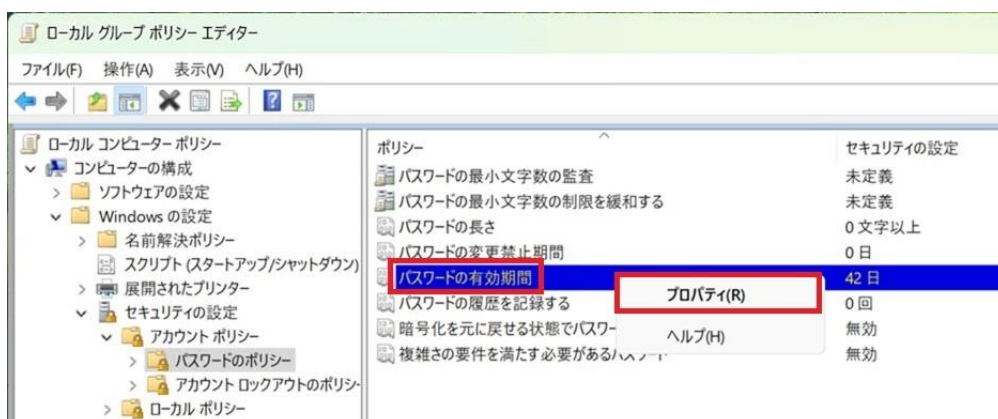


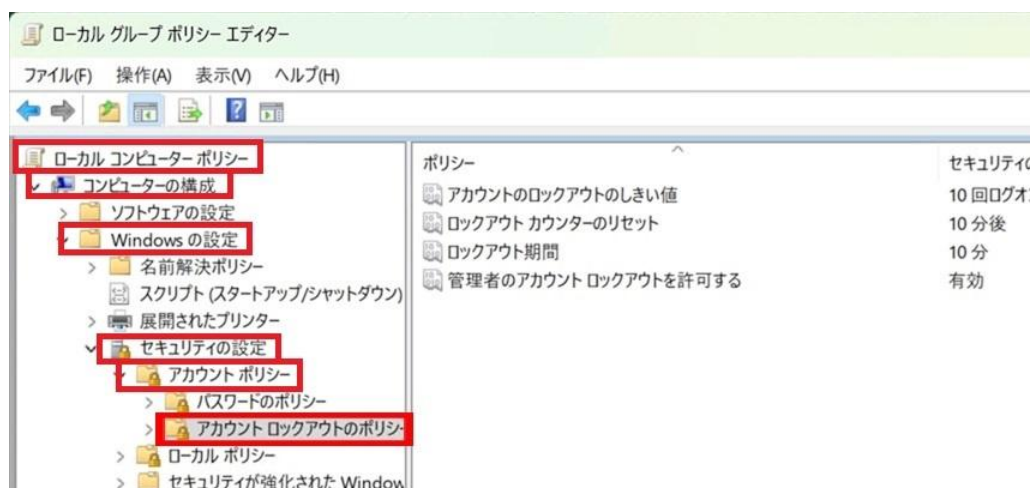
表 3-7 ローカルグループポリシー（パスワードのポリシー）

No.	対象機器	設定項目	設定値
1	納付金スタンドアロン端末	パスワードの有効期間	92 日

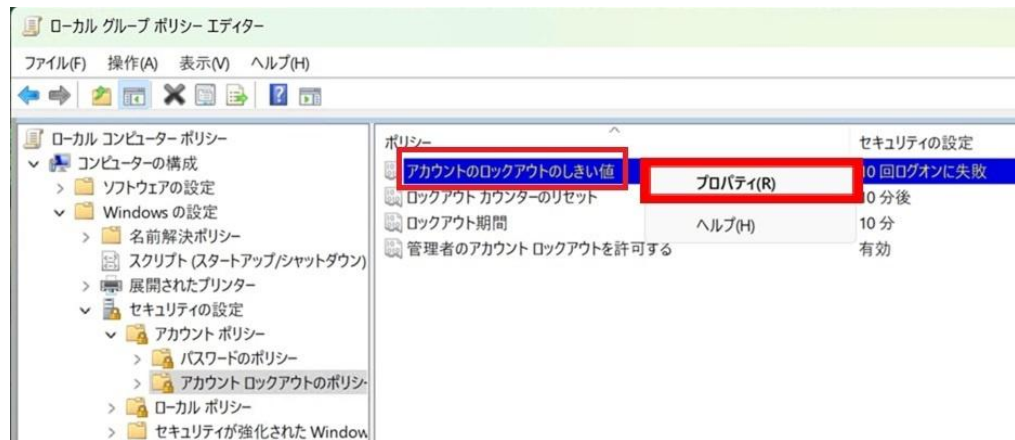
9. 「パスワードの有効期間のプロパティ」画面で、表 3-7 の設定値を設定し、「適用」をクリックし、「OK」をクリックします。



10. 画面左側から「ローカルコンピューターポリシー」-「コンピューターの構成」-「Windows の設定」-「セキュリティの設定」-「アカウントポリシー」-「アカウントロックアウトのポリシー」をクリックします。



11. 画面右側のポリシー列から、表 3-8 に記載されている設定項目を右クリックし、「プロパティ」をクリックします。



⚠ 注意事項

画面イメージは、表 3-8 の No.1 を設定する場合となります。

表 3-8 ローカルグループポリシー（アカウントロックアウトのポリシー）

No.	対象機器	設定項目	設定値
1	納付金スタンド アロン端末	アカウントのロックアウトのしき い値	5 回ログインに失敗
2		ロックアウトカウンターのリセッ ト	30 分後
3		ロックアウト期間	60 分

12. 手順 11. にて選択した設定項目のプロパティ画面が表示されるので、表 3-8 の設定値を設定し、「適用」をクリックし、「OK」をクリックします。



 注意事項

- ・画面イメージは、表 3-8 の No.1 を設定した場合となります。
- ・「提案された値の変更」画面が表示された場合は、「OK」をクリックしてください。

13. 表 3-8 に記載されている設定項目数分、手順 11. と手順 12. を繰り返します。

14. 「ローカルグループポリシーエディター」画面を閉じます。

15. 納付金スタンドアロン端末を再起動します。

(5) セキュリティパッチの適用

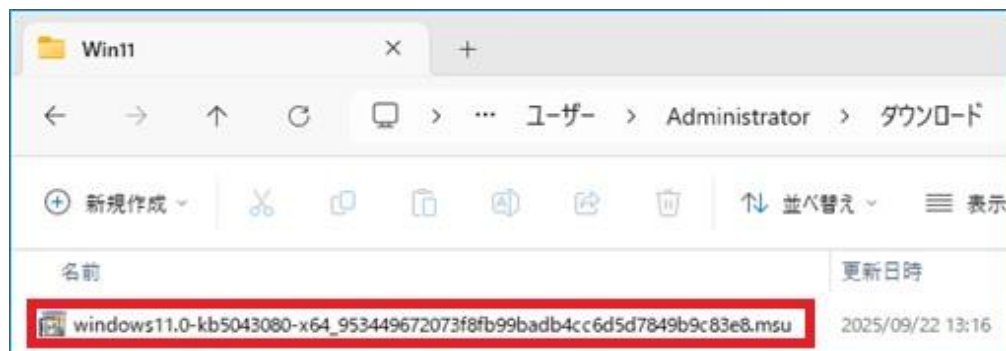
納付金スタンドアロン端末に、セキュリティパッチを適用します。

⚠ 注意事項

- ・適用するセキュリティパッチについては、納付金スタンドアロン端末の構築時点までの公開パッチを適用してください。
- ・本番稼働後にセキュリティパッチを適用する場合は、適用するパッチより前に公開されたパッチについても適用してください。
- ・適用するセキュリティパッチは、事前にダウンロードをしてください。
- ・「(5)セキュリティパッチの適用」手順では、拡張子が「.cab」「.exe」「.msu」のセキュリティパッチについての適用する手順となります。他の拡張子のセキュリティパッチを適用する場合は、適用手順を調査した上で実施してください。

参考として、2025 年 8 月末時点のセキュリティパッチについては、「付録.C セキュリティパッチ一覧」を参照してください。

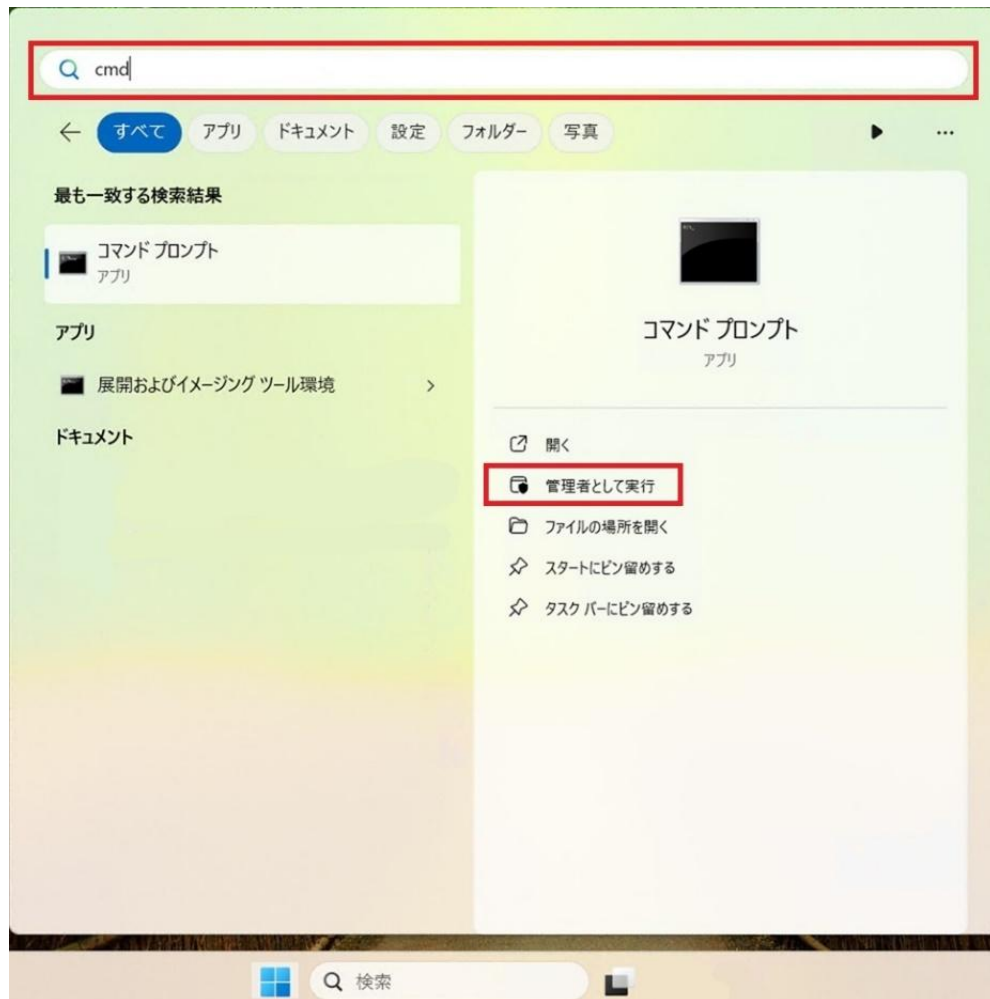
1. 適用するセキュリティパッチを「資材格納フォルダ」に格納します。(※ 「資材格納フォルダ」は任意のフォルダとします。)



⚠ 注意事項

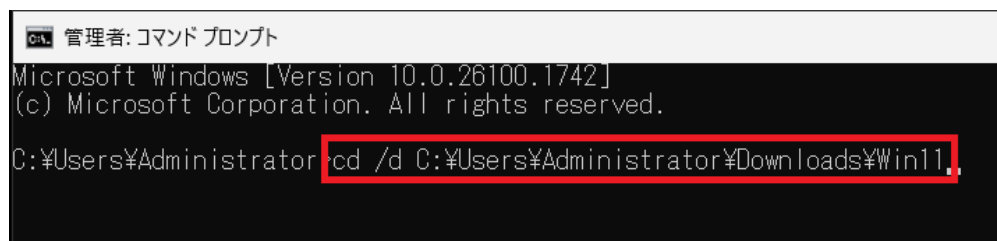
画面イメージは「資材格納フォルダ」を「C:\Users\Administrator\Downloads\Win11」とし、拡張子が「.msu」のセキュリティパッチを適用する場合となります。

2. [スタート]アイコンをクリックし、検索ボックス欄に「cmd」と入力し、コマンドプロンプトの「管理者として実行」をクリックします。



3. コマンドプロンプト画面で、次のコマンドを入力します。(※ △は半角スペースを表します。)

cd△/d△“資材格納フォルダ”

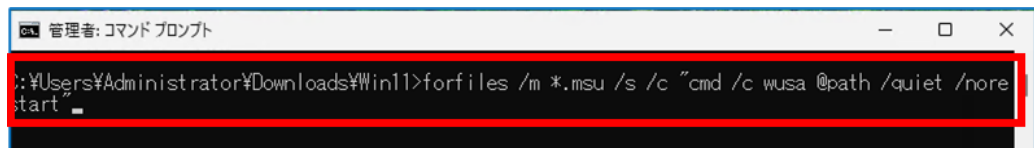


⚠ 注意事項

画面イメージは「資材格納フォルダ」を「C:\Users\Administrator\Downloads\Win11」とした場合となります。

4. 次のコマンドをコピーし、コマンドプロンプトに貼り付けて実行します。

```
forfiles /m *.msu /s /c "cmd /c wusa @path /quiet /norestart"
```



⚠ 注意事項

- ・画面イメージは、拡張子が「.msu」のセキュリティパッチを適用する場合となります。
- ・拡張子が「.cab」のセキュリティパッチを適用する場合は、以下コマンドを実行してください。

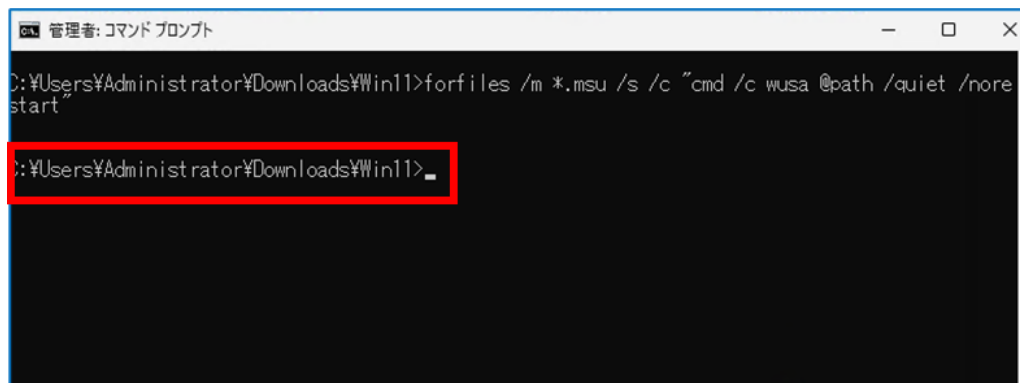
```
forfiles /m *.cab /s /c "cmd /c dism /online /add-package=@path /norestart"
```

- ・拡張子が「.exe」のセキュリティパッチを適用する場合は、以下コマンドを実行してください。

```
forfiles /m *.exe /c "cmd /c @file /q /norestart"
```

5. セキュリティパッチのインストールが実行されるので、しばらく待ちます。(しばらく待つと、手順 6. の画面が表示されます。)

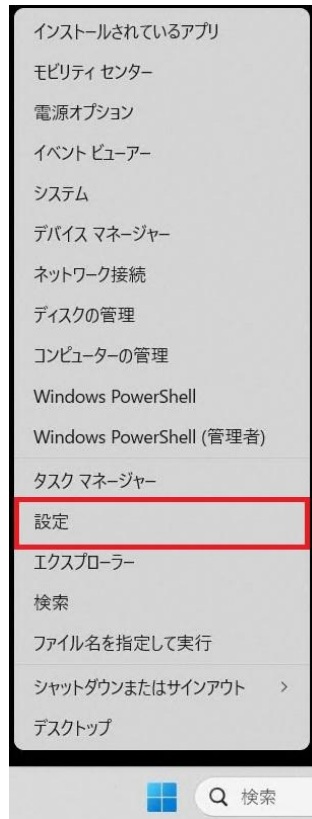
6. プロンプトが表示されることを確認し、コマンドプロンプトを閉じます。



7. 納付金スタンドアロン端末を再起動します。

8. 納付金スタンドアロン端末にログインします。

9. [スタート]アイコンを右クリックし、「設定」をクリックします。



10. 「設定」画面を最大化し、画面左側のメニューから「Windows Update」をクリックし、「更新の履歴」をクリックします。

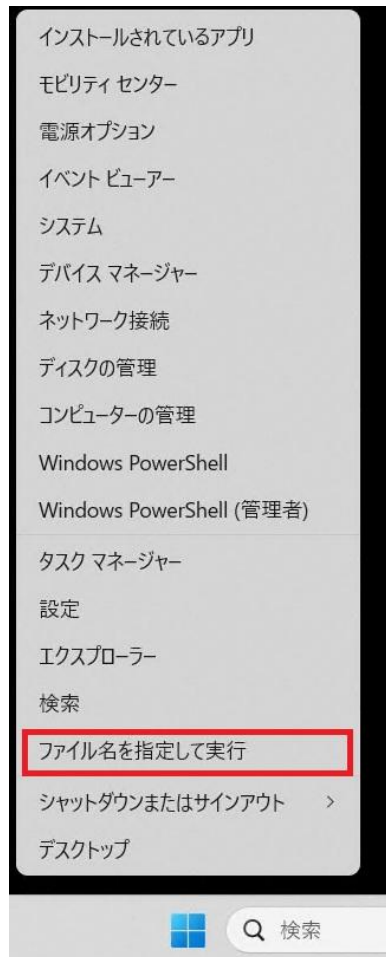


11. 手順 1. ～手順 6. にて適用したセキュリティパッチが存在することを確認します。



(6) 監査ログの設定

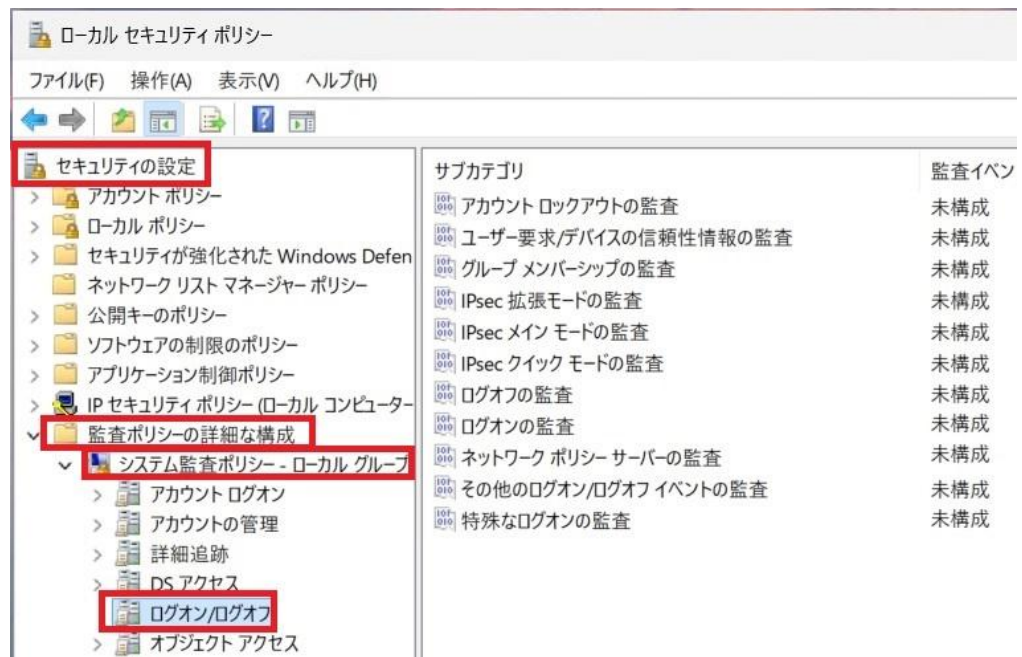
1. [スタート]アイコンを右クリックし、「ファイル名を指定して実行」をクリックします。



2. 「ファイル名を指定して実行」画面で、「名前」に「secpol.msc」と入力し、「OK」をクリックします。



3. 「ローカルセキュリティポリシー」画面で、画面左側から「セキュリティの設定」
 - 「監査ポリシーの詳細な構成」 - 「システム監査ポリシー - ローカルグループ」
 - 「ログオン/ログオフ」をクリックします。



4. 画面右側の「サブカテゴリ」の設定列から、表 3-9 に記載されている設定項目を
 右クリックし、「プロパティ」をクリックします。

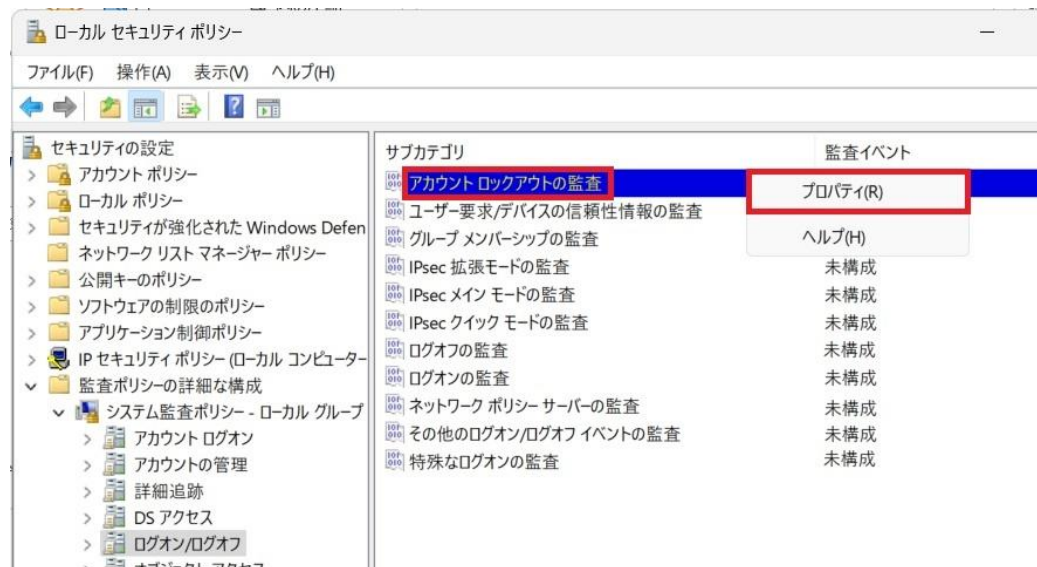
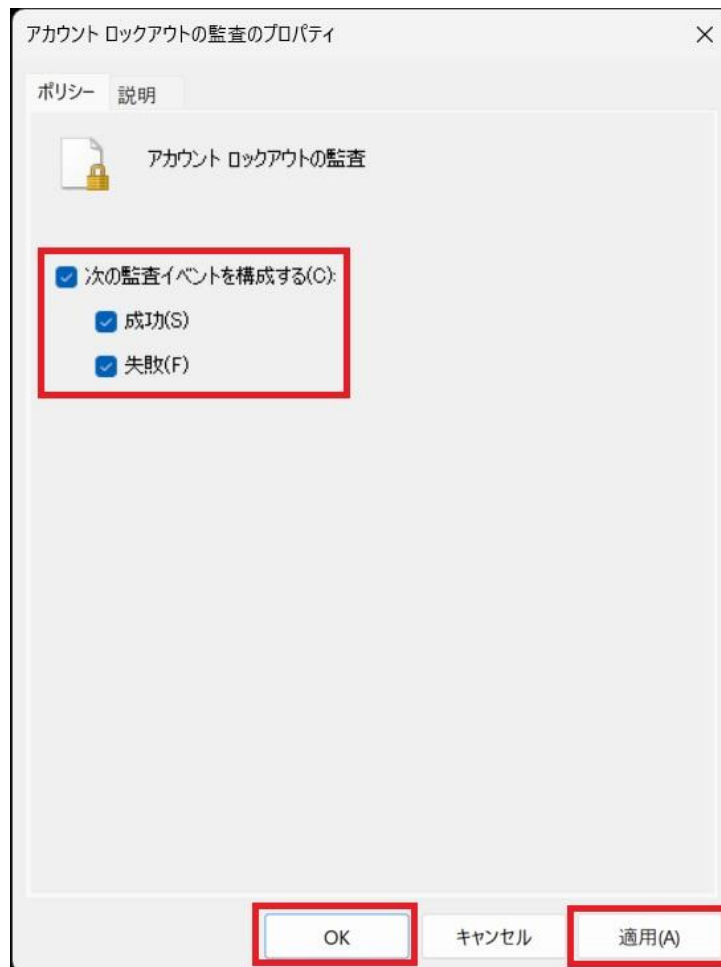


表 3-9 監査ログの設定

No.	対象機器	設定項目
1	納付金スタンドアロン端末	アカウント ロックアウトの監査
2		ログオフの監査
3		ログオンの監査
4		ネットワークポリシー サーバーの監査

5. 手順 4. にて選択した設定項目のプロパティ画面が表示されるので、「次の監査イベントを構成する」、「成功」および「失敗」をチェックし、「適用」をクリックし、「OK」をクリックします。



6. 表 3-9 に記載されている設定項目数分、手順 4. と手順 5. を繰り返します。

7. 「ローカルセキュリティポリシー」画面を閉じます。

8. 納付金スタンドアロン端末を再起動します。

(7) 配信の最適化設定

1. [スタート]アイコンを右クリックし、「設定」をクリックします。



2. 「設定」画面を最大化し、画面左側のメニューから「Windows Update」をクリックします。



3. 「詳細オプション」をクリックします。

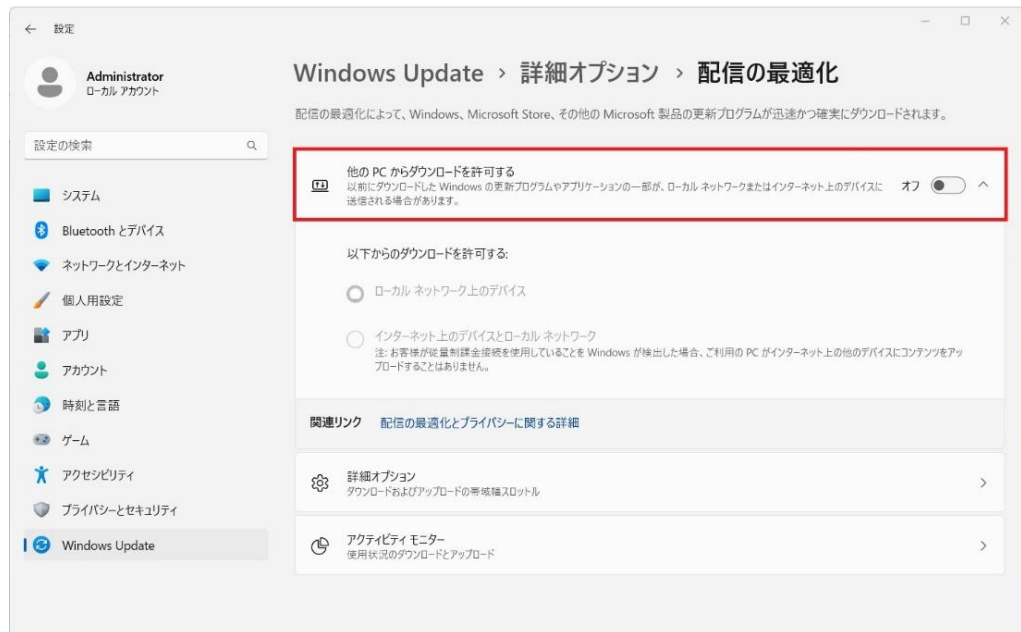


4. 「配信の最適化」をクリックします。



3 ミドルウェアの詳細設定

5. 「他の PC からダウンロードを許可する」を「オフ」にします。



6. 「設定」画面を閉じます。

3.1.3 データベースソフトウェアの詳細設定

納付金システムを動作させるために必要なデータベースの詳細設定手順を、次に示します。

⚠ 注意事項

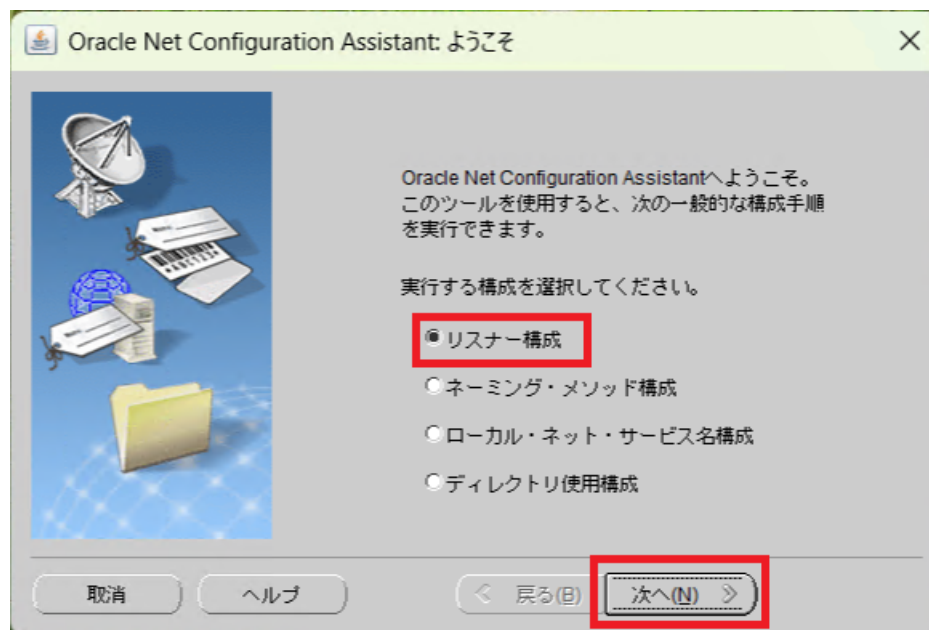
以降の環境設定作業は、すべて「Administrator」権限で実施します。

(1) Oracle Database Personal Edition のセットアップ

1. [スタート]アイコンから、「すべてのアプリ」 - 「Oracle - OraDB19Home1」 - 「Net Configuration Assistant」をクリックします。



2. 「Oracle Net Configuration Assistant: ようこそ」画面で、「リスナー構成」を選択し、「次へ」をクリックします。



3. 「Oracle Net Configuration Assistant: リスナーの構成-リスナー」画面で、「追加」を選択し、「次へ」をクリックします。



4. 「Oracle Net Configuration Assistant: リスナーの構成-リスナー名」画面で、「リスナー名」に下記画面例を参考に表 3-10 のリスナー名を入力し、「Oracle ホームのユーザー・パスワード」を入力し、「次へ」をクリックします。

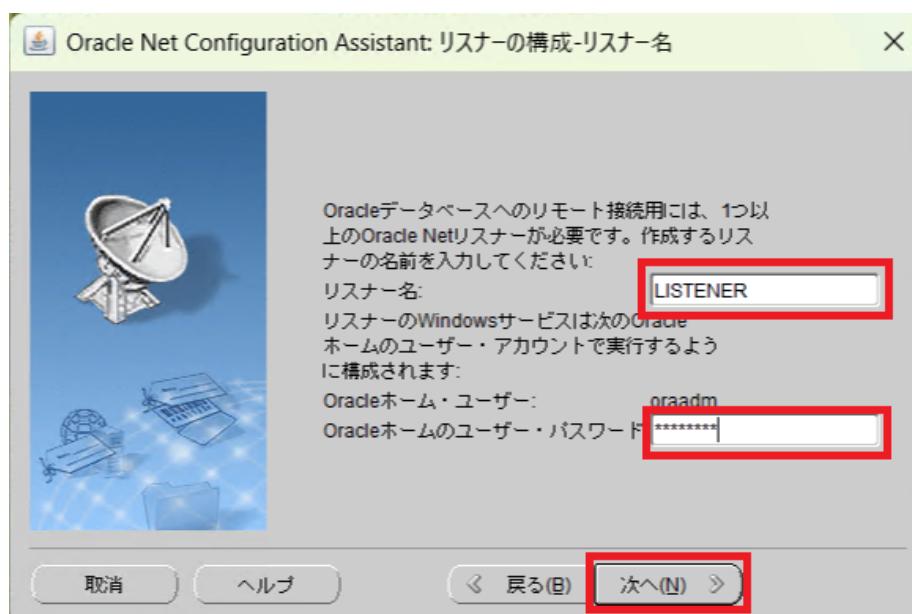


表 3-10 リスナー名

No.	対象機器	リスナー名
1	納付金スタンドアロン端末	LISTENER

⚠ 注意事項

Oracle ホームのユーザー・パスワードは、「付録.B.2 ミドルウェアのインストール」の「(8) Oracle Database Personal Edition のインストール」で設定し

たパスワードを入力してください。

5. 「Oracle Net Configuration Assistant: リスナーの構成-プロトコルの選択」画面で、「選択済プロトコル」欄に「TCP」があることを確認し、「次へ」をクリックします。



6. 「Oracle Net Configuration Assistant: リスナーの構成-TCP/IP プロトコル」画面で、「標準ポート番号の 1521 を使用」に選択されていることを確認し、「次へ」をクリックします。



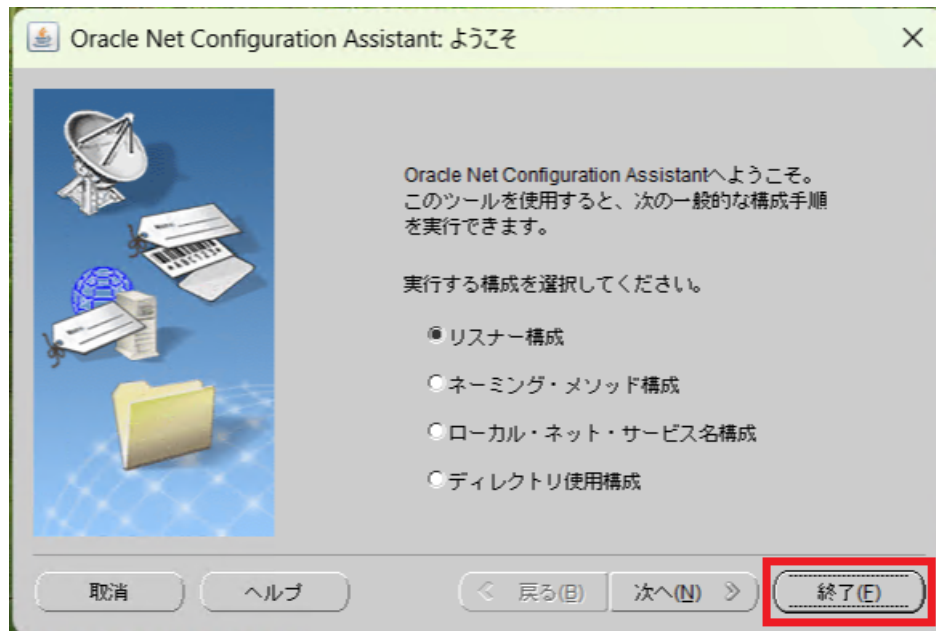
7. 「Oracle Net Configuration Assistant: リスナーの構成-リスナーを追加しますか」画面で、「いいえ」を選択し、「次へ」をクリックします。



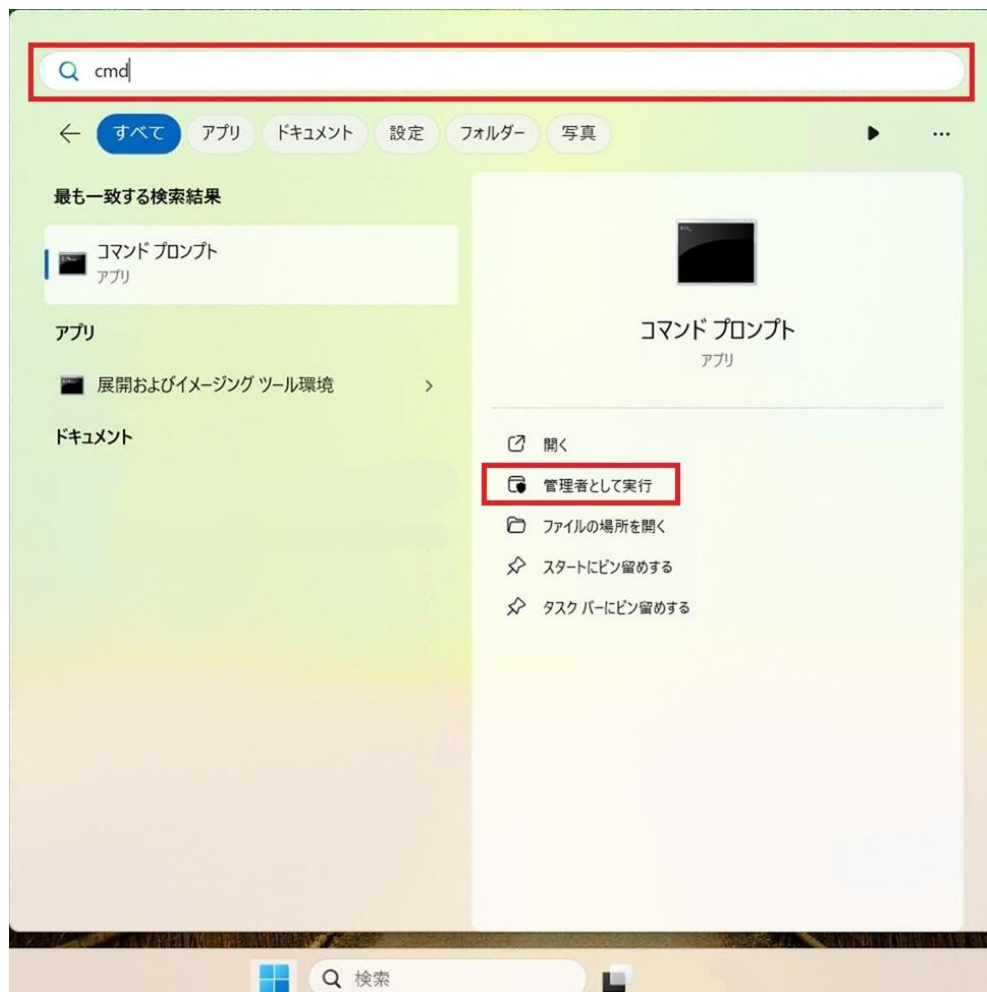
8. 「Oracle Net Configuration Assistant: リスナーの構成が完了」画面で、「次へ」をクリックします。



9. 「Oracle Net Configuration Assistant: ようこそ」画面で、「終了」をクリックします。

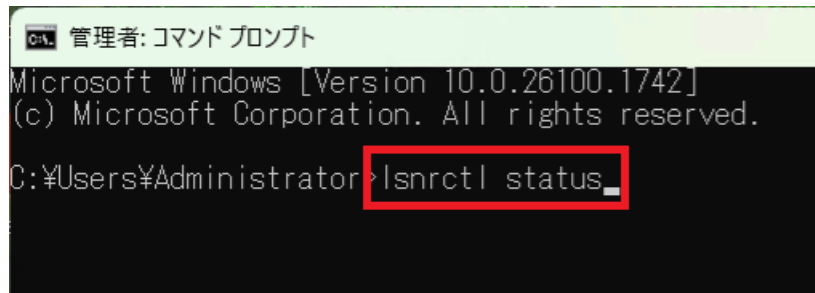


10. [スタート]アイコンをクリックし、検索ボックス欄に「cmd」と入力し、コマンドプロンプトの「管理者として実行」をクリックします。



11. コマンドプロンプト画面で、次のコマンドをコピーし、コマンドプロンプトに貼り付けて実行します。

lsnrctl status

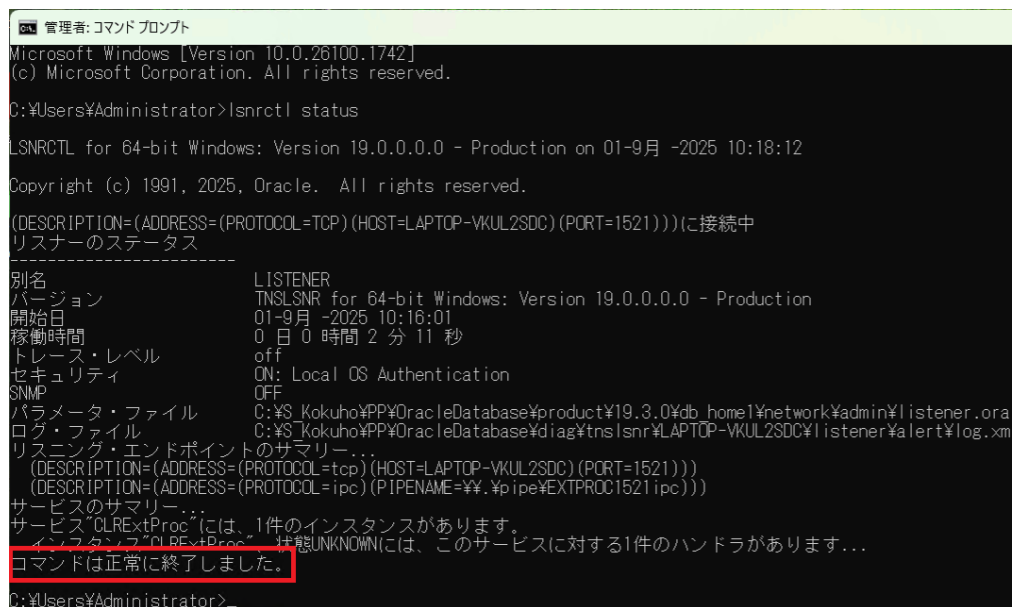


```

管理者: コマンド プロンプト
Microsoft Windows [Version 10.0.26100.1742]
(c) Microsoft Corporation. All rights reserved.

C:\Users\Administrator>lsnrctl status
  
```

12. 実行結果に、「コマンドは正常に終了しました。」と表示されていることを確認し、コマンドプロンプトを閉じます。



```

管理者: コマンド プロンプト
Microsoft Windows [Version 10.0.26100.1742]
(c) Microsoft Corporation. All rights reserved.

C:\Users\Administrator>lsnrctl status

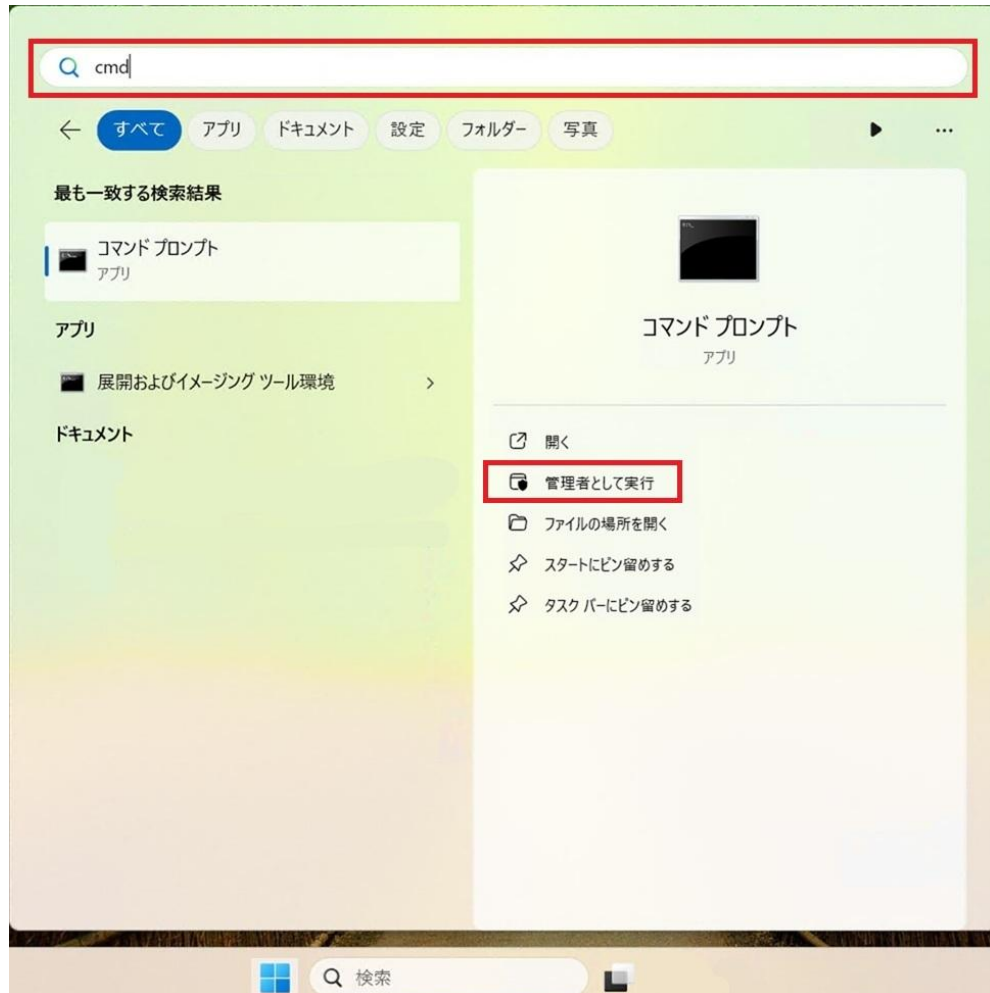
LSNRCTL for 64-bit Windows: Version 19.0.0.0.0 - Production on 01-9月 -2025 10:18:12

Copyright (c) 1991, 2025, Oracle. All rights reserved.

(DESCRIPTION=(ADDRESS=(PROTOCOL=TCP)(HOST=LAPTOP-VKUL2SDC)(PORT=1521)))に接続中
リスナーのステータス
-----
別名                LISTENER
バージョン          TNSLSNR for 64-bit Windows: Version 19.0.0.0.0 - Production
開始日              01-9月 -2025 10:16:01
稼働時間            0 日 0 時間 2 分 11 秒
トレース・レベル    off
セキュリティ        ON: Local OS Authentication
SNMP                OFF
パラメータ・ファイル C:\$S_Kokuho\PP\OracleDatabase\product\19.3.0\db_home1\network\admin\listener.ora
ログ・ファイル      C:\$S_Kokuho\PP\OracleDatabase\diag\tns\lsnr\LAPTOP-VKUL2SDC\listener\alert\log.xml
リスニング・エンドポイントのサマリー...
  (DESCRIPTION=(ADDRESS=(PROTOCOL=tcp)(HOST=LAPTOP-VKUL2SDC)(PORT=1521)))
  (DESCRIPTION=(ADDRESS=(PROTOCOL=ipc)(PIPENAME=\\.\pipe\EXTPROC1521ipc)))
サービスのサマリー...
サービス 'CLRExtProc' には、1件のインスタンスがあります。
インスタンス 'CLRExtProc' 状態UNKNOWNには、このサービスに対する1件のハンドラがあります...
コマンドは正常に終了しました。
C:\Users\Administrator>
  
```

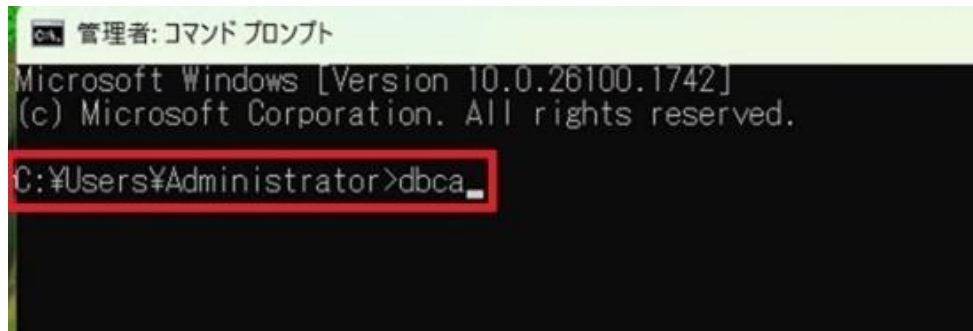
(2) データベースの構築

1. [スタート]アイコンをクリックし、検索ボックス欄に「cmd」と入力し、コマンドプロンプトの「管理者として実行」をクリックします。



2. コマンドプロンプト画面で、次のコマンドをコピーし、コマンドプロンプトに貼り付けて実行します。

dbca



3. 「データベース操作の選択」画面で、「データベースの作成」を選択し、「次へ」をクリックします。



4. 「データベース作成モードの選択」画面で、「拡張構成」を選択し、「次へ」をクリックします。

5. 「データベース・デプロイメント・タイプの選択」画面で、「汎用またはトランザクション処理」を選択し、「次へ」をクリックします。

テンプレート名	データファイルを含める	詳細
データベース・ウェアハウス	はい	詳細の表示
汎用またはトランザクション処理	はい	詳細の表示
カスタム・データベース	いいえ	詳細の表示

6. 「データベース ID の詳細の指定」画面で、下記画面例を参考に表 3-11 の設定値を入力し、「次へ」をクリックします。

表 3-11 データベース ID 詳細

No.	対象機器	設定項目	設定値
1	納付金スタンドアロン端末	グローバル・データベース名	Noufukin
2		SID	Noufukin
3		コンテナ・データベースとして作成	チェックなし

7. 「データベース記憶域オプションの選択」画面で、下記画面例を参考に表 3-12 の設定値を入力し、「次へ」をクリックします。

表 3-12 データベース記憶域オプション

No.	対象機器	設定項目	設定値
1	納付金 スタン ドアロ ン端末	データベース記憶域属性にテンプレート・ファイルを使用	選択しない
2		データベース記憶域属性に次を使用	選択する
3		データベース・ファイルの記憶域タイプ	ファイルシステム
4		データベース・ファイルの位置	E:\S_Kokuho\DB\Database
5		Oracle Managed Files の使用(OMF)	チェックなし

8. 「高速リカバリ・オプションの選択」画面で、下記画面例を参考に表 3-13 の設定値を入力し「アーカイブ・モード・パラメータの編集」をクリックします。

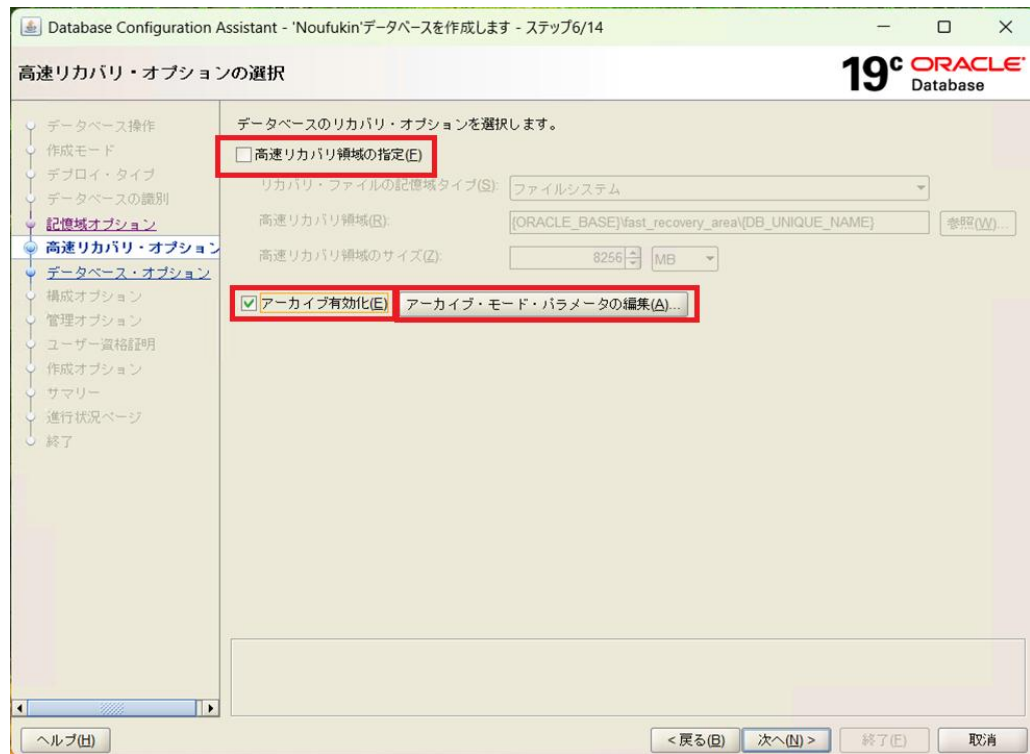


表 3-13 高速リカバリ・オプション

No.	対象機器	設定項目	設定値
1	納付金スタ	高速リカバリ領域の指定	チェックなし
2	ンドアロン 端末	アーカイブ有効化	チェックあり

9. 「アーカイブ・モード・パラメータ」画面で、下記画面例を参考に表 3-14 の設定値を入力し、「OK」をクリックします。

アーカイブ・モード・パラメータ

☒ 自動アーカイブ(A)

アーカイブ・ログ・ファイル形式(E): %t_%s_%r.dbf

アーカイブ・ログの保存先が下で指定される可能性があります。アーカイブ・ログ・ファイルを異なるディスクにまたがる複数の場所に書き込むことをお勧めします。アーカイブ・ログの保存先が指定されない場合、高速リカバリ領域の場所がアーカイブ・ログ・ファイルに使用されます。

	アーカイブ・ログ先
1	E:\S_Kokuho\DB\ArchiveLog
2	
3	
4	
5	
6	
7	
8	

OK 取消

表 3-14 アーカイブ・モード・パラメータ

No.	対象機器	設定項目	設定値
1	納付金スタ ンドアロン 端末	自動アーカイブ	チェックあり
2		アーカイブ・ログ・ファイル形式	%t_%s_%r.dbf
3		アーカイブ・ログ先	E:\S_Kokuho\DB\ArchiveLog

10. 「高速リカバリ・オプションの選択」画面で、「次へ」をクリックします。

Database Configuration Assistant - 'Noufukin'データベースを作成します - ステップ6/14

高速リカバリ・オプションの選択

データベースのリカバリ・オプションを選択します。

☐ 高速リカバリ領域の指定(E)

リカバリ・ファイルの記憶域タイプ(S): ファイルシステム

高速リカバリ領域(R): (ORACLE_BASE)\fast_recovery_area\DB_UNIQUE_NAME 参照(W)...

高速リカバリ領域のサイズ(Z): 8256 MB

☒ アーカイブ有効化(E) アーカイブ・モード・パラメータの編集(A)...

ヘルプ(H) < 戻る(B) 次へ(N) > 終了(F) 取消

3 ミドルウェアの詳細設定

11. 「ネットワーク構成詳細の指定」画面で、「リスナーの選択」欄にて「LISTENER」にチェックされており、「ステータス」が「稼働中」となっていることを確認し、「次へ」をクリックします。

名前	ポート	Oracleホーム	ステータス
LISTENER	1521	C:\S_Kokuho\PP\OracleDatabase\product\19.3.0\db_home1	稼働中

12. 「Oracle Data Vault 構成オプションの選択」画面で、チェックされていないことを確認し、「次へ」をクリックします。

☐ Oracle Database Vault の構成(V)

Database Vault 所有者(O):

パスワード(P): パスワードの確認(E):

☐ 別個のアカウント・マネージャを作成(C)

アカウント・マネージャ(A):

パスワード(S): パスワードの確認(B):

☐ Oracle Label Security の構成(L)

☐ OID での Oracle Label Security の構成(I)

13. 「構成オプションの指定」画面で、「キャラクタ・セット」タブをクリックし、下記画面例を参考に表 3-15 の設定値を入力し、「次へ」をクリックします。

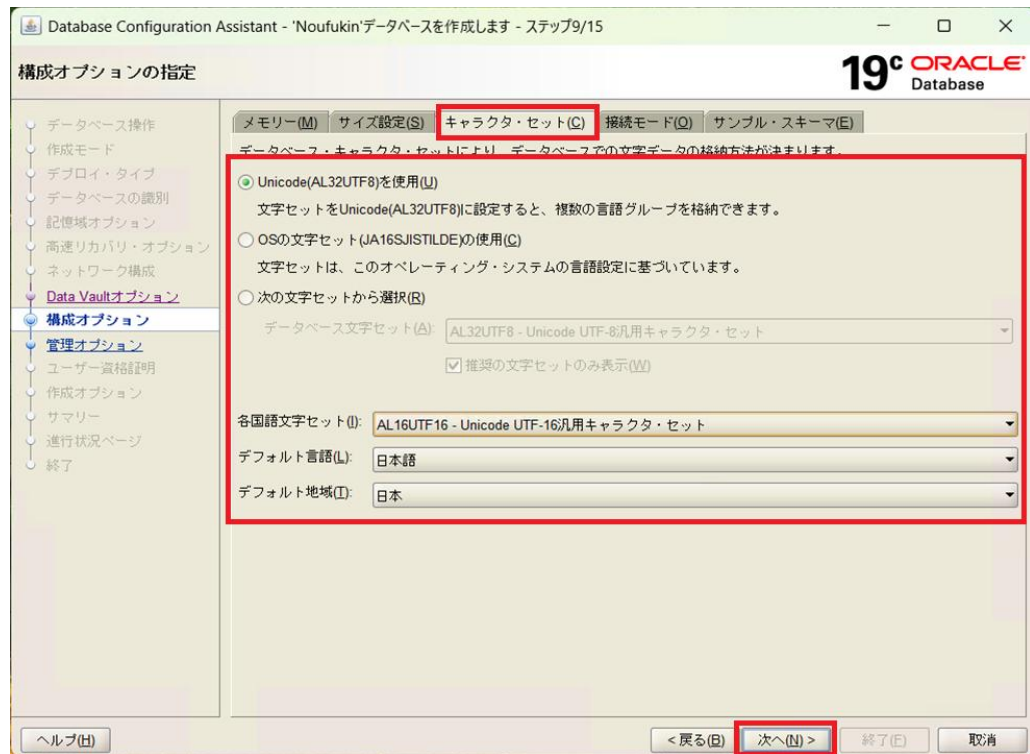


表 3-15 構成オプション

No.	対象機器	設定項目	設定値
1	納付金スタンドアロン端末	Unicode(AL32UTF8)を使用	選択する
2		OS の 文 字 セ ッ ト (JA16SJISTILDE)を使用	選択しない
3		次の文字セットから選択	選択しない
4		各国語文字セット	AL16UTF16 - Unicode UTF-16 汎用キャラクタ・セット
5		デフォルト言語	日本語
6		デフォルト地域	日本

14. 「管理オプションの指定」画面で、下記画面例を参考に表 3-16 の設定値を入力し、「次へ」をクリックします。

表 3-16 管理オプション

No.	対象機器	設定項目	設定値
1	納付金スタン ドアロン端末	Enterprise Manager(EM)Database Express の構成	チェックあり
2		Enterprise Manager(EM)Cloud Control への登録	チェックなし

15. 「データベース・ユーザー資格証明の指定」画面で、「すべてのアカウントに同じ管理パスワードを使用」を選択し、「パスワード」、「パスワード確認」および「Oracle ホームのユーザー・パスワード」を入力し「次へ」をクリックします。

Database Configuration Assistant - 'Noufukin'データベースを作成します - ステップ11/15

データベース・ユーザー資格証明の指定

セキュリティの理由により、新規データベースの次のユーザー・アカウントのパスワードを指定する必要があります。

☐ 別の管理パスワードを使用(D)

パスワード パスワードの確認

SYS(S)

SYSTEM(Y)

☒ すべてのアカウントに同じ管理パスワードを使用(U)

パスワード(P): パスワードの確認(C):

データベースOracleホームはOracleホームのユーザー(oraadm)でインストールされています。データベースのWindowsサービスはOracleホームのユーザー・アカウントとして実行するように構成されます。

Oracleホームのユーザー・パスワード(U):

ヘルプ(H) < 戻る(B) 次へ(N) > 終了(F) 取消

⚠ 注意事項

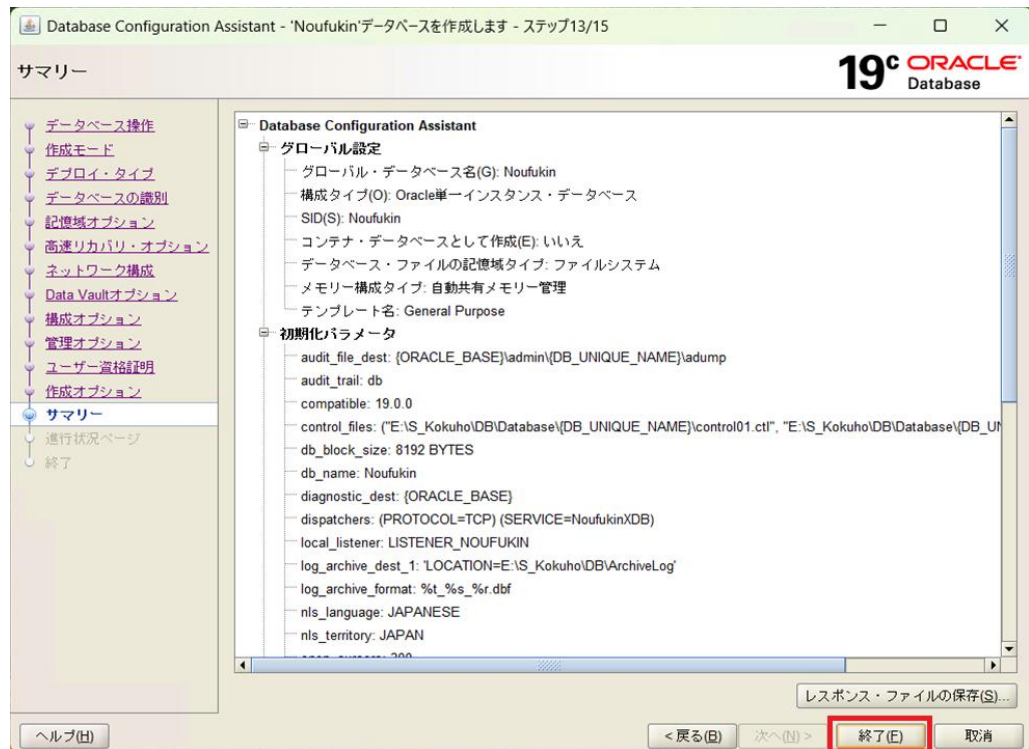
- ・「すべてのアカウントに同じ管理パスワードを使用」のパスワード、パスワードの確認については、各都道府県にて事前に設計してください。
- ・Oracle ホームのユーザー・パスワードは、「付録.B.2 ミドルウェアのインストール」の「(8) Oracle Database Personal Edition のインストール」で設定したパスワードを入力してください。
- ・パスワード入力後、警告メッセージ「パスワード(P): [DBT-06208] 入力された 'ADMIN'パスワードが推奨される標準に準拠していません。」が出力された場合、「はい」をクリックし、手順 16.へ進みます。

16. 「データベース作成オプションの選択」画面で、下記画面例を参考に表 3-17 の設定値を入力し、「次へ」クリックします。

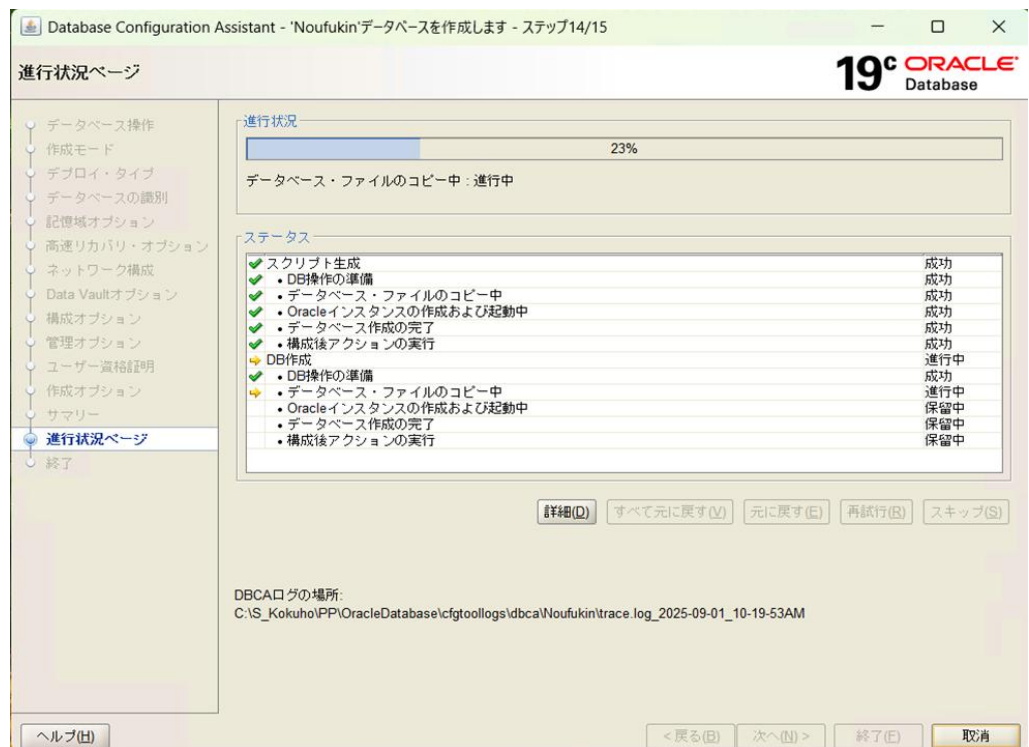
表 3-17 データベース作成オプション

No	対象機器	設定項目	設定値
1	納付金スタンドアロン端末	データベースの作成	チェックあり
2		データベース・テンプレートとして保存	チェックなし
3		データベース作成スクリプトの生成	チェックあり
4		宛先ディレクトリ	C:\S_Kokuho\PP\OracleDatabase\admin\Noufukin\scripts

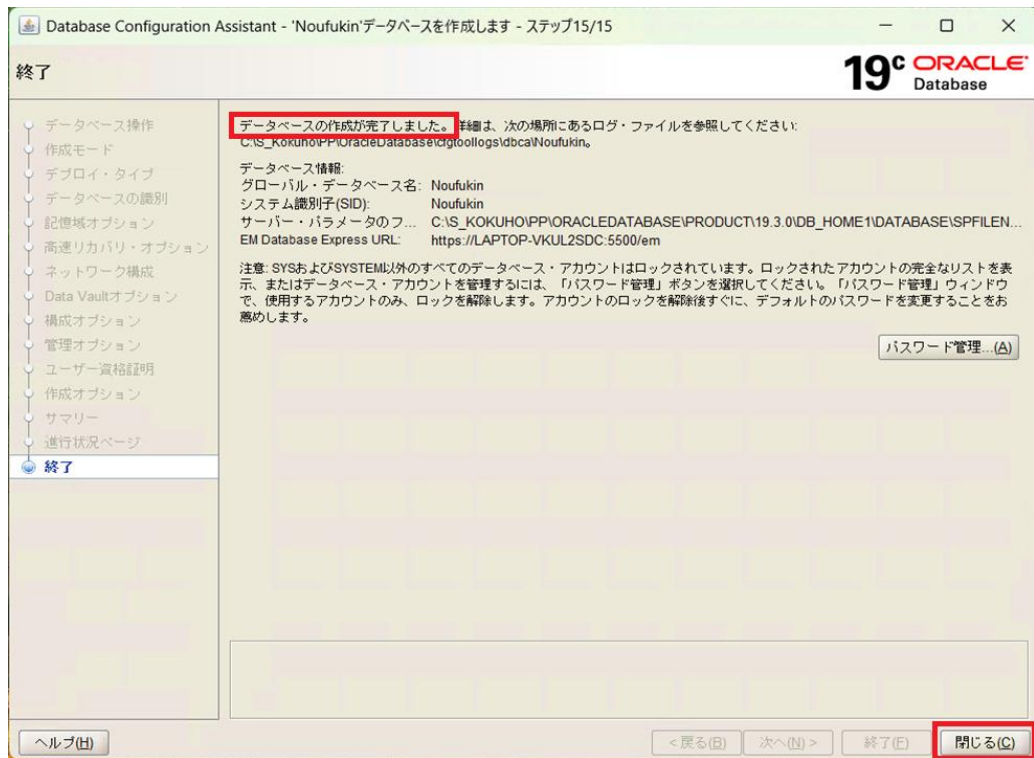
17. 「サマリー」画面で、「終了」をクリックします。



18. 「進行状況ページ」画面で、データベース作成が実行されるので、しばらく待ちます。(しばらく待つと、手順 19. の画面が表示されます。)



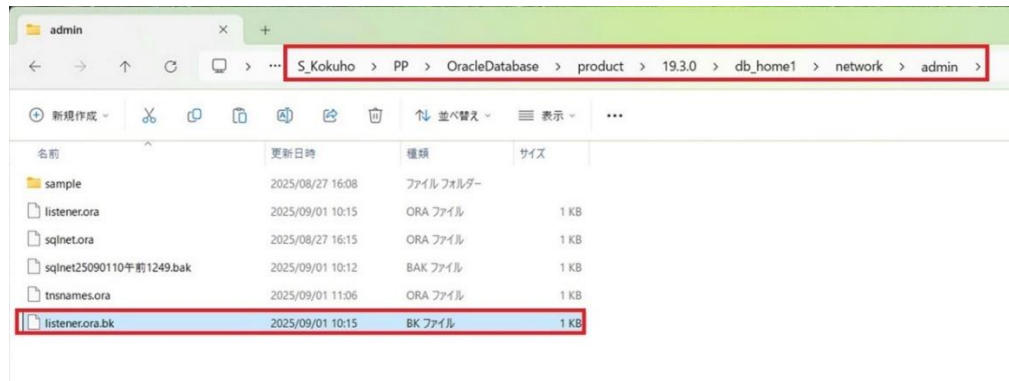
19. 「終了」画面で、「データベースの作成が完了しました。」と表示されていることを確認し、「閉じる」をクリックします。



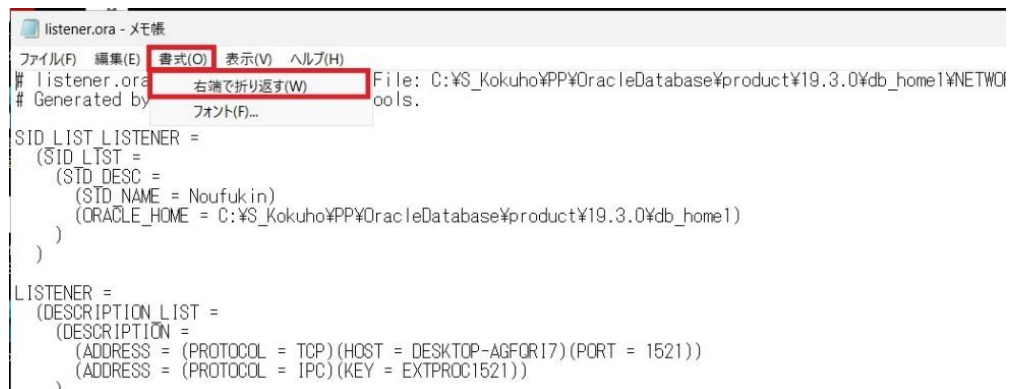
(3) データベース構築後の設定

(a) Listener.ora の修正

1. エクスプローラーを起動し、「C:\\$S_Kokuho\PP\OracleDatabase\product\19.3.0\db_home1\network\admin」フォルダ配下の「listener.ora」ファイルをコピーし、同じフォルダに「listener.ora.bk」として貼り付けます。



2. 「listener.ora」ファイルをメモ帳で開き、「書式」タブより「右端で折り返す」をクリックします。



3. 「listener.ora-メモ帳」画面で、下記画面例を参考に修正します。

```
#          listener.ora          Network          Configuration          File:
C:\S_Kokuho\PP\OracleDatabase\product\19.3.0\db_home1\network\admin\li
stener.ora
# Generated by Oracle configuration tools.

SID_LIST_LISTENER =
  (SID_LIST =
    (SID_DESC =
      (SID_NAME = Noufukin)
      (ORACLE_HOME =
C:\S_Kokuho\PP\OracleDatabase\product\19.3.0\db_home1)
      )
    )
  )

LISTENER =
  (DESCRIPTION_LIST =
    (DESCRIPTION =
      (ADDRESS = (PROTOCOL = TCP)(HOST = YA00NSH101)(PORT = 1521))
      (ADDRESS = (PROTOCOL = IPC)(KEY = EXTPROC1521))
    )
  )
```

(SID_NAME = CLRExtProc)を(SID_NAME = Noufukin)に修正

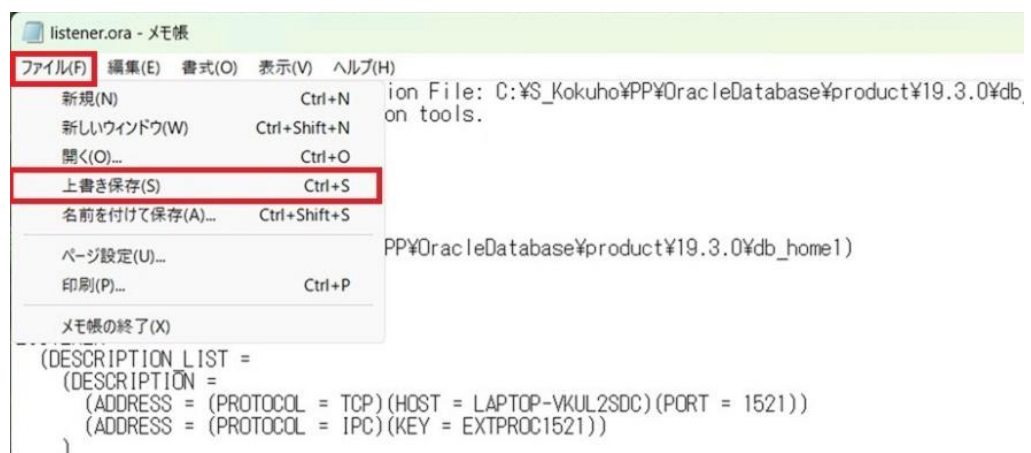
以下の2行を削除

(PROGRAM = extproc)

(ENVS

"EXTPROC_DLLS=ONLY:E:\app\¥oracle¥product¥19.3.0¥db_home1¥bin¥oraclrl1.dll")

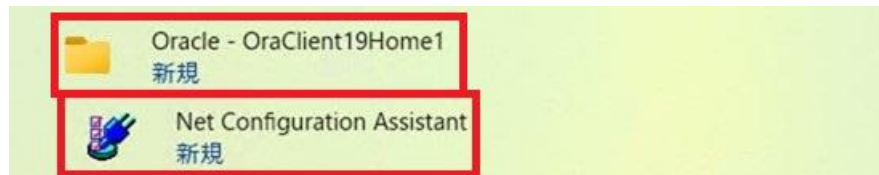
4. 「ファイル」-「上書き保存」をクリックします。



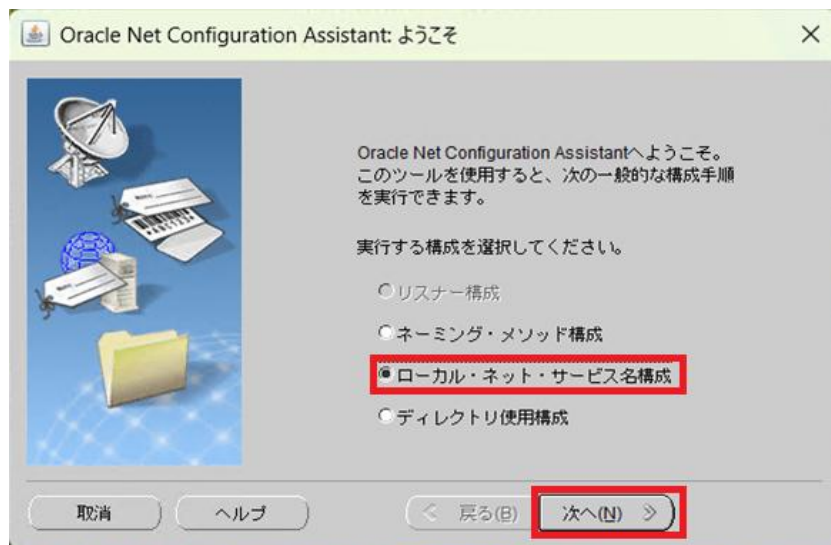
5. メモ帳を閉じます。

(b) tnsnames.ora の編集

1. [スタート]アイコンから、「すべてのアプリ」 - 「Oracle - OraClient19Home1」 - 「Net Configuration Assistant」をクリックします。



2. 「Oracle Net Configuration Assistant: ようこそ」画面で、「ローカル・ネット・サービス名構成」を選択し「次へ」をクリックします。



3. 「Oracle Net Configuration Assistant: ネット・サービス名の構成」画面で、「追加」を選択し「次へ」をクリックします。



4. 「Oracle Net Configuration Assistant: ネット・サービス名の構成-サービス名」画面で、サービス名に下記画面例を参考に表 3-18 のサービス名を入力し、「次へ」をクリックします。



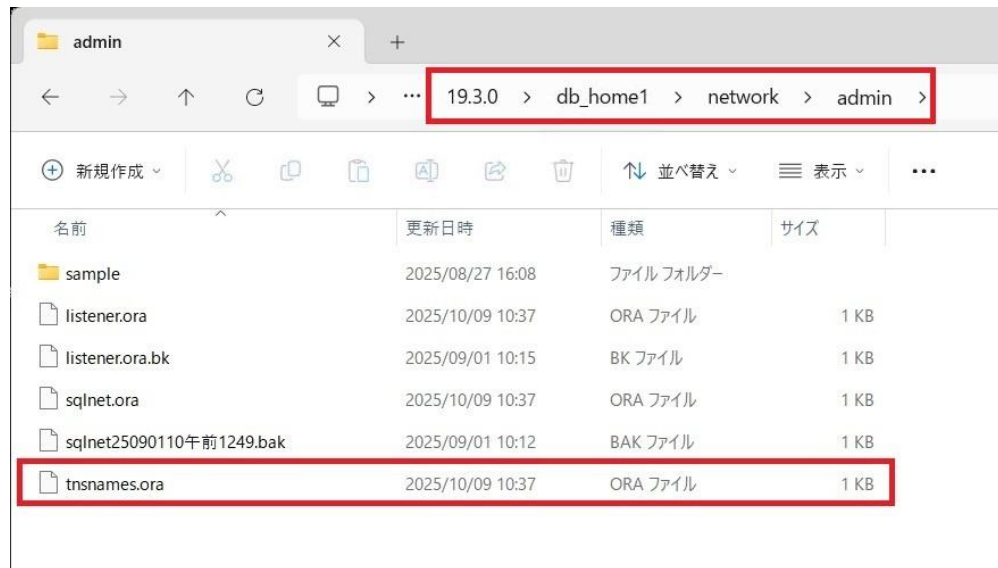
表 3-18 サービス名

No.	対象機器	サービス名
1	納付金スタンドアロン端末	NOUFUKIN

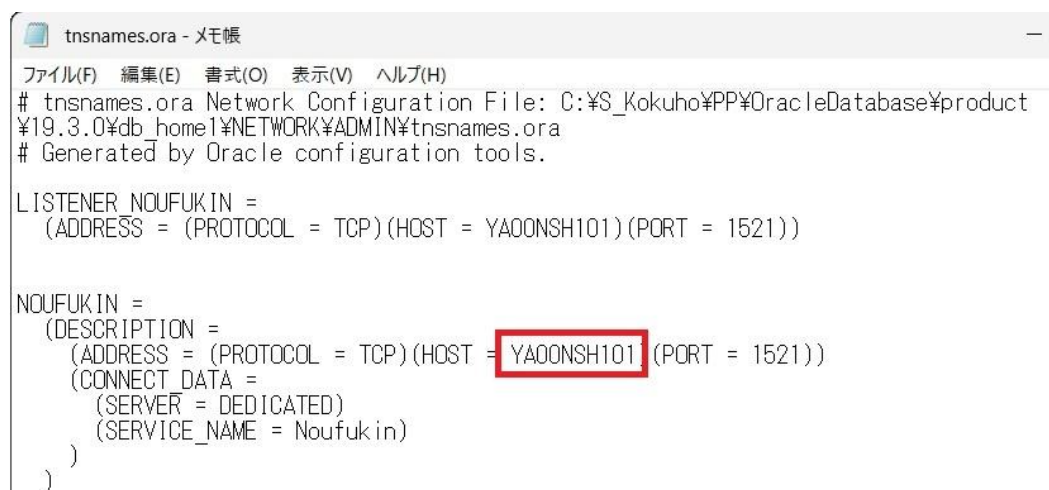
5. 「Oracle Net Configuration Assistant: ネット・サービス名の構成-プロトコルの選択」画面で、「TCP」を選択し「次へ」をクリックします。



6. 「C:\\$S_Kokuho\PP\OracleDatabase\product\19.3.0\db_home1\network\admin」フォルダ配下の「tnsnames.ora」ファイルをメモ帳で開きます。



7. 下記画面例を参考に、(HOST = <コンピュータ名>) の<コンピュータ名>をコピーします。



8. メモ帳を閉じます。

9. 「Oracle Net Configuration Assistant: ネット・サービス名の構成-TCP/IP プロトコル」画面で、ホスト名に下記画面例を参考に表 3-19 のホスト名、TCP/IP ポート番号は「標準ポート番号の 1521 を使用」に選択し、「次へ」をクリックします。

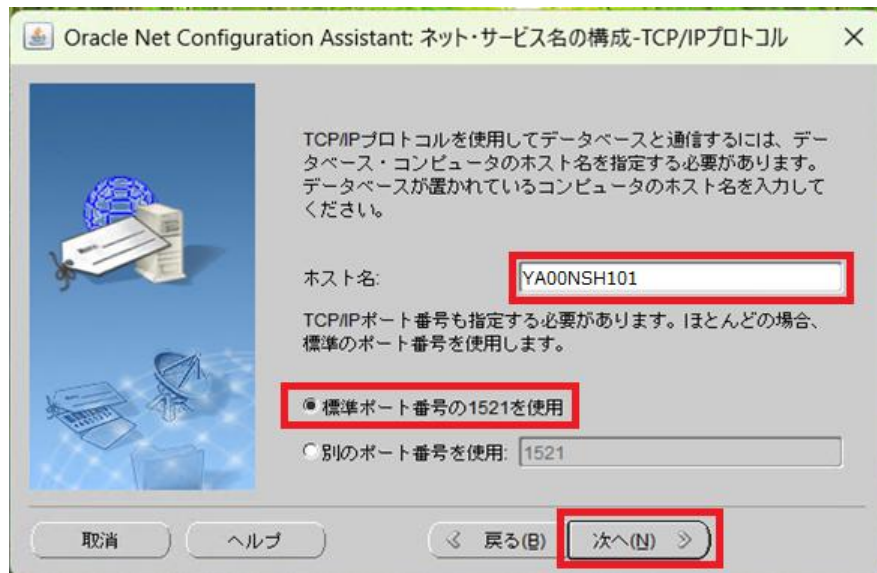


表 3-19 TCP/IP プロトコル

No	対象機器	設定項目	設定値
1	納付金ス	ホスト名	手順 7.でコピーした値
2	タンドア ロン端末	TCP/IP ポート番号	標準ポート番号の 1521 を使用

10. 「Oracle Net Configuration Assistant: ネット・サービス名の構成-テスト」画面で、「はい。テストを実行します。」を選択し、「次へ」をクリックします。



11. 「Oracle Net Configuration Assistant: ネット・サービス名の構成-接続」画面で、「ログインの変更」をクリックします。



12. 「ログインの変更」画面で、下記画面例を参考に、表 3-20 の設定値を入力し、「OK」をクリックします。

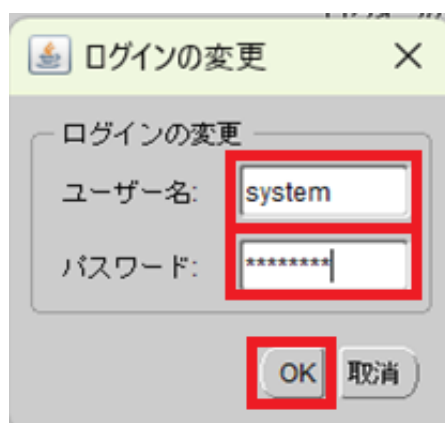


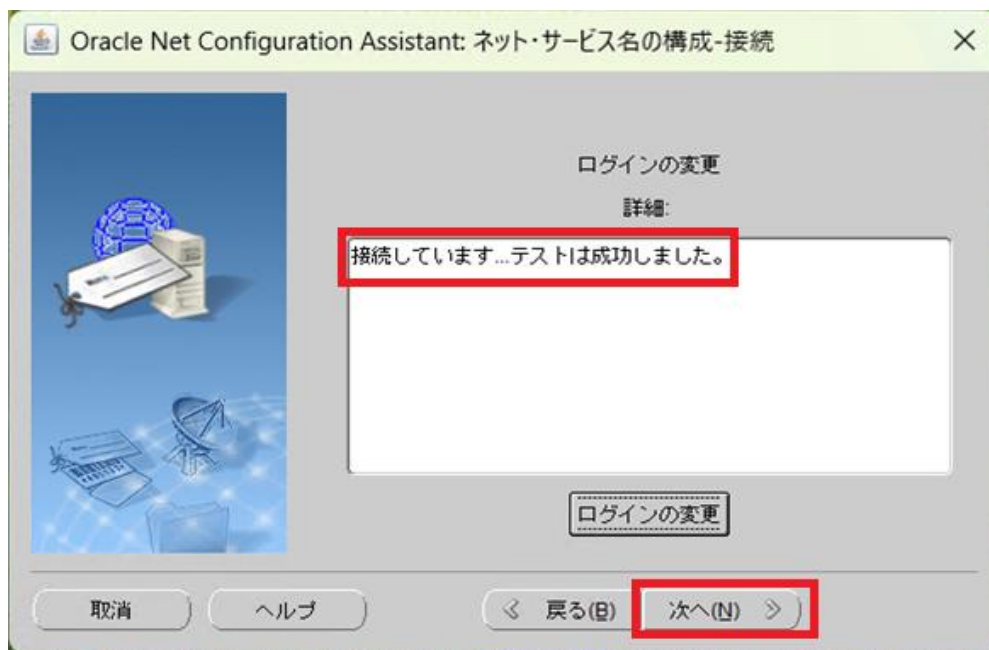
表 3-20 ログイン情報

No	対象機器	設定項目	設定値
1	納付金ス	ユーザー名	system
2	タンドア ロン端末	パスワード	<system のパスワード>

⚠ 注意事項

<system のパスワード>は、「3.1.3 データベースソフトウェアの詳細設定」の「(1) データベースの構築」で設定したパスワードを入力してください。

13. 「Oracle Net Configuration Assistant: ネット・サービス名の構成-接続」画面で、「詳細:」欄に「接続しています...テストは成功しました。」と表示されることを確認し、「次へ」をクリックします。



14. 「Oracle Net Configuration Assistant: ネット・サービス名の構成-ネット・サービス名」画面で、「ネット・サービス名」に下記画面例を参考に表 3-21 のネット・サービス名を入力し、「次へ」をクリックします。



表 3-21 ネット・サービス名

No.	対象機器	ネット・サービス名
1	納付金スタンドアロン端末	NOUFUKIN

15. 「Oracle Net Configuration Assistant: ネット・サービス名の構成-別のネット・サービス名」画面で、「いいえ」を選択し、「次へ」をクリックします。



16. 「Oracle Net Configuration Assistant: ネット・サービス名の構成が終了しました」画面で、「ネット・サービス名の構成が完了しました。」と表示されることを確認し、「次へ」をクリックします。

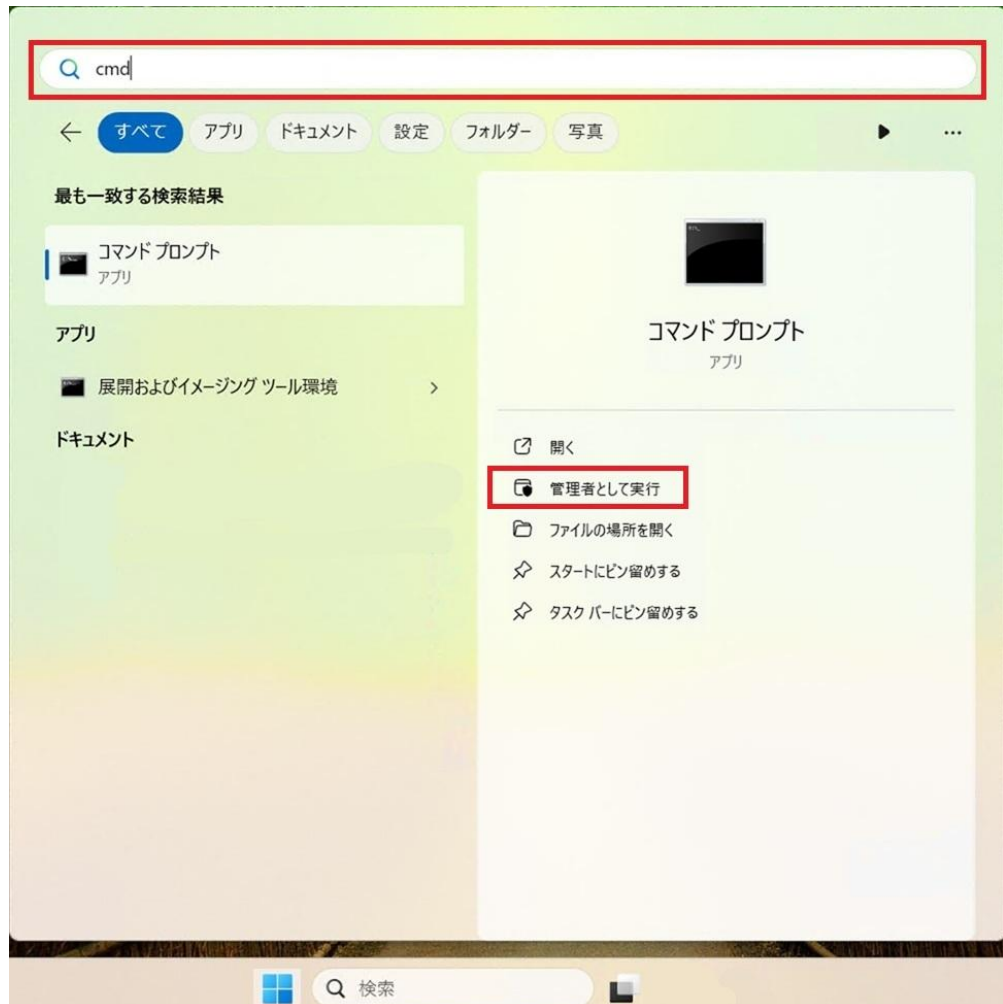


17. 「Oracle Net Configuration Assistant: ようこそ」画面で、「終了」をクリックします。



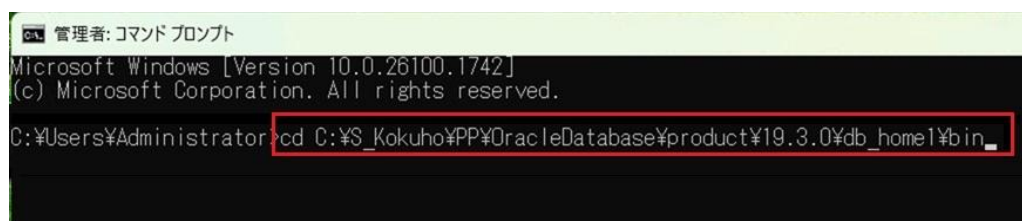
(c) ユーザープロファイルの作成

1. [スタート]アイコンをクリックし、検索ボックス欄に「cmd」と入力し、コマンドプロンプトの「管理者として実行」をクリックします。



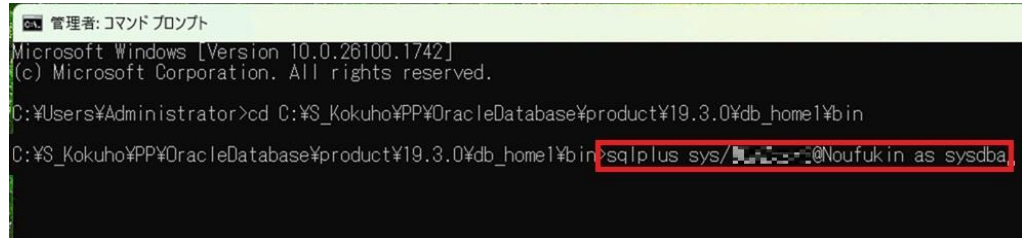
2. コマンドプロンプト画面で、次のコマンドをコピーし、コマンドプロンプトに貼り付けて実行します。

```
cd C:¥S_Kokuho¥PP¥OracleDatabase¥product¥19.3.0¥db_home1¥bin
```



3. 下記画面例を参考に次のコマンドを入力し実行します。(※ △は半角スペースを表します。)

sqlplus△sys/<sys のパスワード>@Noufukin△as△sysdba



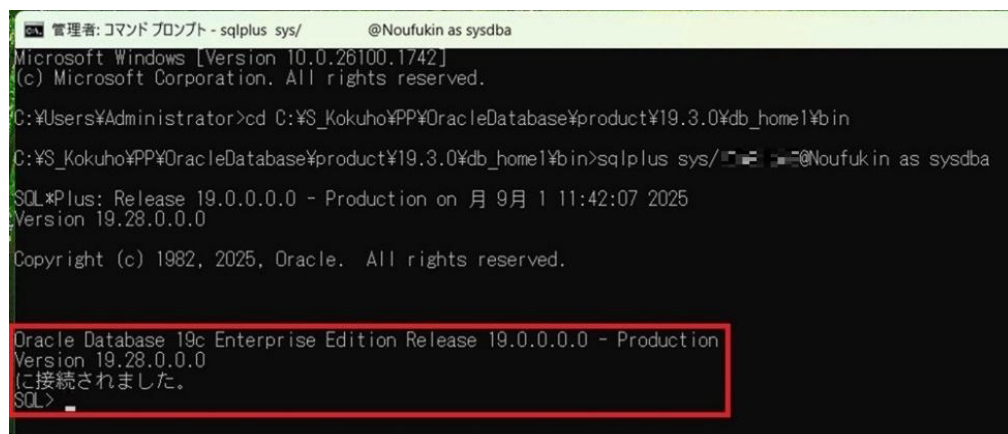
```

C:\Users\Administrator>cd C:\S_Kokuho\PP\OracleDatabase\product\19.3.0\db_home1\bin
C:\S_Kokuho\PP\OracleDatabase\product\19.3.0\db_home1\bin>sqlplus sys/△△△△@Noufukin as sysdba
  
```

⚠ 注意事項

<sys のパスワード>は、「3.1.3 データベースソフトウェアの詳細設定」の「(2) データベースの構築」で設定したパスワードを入力してください。

4. 「Oracle Database 19c Enterprise Edition Release 19.0.0.0.0 - Production Version 19.28.0.0.0 に接続されました。」と表示されることを確認します。



```

C:\Users\Administrator>cd C:\S_Kokuho\PP\OracleDatabase\product\19.3.0\db_home1\bin
C:\S_Kokuho\PP\OracleDatabase\product\19.3.0\db_home1\bin>sqlplus sys/△△△△@Noufukin as sysdba
SQL*Plus: Release 19.0.0.0.0 - Production on 月 9月 1 11:42:07 2025
Version 19.28.0.0.0
Copyright (c) 1982, 2025, Oracle. All rights reserved.

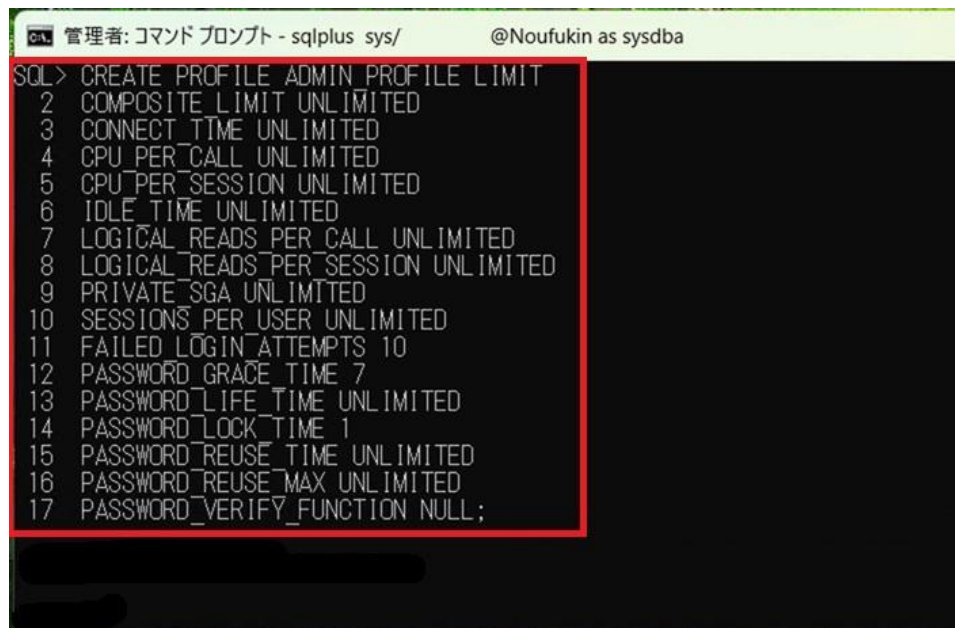
Oracle Database 19c Enterprise Edition Release 19.0.0.0.0 - Production
Version 19.28.0.0.0
に接続されました。
SQL>
  
```

⚠ 注意事項

Oracle Database のエディションやバージョンによって、表示される文字が変わることがありますが、「接続されました。」と表示されれば問題ありません。

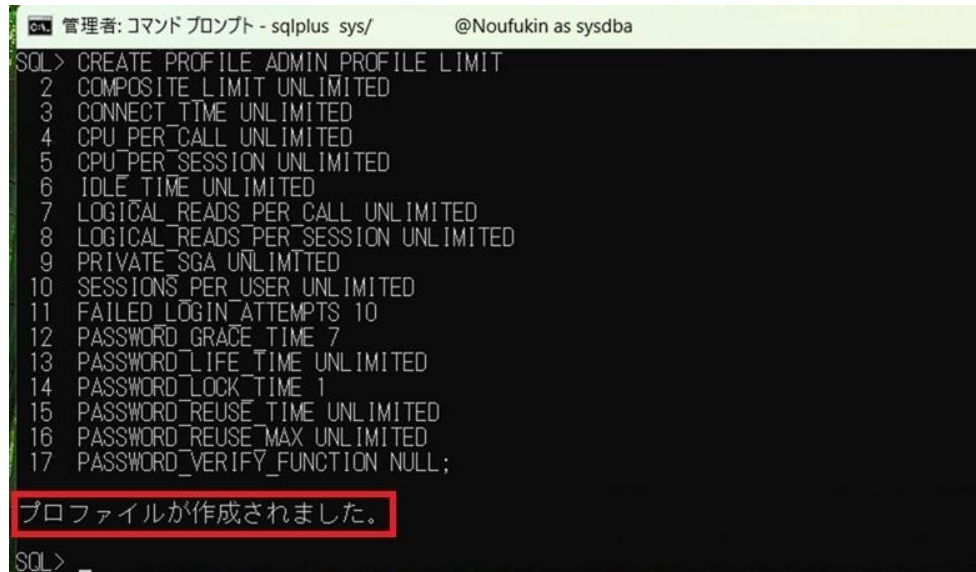
5. 次のコマンドをコピーし、コマンドプロンプトに貼り付けて実行します。

```
CREATE PROFILE ADMIN_PROFILE LIMIT  
COMPOSITE_LIMIT UNLIMITED  
CONNECT_TIME UNLIMITED  
CPU_PER_CALL UNLIMITED  
CPU_PER_SESSION UNLIMITED  
IDLE_TIME UNLIMITED  
LOGICAL_READS_PER_CALL UNLIMITED  
LOGICAL_READS_PER_SESSION UNLIMITED  
PRIVATE_SGA UNLIMITED  
SESSIONS_PER_USER UNLIMITED  
FAILED_LOGIN_ATTEMPTS 10  
PASSWORD_GRACE_TIME 7  
PASSWORD_LIFE_TIME UNLIMITED  
PASSWORD_LOCK_TIME 1  
PASSWORD_REUSE_TIME UNLIMITED  
PASSWORD_REUSE_MAX UNLIMITED  
PASSWORD_VERIFY_FUNCTION NULL;
```



```
管理者: コマンド プロンプト - sqlplus sys/ @Noufukin as sysdba  
SQL> 1 CREATE PROFILE ADMIN_PROFILE LIMIT  
2 COMPOSITE_LIMIT UNLIMITED  
3 CONNECT_TIME UNLIMITED  
4 CPU_PER_CALL UNLIMITED  
5 CPU_PER_SESSION UNLIMITED  
6 IDLE_TIME UNLIMITED  
7 LOGICAL_READS_PER_CALL UNLIMITED  
8 LOGICAL_READS_PER_SESSION UNLIMITED  
9 PRIVATE_SGA UNLIMITED  
10 SESSIONS_PER_USER UNLIMITED  
11 FAILED_LOGIN_ATTEMPTS 10  
12 PASSWORD_GRACE_TIME 7  
13 PASSWORD_LIFE_TIME UNLIMITED  
14 PASSWORD_LOCK_TIME 1  
15 PASSWORD_REUSE_TIME UNLIMITED  
16 PASSWORD_REUSE_MAX UNLIMITED  
17 PASSWORD_VERIFY_FUNCTION NULL;
```

6. 「プロファイルが作成されました。」と表示されることを確認します。



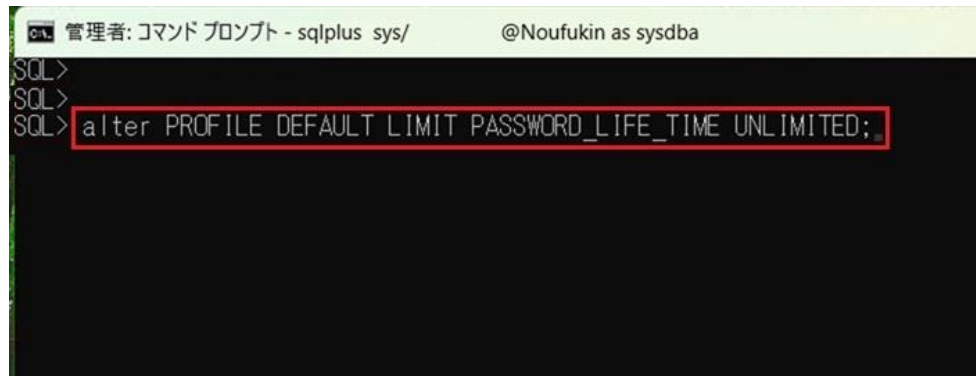
```
SQL> CREATE PROFILE ADMIN PROFILE LIMIT
2  COMPOSITE_LIMIT UNLIMITED
3  CONNECT_TIME UNLIMITED
4  CPU_PER_CALL UNLIMITED
5  CPU_PER_SESSION UNLIMITED
6  IDLE_TIME UNLIMITED
7  LOGICAL_READS_PER_CALL UNLIMITED
8  LOGICAL_READS_PER_SESSION UNLIMITED
9  PRIVATE_SGA UNLIMITED
10 SESSIONS_PER_USER UNLIMITED
11 FAILED_LOGIN_ATTEMPTS 10
12 PASSWORD_GRACE_TIME 7
13 PASSWORD_LIFE_TIME UNLIMITED
14 PASSWORD_LOCK_TIME 1
15 PASSWORD_REUSE_TIME UNLIMITED
16 PASSWORD_REUSE_MAX UNLIMITED
17 PASSWORD_VERIFY_FUNCTION NULL;

プロファイルが作成されました。

SQL>
```

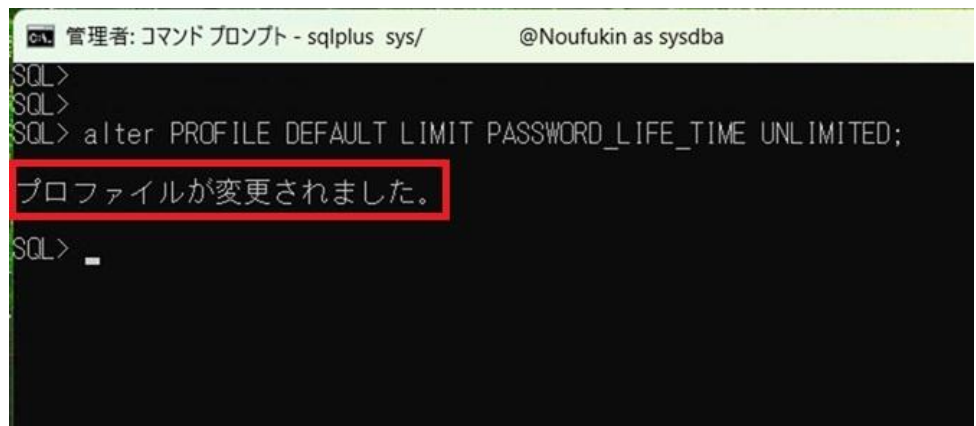
7. 次のコマンドをコピーし、コマンドプロンプトに貼り付けて実行します。

```
alter PROFILE DEFAULT LIMIT PASSWORD_LIFE_TIME UNLIMITED;
```



```
SQL>
SQL>
SQL> alter PROFILE DEFAULT LIMIT PASSWORD_LIFE_TIME UNLIMITED;
```

8. 「プロファイルが変更されました。」と表示されることを確認します。



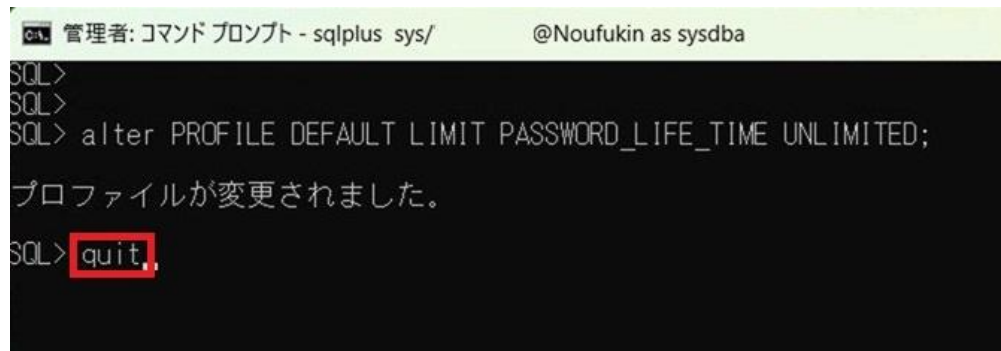
```
SQL>
SQL>
SQL> alter PROFILE DEFAULT LIMIT PASSWORD_LIFE_TIME UNLIMITED;

プロファイルが変更されました。

SQL>
```

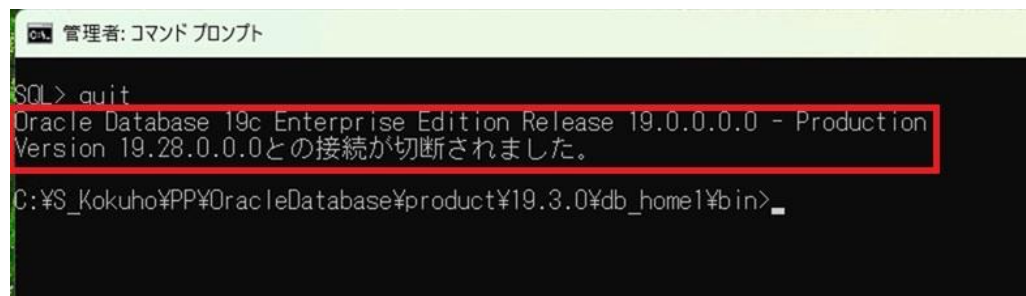
9. 次のコマンドをコピーし、コマンドプロンプトに貼り付けて実行します。

quit



```
管理者: コマンド プロンプト - sqlplus sys/ @Noufukin as sysdba
SQL>
SQL>
SQL> alter PROFILE DEFAULT LIMIT PASSWORD_LIFE_TIME UNLIMITED;
プロファイルが変更されました。
SQL> quit.
```

10. 「Oracle Database 19c Enterprise Edition Release 19.0.0.0.0 – Production Version 19.28.0.0.0 との接続が切断されました。」と表示されることを確認します。



```
管理者: コマンド プロンプト
SQL> quit
Oracle Database 19c Enterprise Edition Release 19.0.0.0.0 – Production
Version 19.28.0.0.0 との接続が切断されました。
C:\$S_Kokuho¥PP¥OracleDatabase¥product¥19.3.0¥db_home1¥bin>_
```

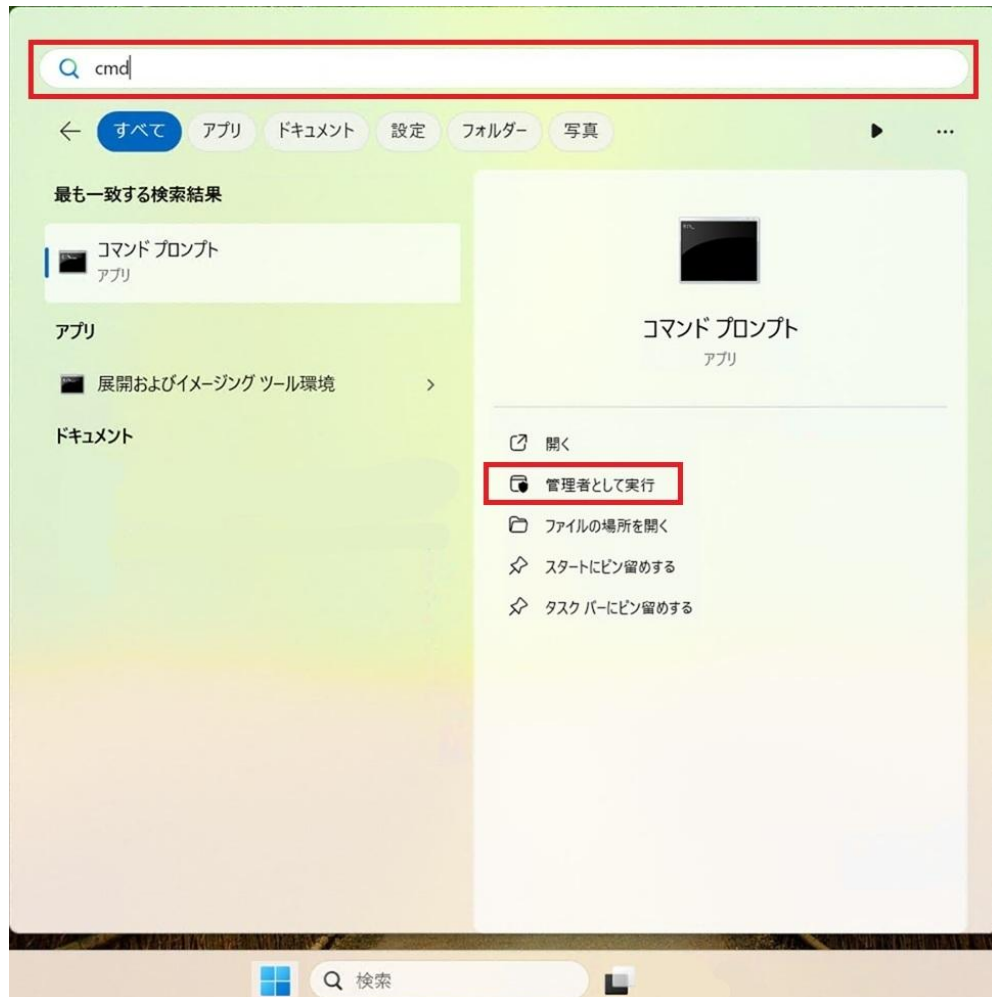
 注意事項

Oracle Database のエディションやバージョンによって、表示される文字が変わることがありますが、「接続が切断されました。」と表示されれば問題ありません。

11. コマンドプロンプトを閉じます。

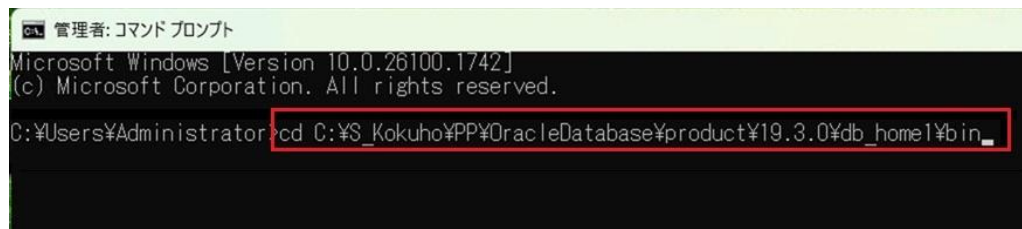
(d) ユーザー作成

1. [スタート]アイコンをクリックし、検索ボックス欄に「cmd」と入力し、コマンドプロンプトの「管理者として実行」をクリックします。



2. コマンドプロンプト画面で、次のコマンドをコピーし、コマンドプロンプトに貼り付けて実行します。

cd C:¥\$¥Kokuho¥PP¥OracleDatabase¥product¥19.3.0¥db_home1¥bin



3. 下記画面例を参考に次のコマンドを入力し実行します。(※ △は半角スペースを表します。)

sqlplus△sys/<sys のパスワード>@Noufukin△as△sysdba

```

管理: コマンド プロンプト
Microsoft Windows [Version 10.0.26100.1742]
(c) Microsoft Corporation. All rights reserved.

C:\Users\Administrator>cd C:\S_Kokuho\PP\OracleDatabase\product\19.3.0\db_home1\bin
C:\S_Kokuho\PP\OracleDatabase\product\19.3.0\db_home1\bin>sqlplus sys/ [REDACTED]@Noufukin as sysdba
  
```

注意事項

<sys のパスワード>は、「3. 1. 3 データベースソフトウェアの詳細設定」の「(2) データベースの構築」で設定したパスワードを入力してください。

4. 「Oracle Database 19c Enterprise Edition Release 19.0.0.0.0 - Production Version 19.28.0.0.0に接続されました。」と表示されることを確認します。

```

管理: コマンド プロンプト - sqlplus sys/ @Noufukin as sysdba
Microsoft Windows [Version 10.0.26100.1742]
(c) Microsoft Corporation. All rights reserved.

C:\Users\Administrator>cd C:\S_Kokuho\PP\OracleDatabase\product\19.3.0\db_home1\bin
C:\S_Kokuho\PP\OracleDatabase\product\19.3.0\db_home1\bin>sqlplus sys/ [REDACTED]@Noufukin as sysdba

SQL*Plus: Release 19.0.0.0.0 - Production on 月 9月 1 11:42:07 2025
Version 19.28.0.0.0

Copyright (c) 1982, 2025, Oracle. All rights reserved.

Oracle Database 19c Enterprise Edition Release 19.0.0.0.0 - Production
Version 19.28.0.0.0
に接続されました。
SQL>
  
```

注意事項

Oracle Database のエディションやバージョンによって、表示される文字が変わることがありますが、「接続されました。」と表示されれば問題ありません。

5. 下記画面例を参考に次のコマンドを入力し実行します。(※ △は半角スペースを表します。)

```
CREATE△USER△noufukindbadm
IDENTIFIED△BY△" <noufukindbadm のパスワード>"
DEFAULT△TABLESPACE△users
TEMPORARY△TABLESPACE△temp
PROFILE△ADMIN_PROFILE;
```



```
SQL> CREATE USER noufukindbadm
2 IDENTIFIED BY "noufukindbadm"
3 DEFAULT TABLESPACE users
4 TEMPORARY TABLESPACE temp
5 PROFILE ADMIN_PROFILE;
```

⚠ 注意事項

<noufukindbadm のパスワード>については、各都道府県にて事前に設計してください。

6. 「ユーザーが作成されました。」と表示されることを確認します。

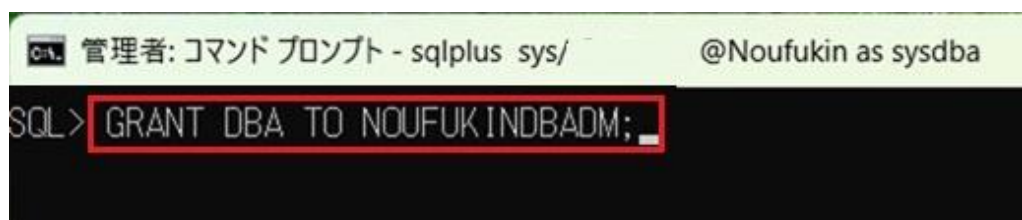


```
SQL> CREATE USER noufukindbadm
2 IDENTIFIED BY "noufukindbadm"
3 DEFAULT TABLESPACE users
4 TEMPORARY TABLESPACE temp
5 PROFILE ADMIN_PROFILE;
```

ユーザーが作成されました。

7. 次のコマンドをコピーし、コマンドプロンプトに貼り付けて実行します。

```
GRANT DBA TO NOUFUKINDBADM;
```



```
SQL> GRANT DBA TO NOUFUKINDBADM;
```


8. 「権限付与が成功しました。」と表示されることを確認します。



```

C:\ 管理者: コマンド プロンプト - sqlplus sys/          @Noufukin as sysdba
SQL> GRANT DBA TO NOUFUKINDBADM;
権限付与が成功しました。
SQL> _

```

9. 下記画面例を参考に次のコマンドを入力し実行します。(※ △は半角スペースを表します。)

```

CREATE△USER△noufukindbgym
IDENTIFIED△BY△" <noufukindbgym のパスワード> "
DEFAULT△TABLESPACE△users
TEMPORARY△TABLESPACE△temp
PROFILE△DEFAULT;

```



```

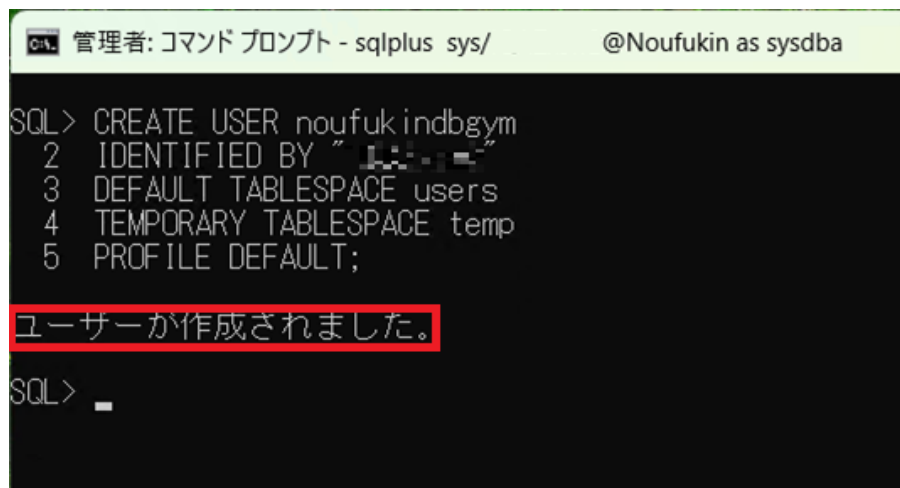
C:\ 管理者: コマンド プロンプト - sqlplus sys/          @Noufukin as sysdba
SQL> CREATE USER noufukindbgym
2  IDENTIFIED BY " "
3  DEFAULT TABLESPACE users
4  TEMPORARY TABLESPACE temp
5  PROFILE DEFAULT;

```

⚠ 注意事項

<noufukindbgym のパスワード>については、各都道府県にて事前に設計してください。

10. 「ユーザーが作成されました。」と表示されることを確認します。



```

C:\ 管理者: コマンド プロンプト - sqlplus sys/          @Noufukin as sysdba
SQL> CREATE USER noufukindbgym
2  IDENTIFIED BY " "
3  DEFAULT TABLESPACE users
4  TEMPORARY TABLESPACE temp
5  PROFILE DEFAULT;
ユーザーが作成されました。
SQL> _

```

11. 次のコマンドをコピーし、コマンドプロンプトに貼り付けて実行します。

```
GRANT CONNECT TO noufukindbgym;
```

管理者: コマンド プロンプト - sqlplus sys/ @Noufukin as sysdba

```
SQL> GRANT CONNECT TO noufukindbgym;
```

12. 「権限付与が成功しました。」と表示されることを確認します。

管理者: コマンド プロンプト - sqlplus sys/ @Noufukin as sysdba

```
SQL> GRANT CONNECT TO noufukindbgym;
権限付与が成功しました。
SQL> _
```

13. 下記画面例を参考に次のコマンドを入力し実行します。(※ △は半角スペースを表します。)

```
CREATE△USER△noufukindbref
IDENTIFIED△BY△" <noufukindbref のパスワード>"
DEFAULT△TABLESPACE△users
TEMPORARY△TABLESPACE△temp
PROFILE△DEFAULT;
```

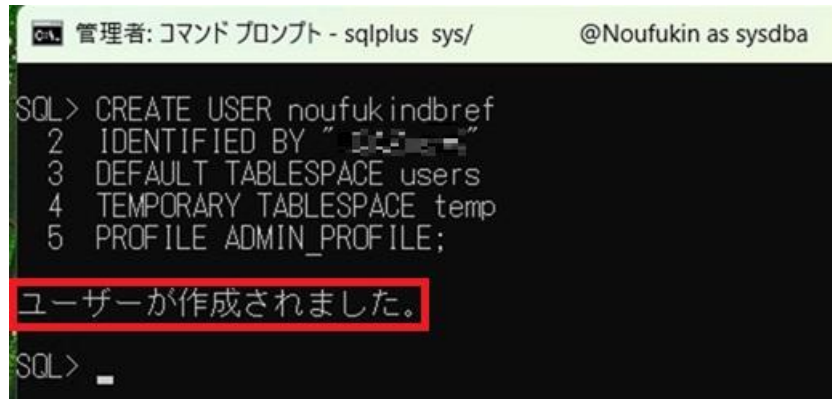
管理者: コマンド プロンプト - sqlplus sys/ @Noufukin as sysdba

```
SQL> CREATE USER noufukindbref
2 IDENTIFIED BY " <noufukindbref のパスワード>"
3 DEFAULT TABLESPACE users
4 TEMPORARY TABLESPACE temp
5 PROFILE ADMIN_PROFILE;
```

⚠ 注意事項

<noufukindbref のパスワード>については、各都道府県にて事前に設計してください。

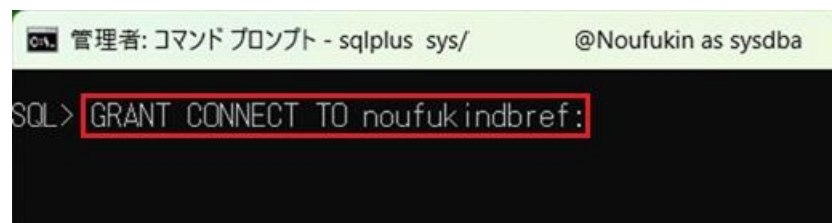
14. 「ユーザーが作成されました。」と表示されることを確認します。



```
管理者: コマンド プロンプト - sqlplus sys/ @Noufukin as sysdba
SQL> CREATE USER noufukindbref
2 IDENTIFIED BY "noufukindbref"
3 DEFAULT TABLESPACE users
4 TEMPORARY TABLESPACE temp
5 PROFILE ADMIN_PROFILE;
ユーザーが作成されました。
SQL> _
```

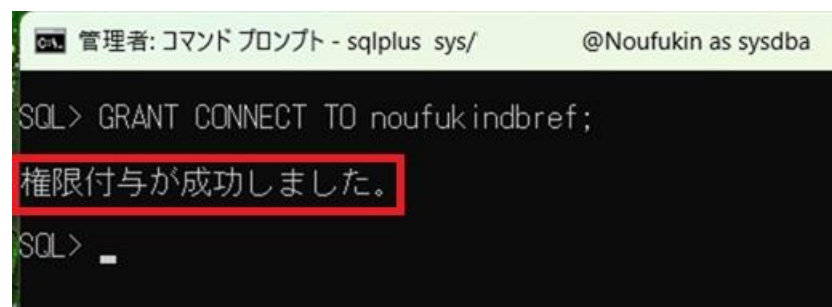
15. 次のコマンドをコピーし、コマンドプロンプトに貼り付けて実行します。

GRANT CONNECT TO noufukindbref;



```
管理者: コマンド プロンプト - sqlplus sys/ @Noufukin as sysdba
SQL> GRANT CONNECT TO noufukindbref;
```

16. 「権限付与が成功しました。」と表示されることを確認します。



```
管理者: コマンド プロンプト - sqlplus sys/ @Noufukin as sysdba
SQL> GRANT CONNECT TO noufukindbref;
権限付与が成功しました。
SQL> _
```

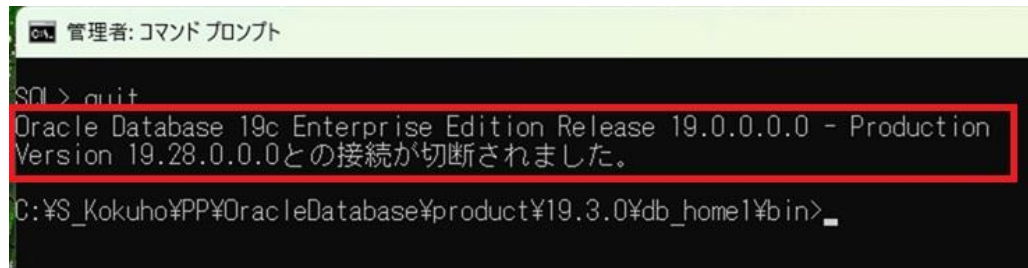
17. 次のコマンドをコピーし、コマンドプロンプトに貼り付けて実行します。

quit



```
管理者: コマンド プロンプト - sqlplus sys/ @Noufukin as sysdba
SQL> quit.
```

18. 「Oracle Database 19c Enterprise Edition Release 19.0.0.0.0 - Production Version 19.28.0.0.0 との接続が切断されました。」と表示されることを確認します。

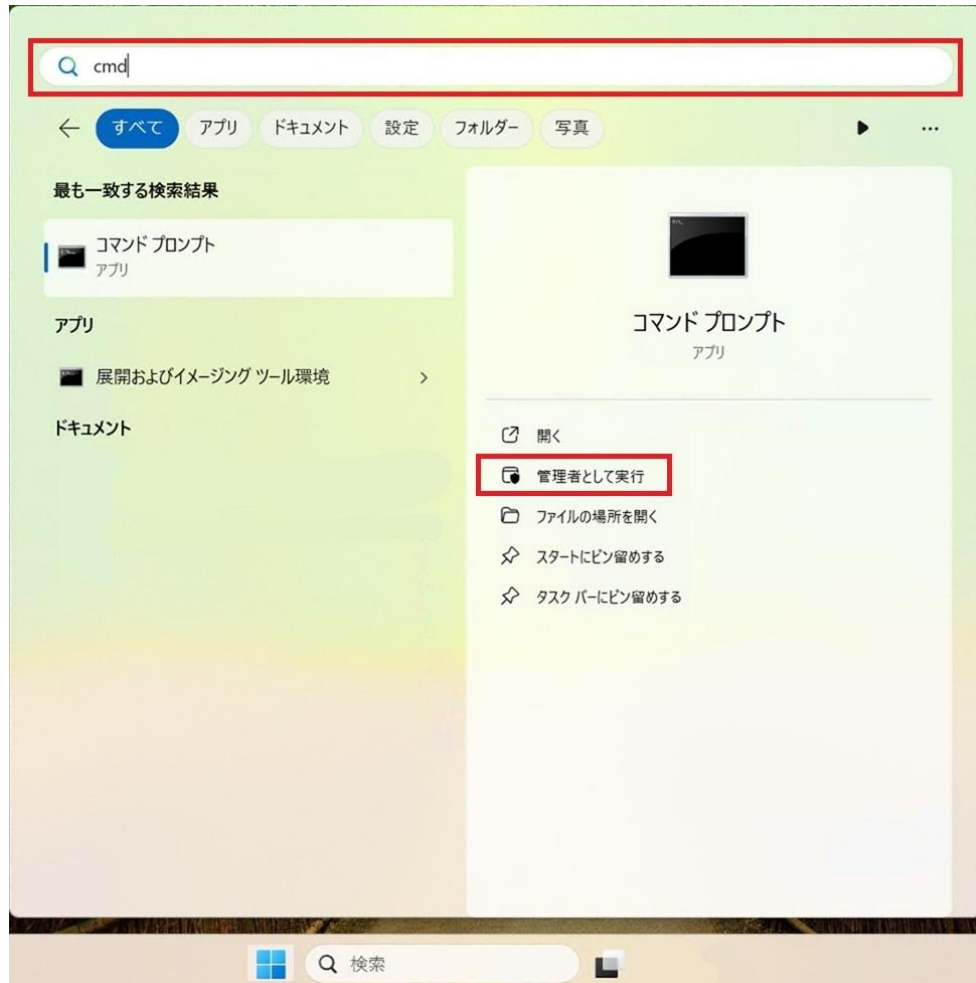


```
管理者: コマンド プロンプト
SQL > quit
Oracle Database 19c Enterprise Edition Release 19.0.0.0.0 - Production
Version 19.28.0.0.0 との接続が切断されました。
C:\$S_Kokuho\PP\OracleDatabase\product\19.3.0\db_home1\bin>
```

 注意事項

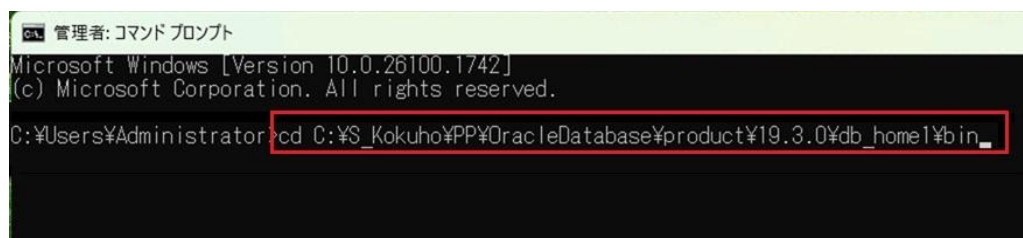
Oracle Database のエディションやバージョンによって、表示される文字が変わることがありますが、「接続が切断されました。」と表示されれば問題ありません。

19. コマンドプロンプトを閉じます。
20. [スタート]アイコンをクリックし、検索ボックス欄に「cmd」と入力し、コマンドプロンプトの「管理者として実行」をクリックします。



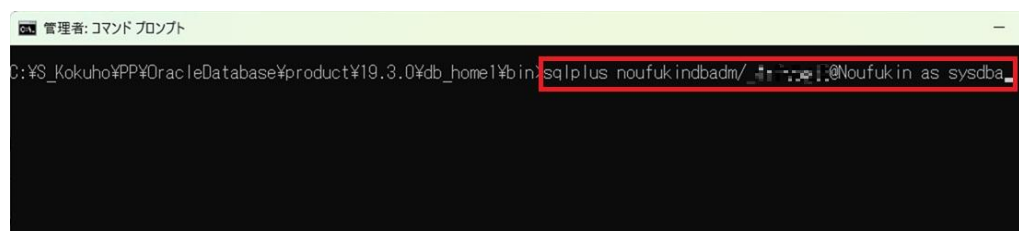
21. コマンドプロンプト画面で、次のコマンドをコピーし、コマンドプロンプトに貼り付けて実行します。

```
cd C:\$S_Kokuho\PP\OracleDatabase\product\19.3.0\db_home1\bin
```



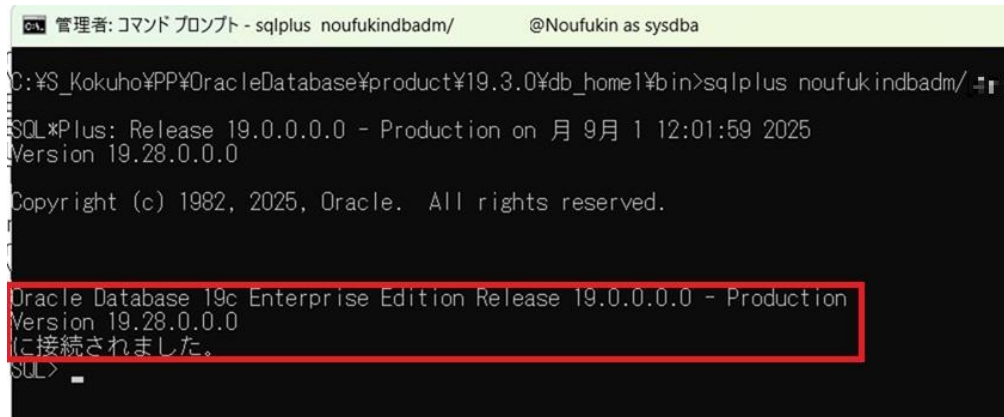
22. 下記画面例を参考に次のコマンドを入力し実行します。(※ △は半角スペースを表します。)

```
sqlplus△noufukindbadm/<noufukindbadm のパスワード>@Noufukin
```



23. 「Oracle Database 19c Enterprise Edition Release 19.0.0.0.0 - Production

Version 19.28.0.0.0に接続されました。」と表示されることを確認します。



```
管理者: コマンド プロンプト - sqlplus noufukindbadm/ @Noufukin as sysdba
C:\S_Kokuho\PP\OracleDatabase\product\19.3.0\db_home1\bin>sqlplus noufukindbadm/
SQL*Plus: Release 19.0.0.0.0 - Production on 月 9月 1 12:01:59 2025
Version 19.28.0.0.0
Copyright (c) 1982, 2025, Oracle. All rights reserved.

Oracle Database 19c Enterprise Edition Release 19.0.0.0.0 - Production
Version 19.28.0.0.0
に接続されました。
SQL>
```

 注意事項

Oracle Database のエディションやバージョンによって、表示される文字が変わることがありますが、「接続されました。」と表示されれば問題ありません。

24. 次のコマンドをコピーし、コマンドプロンプトに貼り付けて実行します。

quit

25. 「Oracle Database 19c Enterprise Edition Release 19.0.0.0.0 - Production Version 19.28.0.0.0 との接続が切断されました。」と表示されることを確認します。

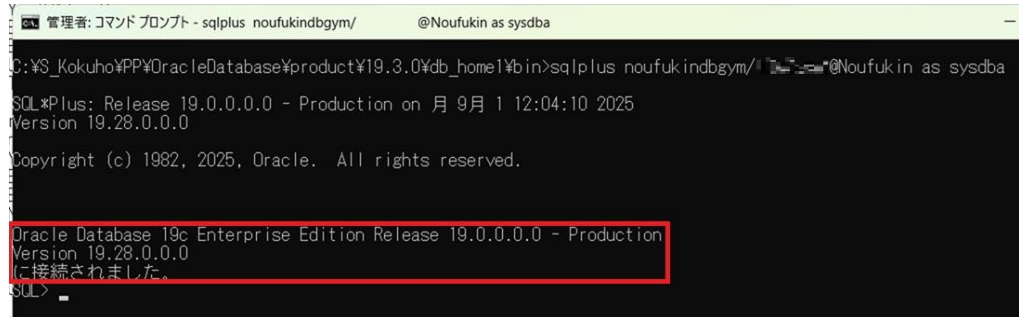
⚠ 注意事項

Oracle Database のエディションやバージョンによって、表示される文字が変わることがありますが、「接続が切断されました。」と表示されれば問題ありません。

26. 下記画面例を参考に次のコマンドを入力し実行します。(※ △は半角スペースを表します。)

sqlplus△noufukindbgym/<noufukindbgym のパスワード>@Noufukin

27. 「Oracle Database 19c Enterprise Edition Release 19.0.0.0.0 - Production Version 19.28.0.0.0 に接続されました。」と表示されることを確認します。



```

C:\$S_Kokuho¥PP¥OracleDatabase¥product¥19.3.0¥db_home1¥bin>sqlplus noufukindbgym/11g@Noufukin as sysdba

SQL*Plus: Release 19.0.0.0.0 - Production on 月 9月 1 12:04:10 2025
Version 19.28.0.0.0

Copyright (c) 1982, 2025, Oracle. All rights reserved.

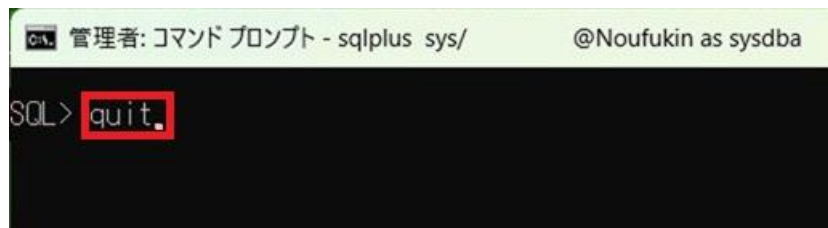
Oracle Database 19c Enterprise Edition Release 19.0.0.0.0 - Production
Version 19.28.0.0.0
に接続されました。
SQL>
  
```

⚠ 注意事項

Oracle Database のエディションやバージョンによって、表示される文字が変わることがありますが、「接続されました。」と表示されれば問題ありません。

28. 次のコマンドをコピーし、コマンドプロンプトに貼り付けて実行します。

quit

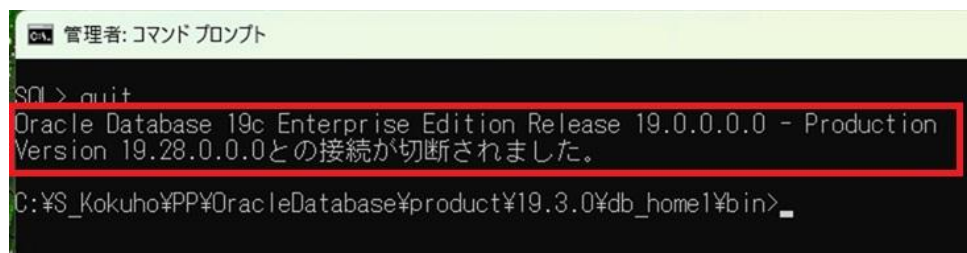


```

C:\$S_Kokuho¥PP¥OracleDatabase¥product¥19.3.0¥db_home1¥bin>sqlplus sys/11g@Noufukin as sysdba

SQL> quit
  
```

29. 「Oracle Database 19c Enterprise Edition Release 19.0.0.0.0 - Production Version 19.28.0.0.0 との接続が切断されました。」と表示されることを確認します。



```

C:\$S_Kokuho¥PP¥OracleDatabase¥product¥19.3.0¥db_home1¥bin>sqlplus sys/11g@Noufukin as sysdba

SQL> quit

Oracle Database 19c Enterprise Edition Release 19.0.0.0.0 - Production
Version 19.28.0.0.0 との接続が切断されました。

C:\$S_Kokuho¥PP¥OracleDatabase¥product¥19.3.0¥db_home1¥bin>
  
```

⚠ 注意事項

Oracle Database のエディションやバージョンによって、表示される文字が変わることがありますが、「接続が切断されました。」と表示されれば問題ありません。

30. 下記画面例を参考に次のコマンドを入力し実行します。(※ △は半角スペースを表します。)

sqlplus△noufukindbref/<noufukindbref のパスワード>@Noufukin

```

C:\$S_Kokuho\PP\OracleDatabase\product\19.3.0\db_home1\bin>sqlplus noufukindbref/12345678@Noufukin as sysdba

```

31. 「Oracle Database 19c Enterprise Edition Release 19.0.0.0.0 - Production Version 19.28.0.0.0 に接続されました。」と表示されることを確認します。

```

C:\$S_Kokuho\PP\OracleDatabase\product\19.3.0\db_home1\bin>sqlplus noufukindbref/12345678@Noufukin
SQL*Plus: Release 19.0.0.0.0 - Production on 木 10月 16 16:24:48 2025
Version 19.28.0.0.0

Copyright (c) 1982, 2025, Oracle. All rights reserved.

最終正常ログイン時間: 火 9月 16 2025 15:16:59 -07:00

Oracle Database 19c Enterprise Edition Release 19.0.0.0.0 - Production
Version 19.28.0.0.0
に接続されました。
SQL>

```

⚠ 注意事項

Oracle Database のエディションやバージョンによって、表示される文字が変わりますが、「接続されました。」と表示されれば問題ありません。

32. 次のコマンドをコピーし、コマンドプロンプトに貼り付けて実行します。

quit

```

C:\$S_Kokuho\PP\OracleDatabase\product\19.3.0\db_home1\bin>sqlplus sys/12345678@Noufukin as sysdba
SQL> quit.

```

33. 「Oracle Database 19c Enterprise Edition Release 19.0.0.0.0 - Production Version 19.28.0.0.0 との接続が切断されました。」と表示されることを確認します。

```

C:\$S_Kokuho\PP\OracleDatabase\product\19.3.0\db_home1\bin>sqlplus sys/12345678@Noufukin as sysdba
SQL> quit
Oracle Database 19c Enterprise Edition Release 19.0.0.0.0 - Production
Version 19.28.0.0.0 との接続が切断されました。
C:\$S_Kokuho\PP\OracleDatabase\product\19.3.0\db_home1\bin>

```

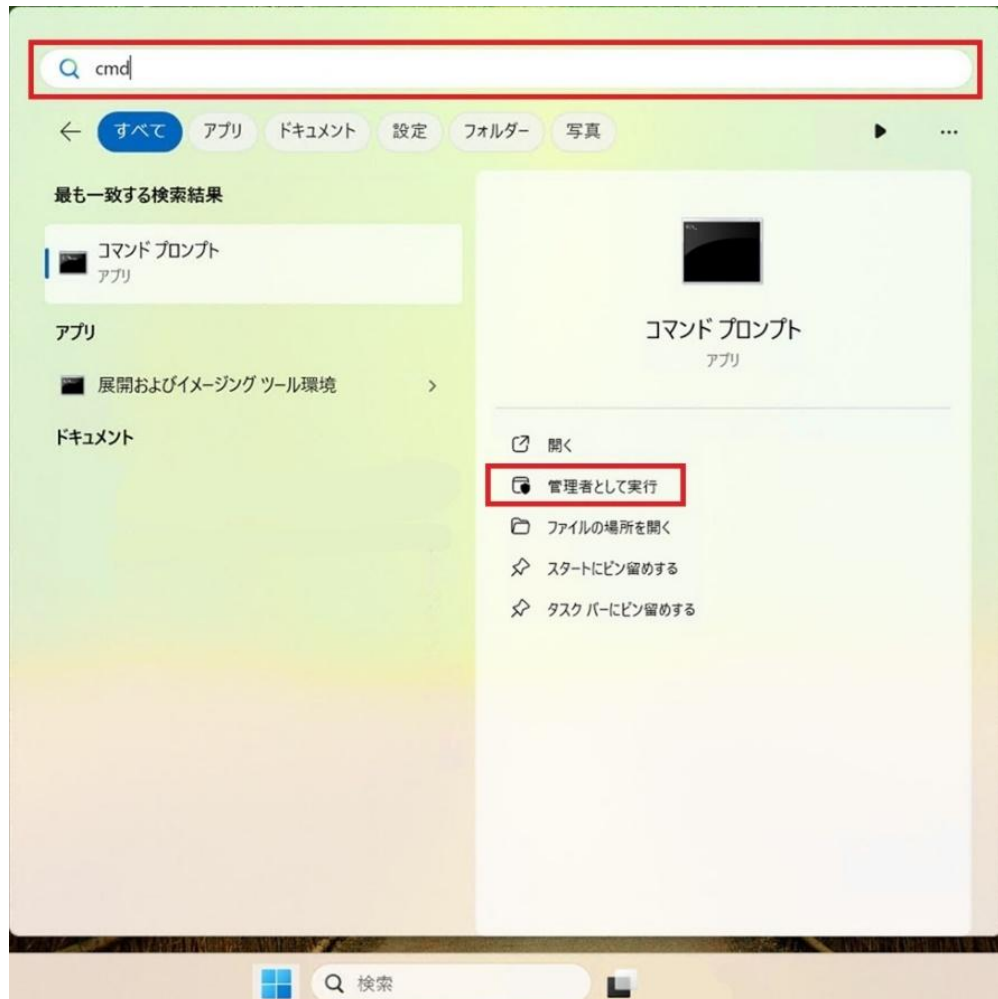
⚠ 注意事項

Oracle Database のエディションやバージョンによって、表示される文字が変わりますが、「接続が切断されました。」と表示されれば問題ありません。

34. コマンドプロンプトを閉じます。

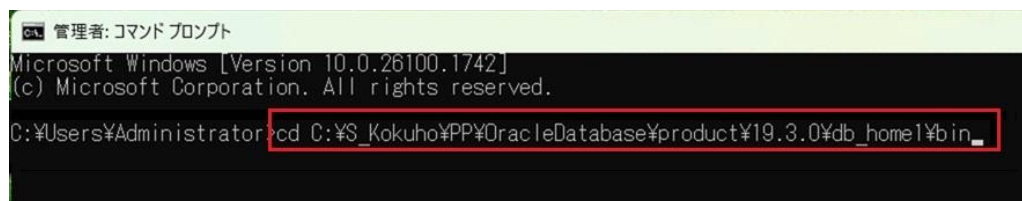
(e) 初期化パラメータの編集

1. [スタート]アイコンをクリックし、検索ボックス欄に「cmd」と入力し、コマンドプロンプトの「管理者として実行」をクリックします。



2. コマンドプロンプト画面で、次のコマンドをコピーし、コマンドプロンプトに貼り付けて実行します。

```
cd C:¥$¥_Kokuho¥PP¥OracleDatabase¥product¥19.3.0¥db_home1¥bin
```



3. 下記画面例を参考に次のコマンドを入力し実行します。(※ △は半角スペースを表します。)

sqlplus△sys/<sys のパスワード>@Noufukin△as△sysdba

```

C:\Users\Administrator>cd C:\$S_Kokuho\PP\OracleDatabase\product\19.3.0\db_home1\bin
C:\$S_Kokuho\PP\OracleDatabase\product\19.3.0\db_home1\bin>sqlplus sys/ [REDACTED]@Noufukin as sysdba
  
```

⚠ 注意事項

<sys のパスワード>は、「3.1.3 データベースソフトウェアの詳細設定」の「(2) データベースの構築」で設定したパスワードを入力してください。

4. 「Oracle Database 19c Enterprise Edition Release 19.0.0.0.0 - Production Version 19.28.0.0.0 に接続されました。」と表示されることを確認します。

```

Microsoft Windows [Version 10.0.26100.1742]
(c) Microsoft Corporation. All rights reserved.

C:\Users\Administrator>cd C:\$S_Kokuho\PP\OracleDatabase\product\19.3.0\db_home1\bin
C:\$S_Kokuho\PP\OracleDatabase\product\19.3.0\db_home1\bin>sqlplus sys/ [REDACTED]@Noufukin as sysdba

SQL*Plus: Release 19.0.0.0.0 - Production on 月 9月 1 11:42:07 2025
Version 19.28.0.0.0

Copyright (c) 1982, 2025, Oracle. All rights reserved.

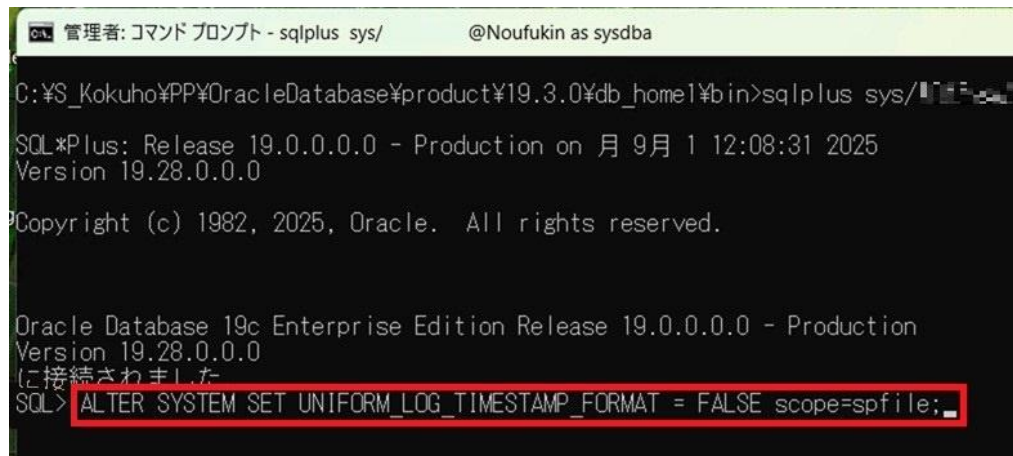
Oracle Database 19c Enterprise Edition Release 19.0.0.0.0 - Production
Version 19.28.0.0.0
に接続されました。
SQL>
  
```

⚠ 注意事項

Oracle Database のエディションやバージョンによって、表示される文字が変わることがありますが、「接続されました。」と表示されれば問題ありません。

5. 次のコマンドをコピーし、コマンドプロンプトに貼り付けて実行します。

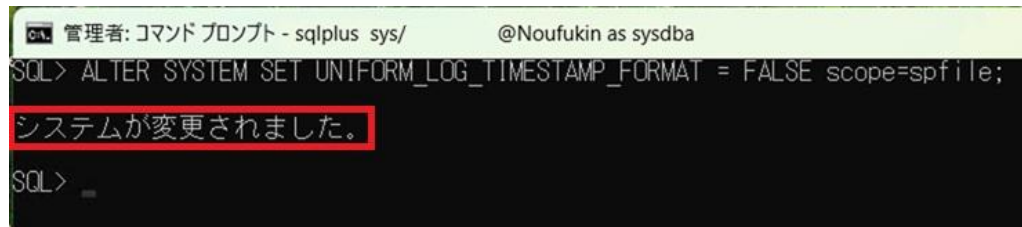
```
ALTER SYSTEM SET UNIFORM_LOG_TIMESTAMP_FORMAT = FALSE scope=spfile;
```



```
C:\$S_Kokuho\PP\OracleDatabase\product\19.3.0\db_home1\bin>sqlplus sys/
SQL*Plus: Release 19.0.0.0.0 - Production on 月 9月 1 12:08:31 2025
Version 19.28.0.0.0
Copyright (c) 1982, 2025, Oracle. All rights reserved.

Oracle Database 19c Enterprise Edition Release 19.0.0.0.0 - Production
Version 19.28.0.0.0
に接続されました
SQL> ALTER SYSTEM SET UNIFORM_LOG_TIMESTAMP_FORMAT = FALSE scope=spfile;
```

6. 「システムが変更されました。」と表示されることを確認します。



```
SQL> ALTER SYSTEM SET UNIFORM_LOG_TIMESTAMP_FORMAT = FALSE scope=spfile;
システムが変更されました。
SQL>
```

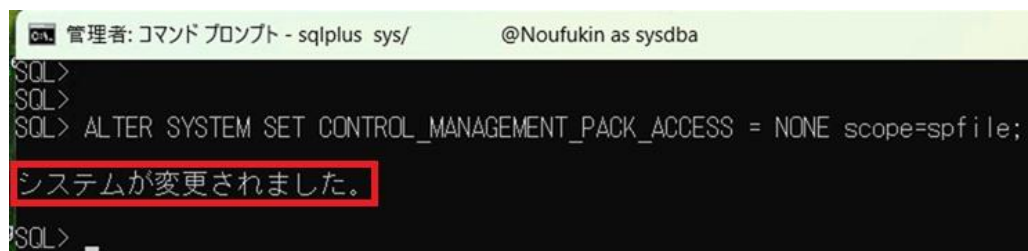
7. 次のコマンドをコピーし、コマンドプロンプトに貼り付けて実行します。

```
ALTER SYSTEM SET CONTROL_MANAGEMENT_PACK_ACCESS = NONE scope=spfile;
```



```
SQL>
SQL>
SQL> ALTER SYSTEM SET CONTROL_MANAGEMENT_PACK_ACCESS = NONE scope=spfile;
```

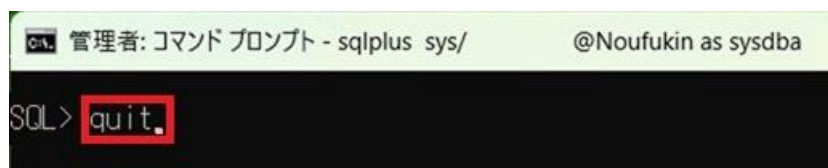
8. 「システムが変更されました。」と表示されることを確認します。



```
SQL>
SQL>
SQL> ALTER SYSTEM SET CONTROL_MANAGEMENT_PACK_ACCESS = NONE scope=spfile;
システムが変更されました。
SQL>
```

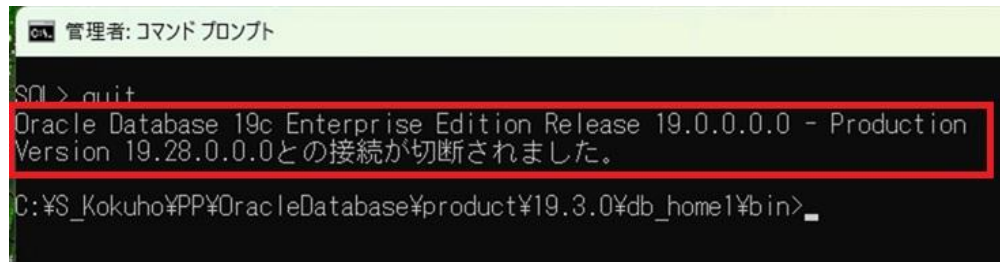
9. 次のコマンドをコピーし、コマンドプロンプトに貼り付けて実行します。

```
quit
```



```
SQL> quit.
```

10. 「Oracle Database 19c Enterprise Edition Release 19.0.0.0.0 - Production Version 19.28.0.0.0 との接続が切断されました。」と表示されることを確認します。



```
管理者: コマンド プロンプト
SQL> quit
Oracle Database 19c Enterprise Edition Release 19.0.0.0.0 - Production
Version 19.28.0.0.0 との接続が切断されました。
C:\$S_Kokuho\PP\OracleDatabase\product\19.3.0\db_home1\bin>_
```

 注意事項

Oracle Database のエディションやバージョンによって、表示される文字が変わることがありますが、「接続が切断されました。」と表示されれば問題ありません。

11. コマンドプロンプトを閉じます。

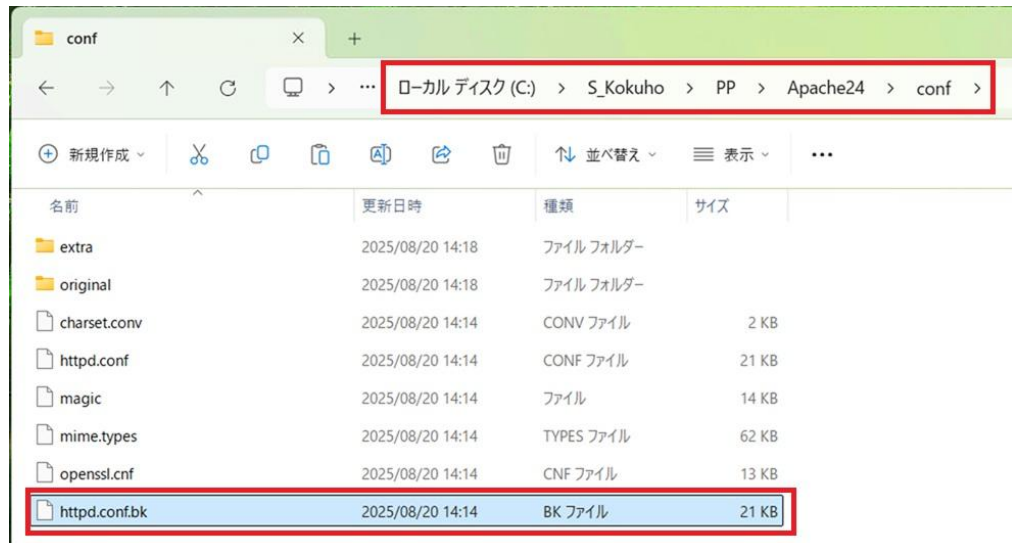
3.1.4 Web サーバソフトウェアの詳細設定

(1) Web サーバソフトウェアの詳細設定ファイルの取得

国保保険者標準事務処理システム サポートサイトにログインし、「国保事業費納付金等算定標準システム」・「お知らせ」・「国保事業費納付金等算定標準システム更新プログラム（SB03-00）の提供について」から、**Web** サーバソフトウェアの詳細設定ファイルをダウンロードしてください。

(2) httpd.conf ファイルの編集

1. 「C:\\$S_Kokuho\PP\Apache24\conf」フォルダ配下の「httpd.conf」ファイルをコピーし、同じフォルダに「httpd.conf.bk」として貼り付けます。



2. 「3.1.4(1) Web サーバソフトウェア詳細設定ファイルの取得」で取得した「Web サーバソフトウェアの詳細設定ファイル¥納付金スタンドアロン端末¥httpd.conf」ファイルを、「C:\\$S_Kokuho\PP\Apache24\conf」フォルダ配下にコピーします。

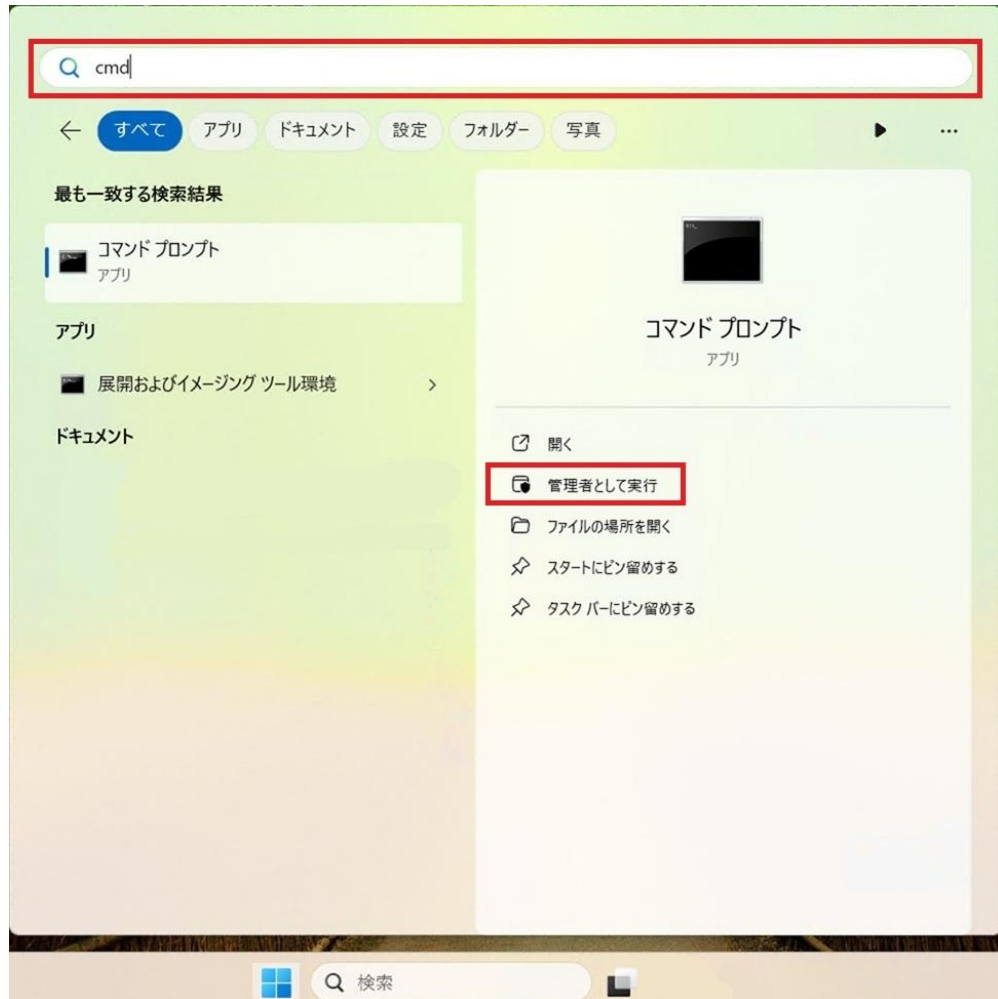


3. 「ファイルの置換またはスキップ」画面で、「ファイルを置き換える」をクリックします。



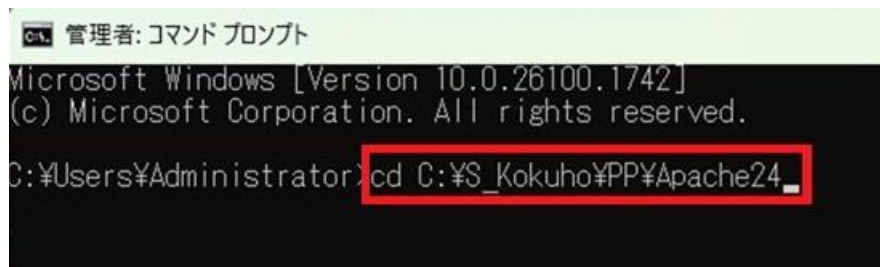
(3) Apache HTTP Server のサービス登録

1. [スタート]アイコンをクリックし、検索ボックス欄に「cmd」と入力し、コマンドプロンプトの「管理者として実行」をクリックします。



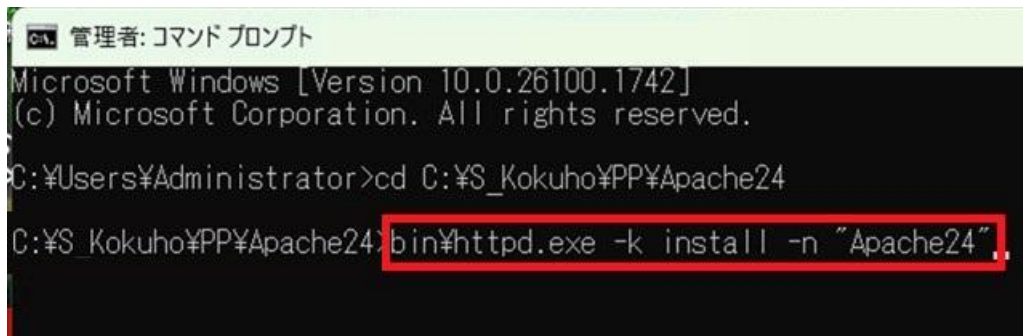
2. 次のコマンドをコピーし、コマンドプロンプトに貼り付けて実行します。

```
cd C:¥$S_Kokuho¥PP¥Apache24
```



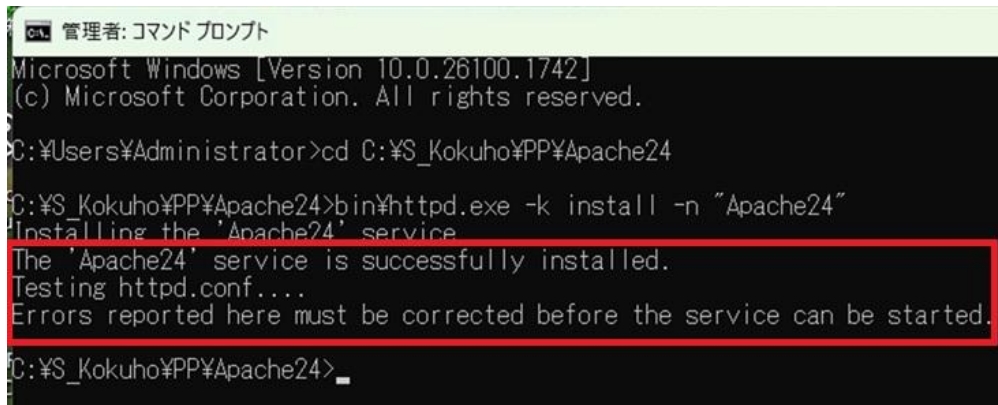
3. 次のコマンドをコピーし、コマンドプロンプトに貼り付けて実行します。

```
bin¥httpd.exe -k install -n "Apache24"
```



A screenshot of a Windows Command Prompt window titled "管理者: コマンド プロンプト". The window shows the following text: "Microsoft Windows [Version 10.0.26100.1742] (c) Microsoft Corporation. All rights reserved. C:¥Users¥Administrator>cd C:¥S_Kokuho¥PP¥Apache24". The command "bin¥httpd.exe -k install -n "Apache24"" is being entered at the prompt and is highlighted with a red rectangular box.

4. コマンドの実行結果に、「The 'Apache24' service is successfully installed.」と表示され、「Errors reported here must be corrected before the service can be started.」の下にエラーメッセージが表示されていないことを確認し、コマンドプロンプトを閉じます。

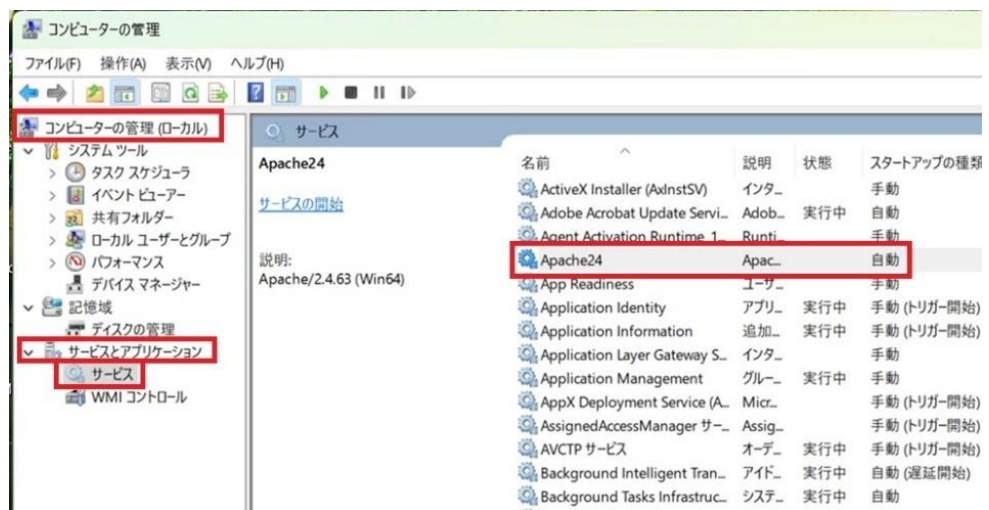


A screenshot of a Windows Command Prompt window titled "管理者: コマンド プロンプト". The window shows the following text: "Microsoft Windows [Version 10.0.26100.1742] (c) Microsoft Corporation. All rights reserved. C:¥Users¥Administrator>cd C:¥S_Kokuho¥PP¥Apache24". The command "bin¥httpd.exe -k install -n "Apache24"" has been executed, and the output is displayed: "Installing the 'Apache24' service. The 'Apache24' service is successfully installed. Testing httpd.conf.... Errors reported here must be corrected before the service can be started." The output text is highlighted with a red rectangular box. The prompt "C:¥S_Kokuho¥PP¥Apache24>" is visible at the bottom.

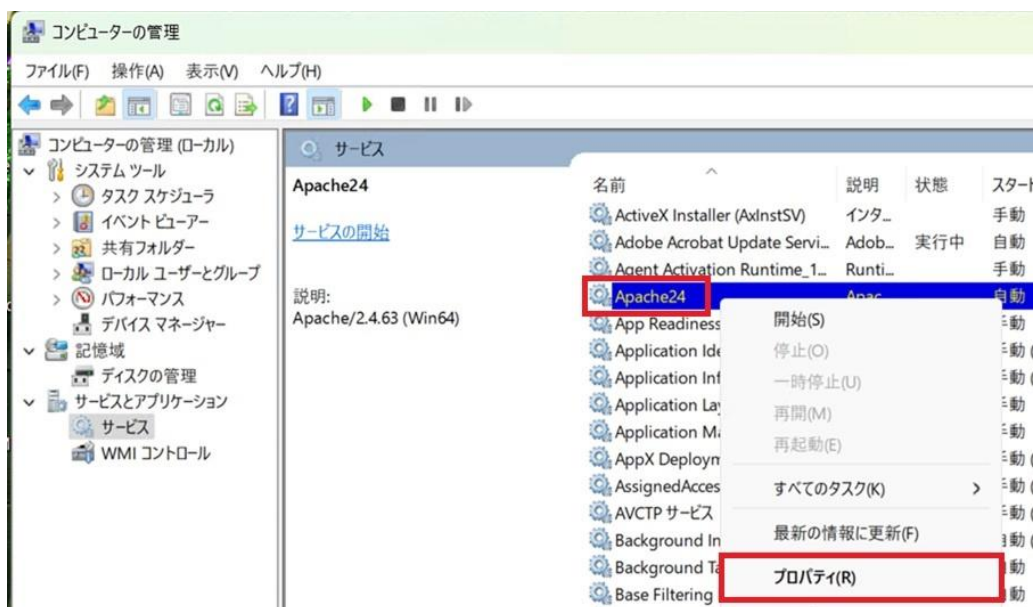
5. [スタート]アイコンを右クリックし、「コンピューターの管理」をクリックします。



6. 「コンピューターの管理」画面で、画面左側から「コンピューターの管理（ローカル）」－「サービスとアプリケーション」－「サービス」をクリックし、画面中央の「サービス」に「Apache24」が表示されていることを確認します。



7. 「Apache24」を右クリックし、「プロパティ」をクリックします。



8. 「(ローカルコンピュータ) Apache24 のプロパティ」画面で、下記画面例を参考に表 3-22 の設定値を入力し、「適用」をクリックし、「OK」をクリックします。



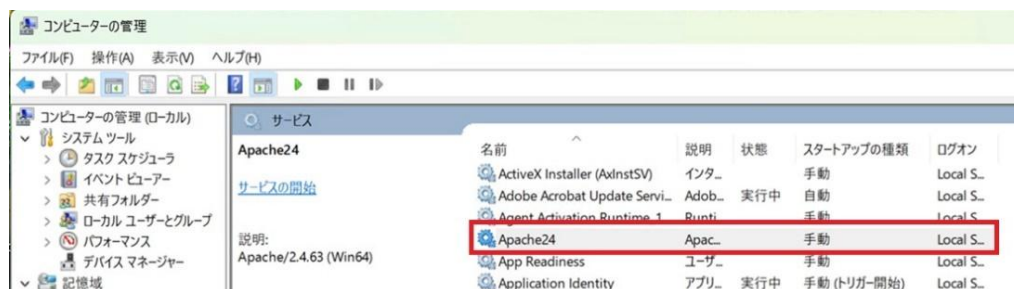
表 3-22 Apache サービス設定

No	対象機器	設定項目	設定値
1	納付金スタンドア	スタートアップの種類	手動

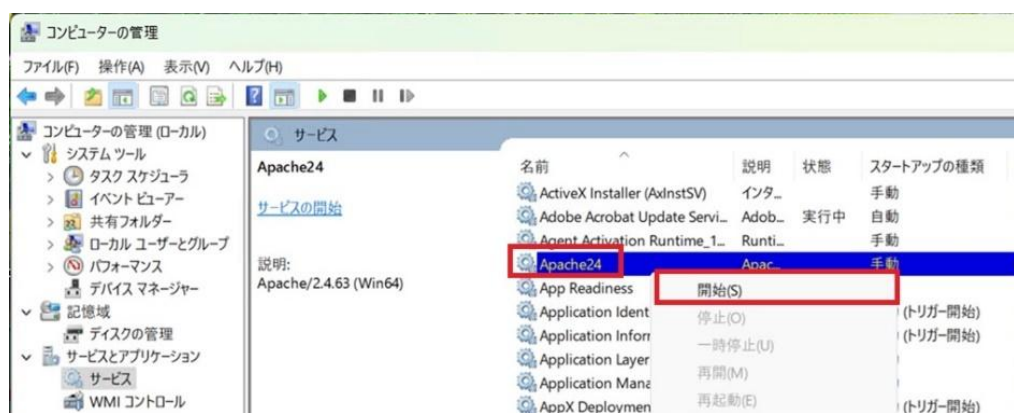
3 ミドルウェアの詳細設定

	ロン端末		
--	------	--	--

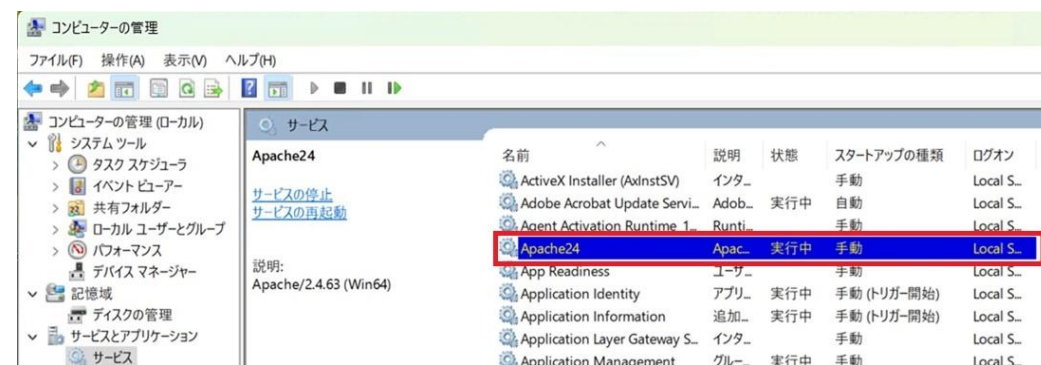
9. 「コンピューターの管理」画面で、「Apache24」の「スタートアップの種類」が手順 8. で設定した設定値になっていることを確認します。



10. 「Apache24」を右クリックし、「開始」をクリックします。



11. 「Apache24」の「状態」欄が、「空白」から「実行中」になったことを確認し、「コンピューターの管理」画面を閉じます。



3.1.5 アプリケーションサーバソフトウェアの詳細設定

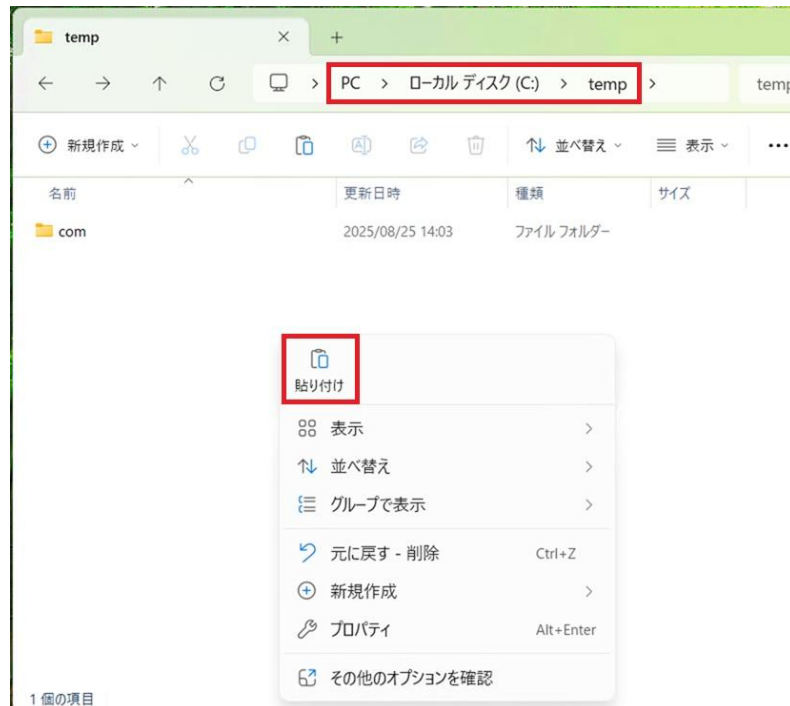
(1) アプリケーションサーバソフトウェアの詳細設定ファイルの取得

国保保険者標準事務処理システム サポートサイトにログインし、「国保事業費納付金等算定標準システム」・「お知らせ」・「国保事業費納付金等算定標準システム更新プログラム (SB03-00) の提供について」から、アプリケーションサーバソフトウェアの詳細設定ファイルをダウンロードしてください。

(2) Oracle WebLogic Server Standard Edition のセットアップ

(a) Weblogic サービス登録

1. エクスプローラーを起動し、「3.1.5(1) アプリケーションサーバソフトウェアの詳細設定ファイルの取得」で取得した「アプリケーションサーバソフトウェアの詳細設定ファイル¥納付金スタンドアロン端末¥ServerStopper.java」ファイルを、「C:¥temp」フォルダ配下にコピーします。



2. 「C:¥temp¥ServerStopper.java」ファイルを、メモ帳で開いてください。

```

ServerStopper.java - メモ帳
ファイル(F) 編集(E) 書式(O) 表示(V) ヘルプ(H)
package com.myClasses;

import java.net.URL;
import java.net.URLClassLoader;
import java.io.File;
import java.util.Set;
import java.util.Iterator;
import java.rmi.RemoteException;
import javax.naming.Context;
import javax.management.ObjectName;

import weblogic.jndi.Environment;
import weblogic.management.MBeanHome;
import weblogic.management.WebLogicMBean;
import weblogic.management.configuration.ServerMBean;
import weblogic.management.runtime.ServerRuntimeMBean;
import weblogic.management.runtime.ServerStates;
import weblogic.management.WebLogicObjectName;

public class ServerStopper {
    public static void stop() throws Exception {
        MBeanHome home = null;
    }
}

```

3. 「ServerStopper.java - メモ帳」画面で、「<weblogic のユーザー>」および「<weblogic のパスワード>」に「付録.B.2 ミドルウェアのインストール」の「(3) Oracle WebLogic Server Standard Edition のインストール」で設定したユーザー名、パスワードに修正します。

```
//url of the Admin server
String url = "t3://localhost:7001";
String username = "<weblogic のユーザー>";
String password = "<weblogic のパスワード>";
ServerRuntimeMBean serverRuntime = null;
Set mbeanSet = null;
Iterator mbeanIterator = null;
```

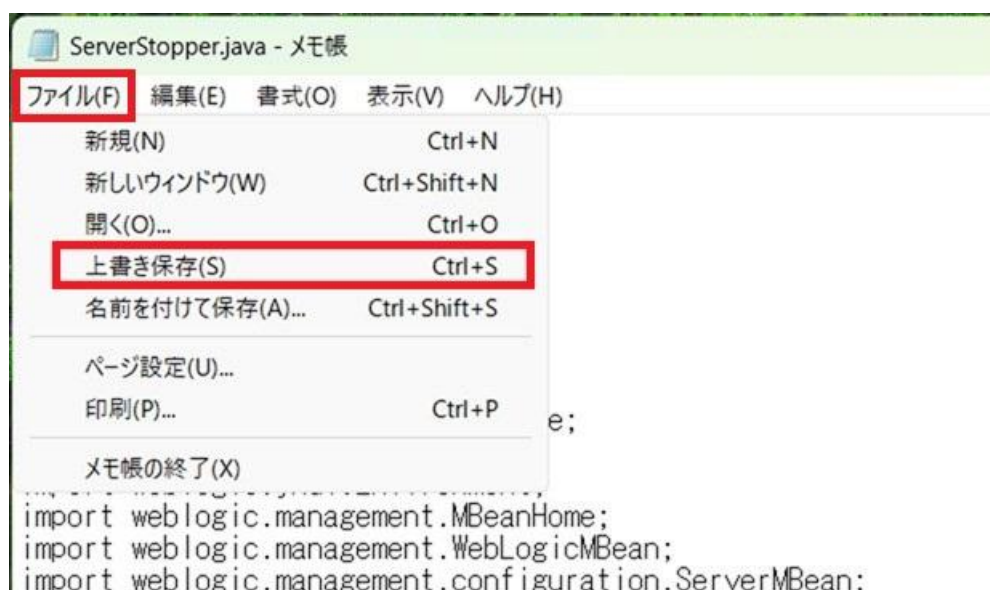
⚠ 注意事項

下記画面例を参考に修正してください。本手順では、「weblogic」を「<weblogic のユーザー>」の例、「XXXXXXXX」を「<weblogic のパスワード>」の例として記載しています。



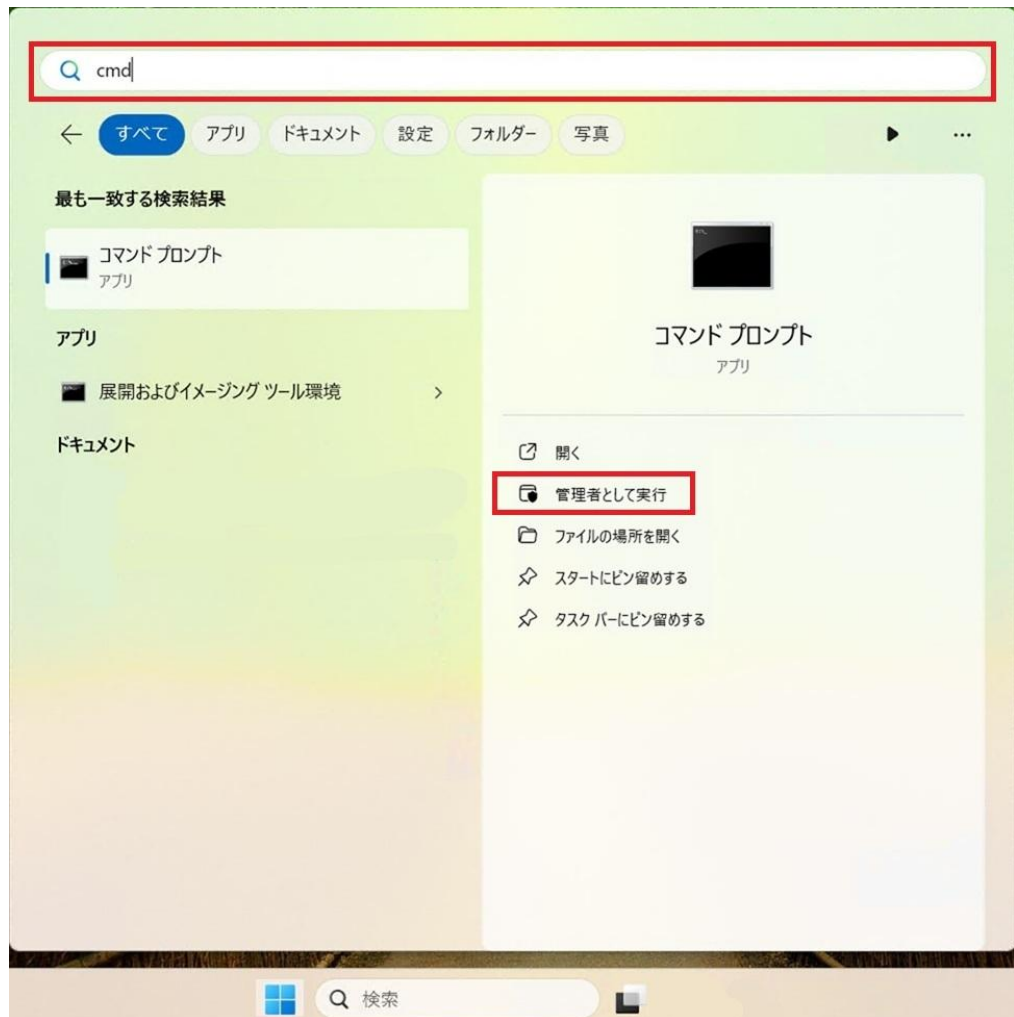
```
*ServerStopper.java - メモ帳
ファイル(F) 編集(E) 書式(O) 表示(V) ヘルプ(H)
//url of the Admin server
String url = "t3://localhost:7001";
String username = "weblogic";
String password = "XXXXXXXX";
ServerRuntimeMBean serverRuntime = null;
Set mbeanSet = null;
Iterator mbeanIterator = null;
```

4. 「ファイル」 - 「上書き保存」をクリックします。



5. メモ帳を閉じます。

6. [スタート]アイコンをクリックし、検索ボックス欄に「cmd」と入力し、コマンドプロンプトの「管理者として実行」をクリックします。



7. コマンドプロンプト画面で、次のコマンドをコピーし、コマンドプロンプトに貼り付けて実行します。

```
cd C:¥temp
```

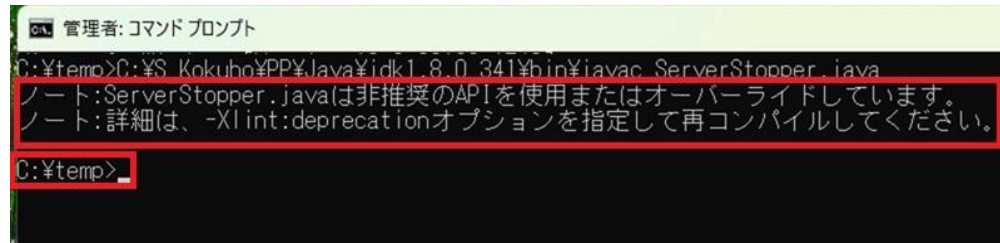
```
set
```

```
CLASSPATH=C:¥S_Kokuho¥PP¥Java¥jdk1.8.0_341¥lib¥tools.jar;C:¥S_Kokuho¥PP¥Weblogic¥wlserver¥server¥lib¥weblogic.jar
```

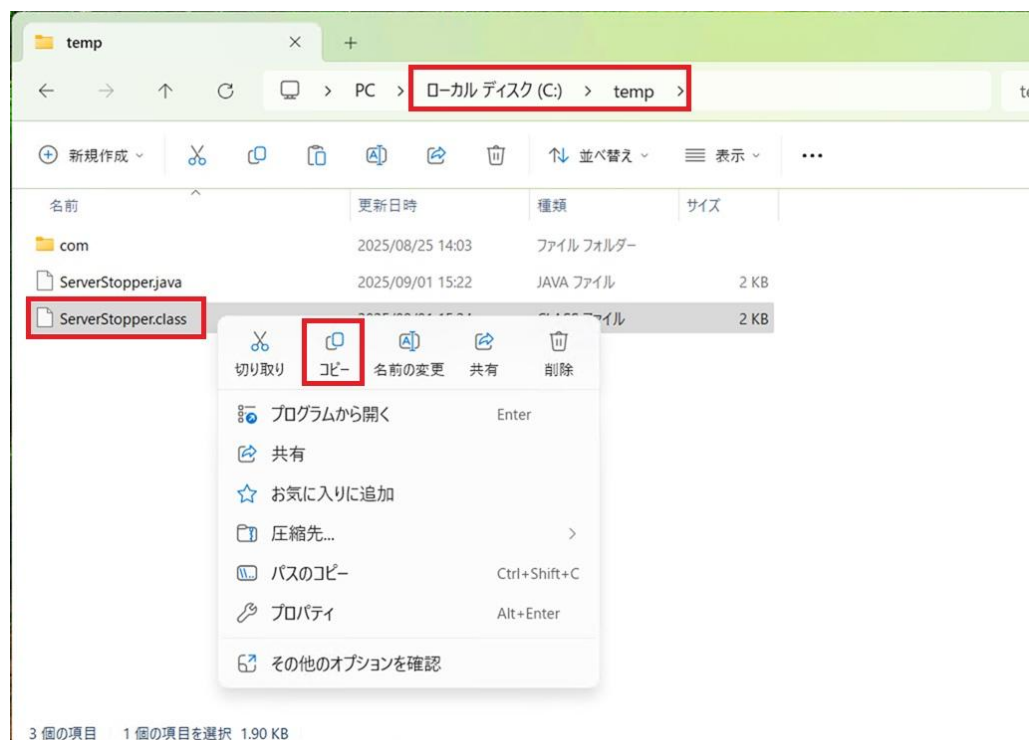
```
C:¥S_Kokuho¥PP¥Java¥jdk1.8.0_341¥bin¥javac ServerStopper.java
```



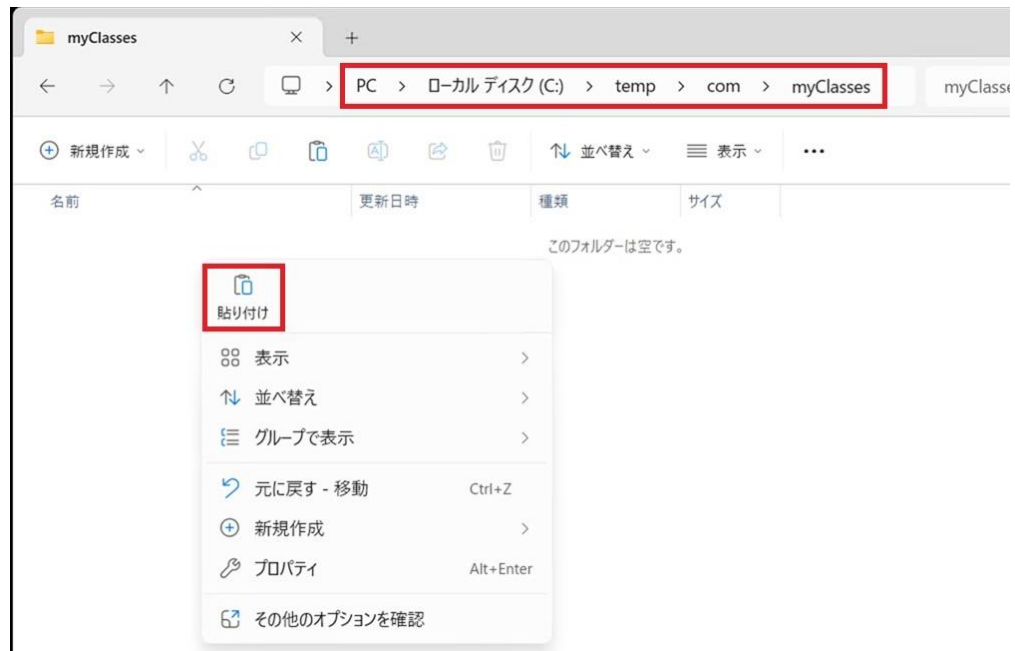
8. 「ノート:ServerStopper.javaは非推奨のAPIを使用またはオーバーライドしています。ノート:詳細は、-Xlint:deprecation オプションを指定して再コンパイルしてください。」というメッセージが表示され、プロンプトが表示されることを確認します。



9. 「C:\temp」フォルダに作成された「ServerStopper.class」ファイルをコピーします。



10. 手順 9. でコピーした「ServerStopper.class」ファイルを、「C:¥temp¥com¥myClasses」フォルダに貼り付けます。

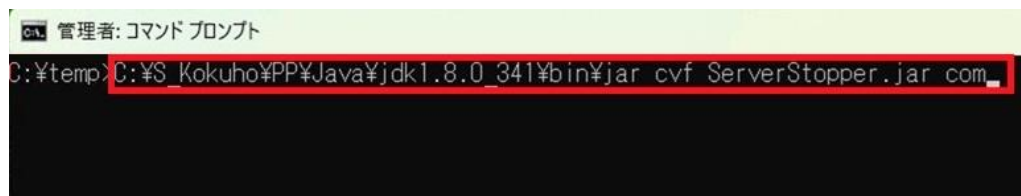


11. 「C:¥temp¥com¥myClasses」フォルダ配下に「ServerStopper.class」ファイルが存在することを確認します。



12. 次のコマンドをコピーし、コマンドプロンプトに貼り付けて実行します。

C:¥\$¥Kokuho¥PP¥Java¥jdk1.8.0_341¥bin¥jar cvf ServerStopper.jar com

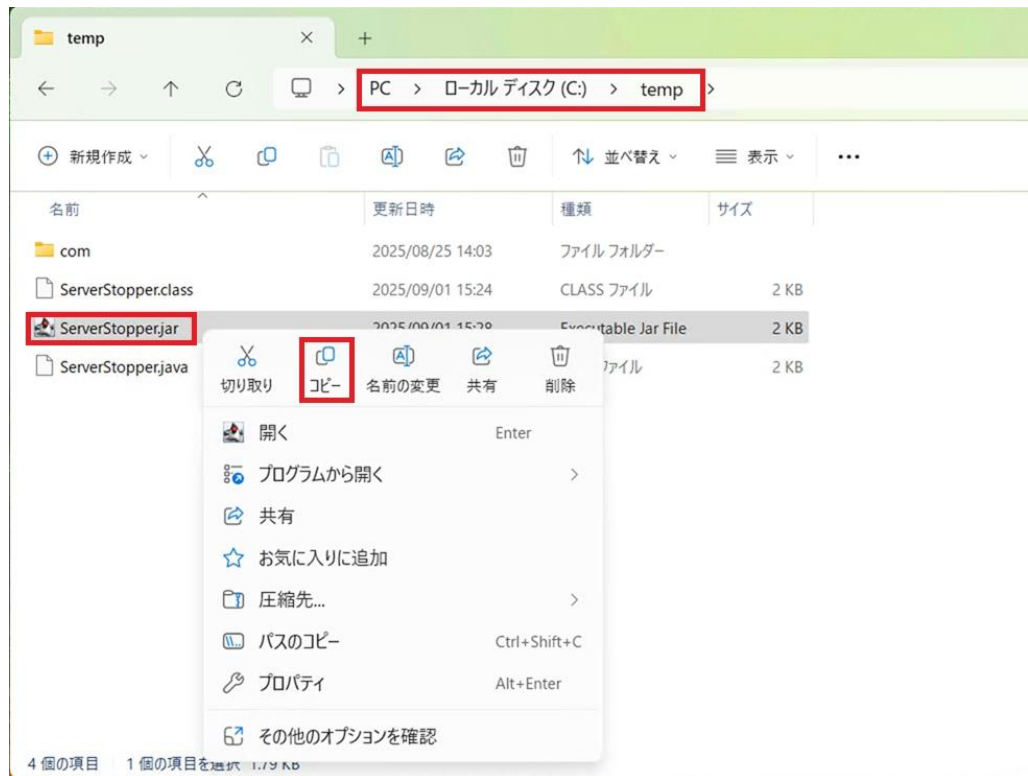


13. コマンドが実行され、プロンプトが表示されることを確認します。

```

C:\temp>C:\$Kokuho\PP\Java\jdk1.8.0_341\bin\jar cvf ServerStopper.jar com
マニフェストが追加されました
com/を添加中です(入=0)(出=0)(0%格納されました)
com/myClasses/を添加中です(入=0)(出=0)(0%格納されました)
com/myClasses/ServerStopper.classを添加中です(入=1947)(出=1146)(41%収縮されました)
C:\temp>
  
```

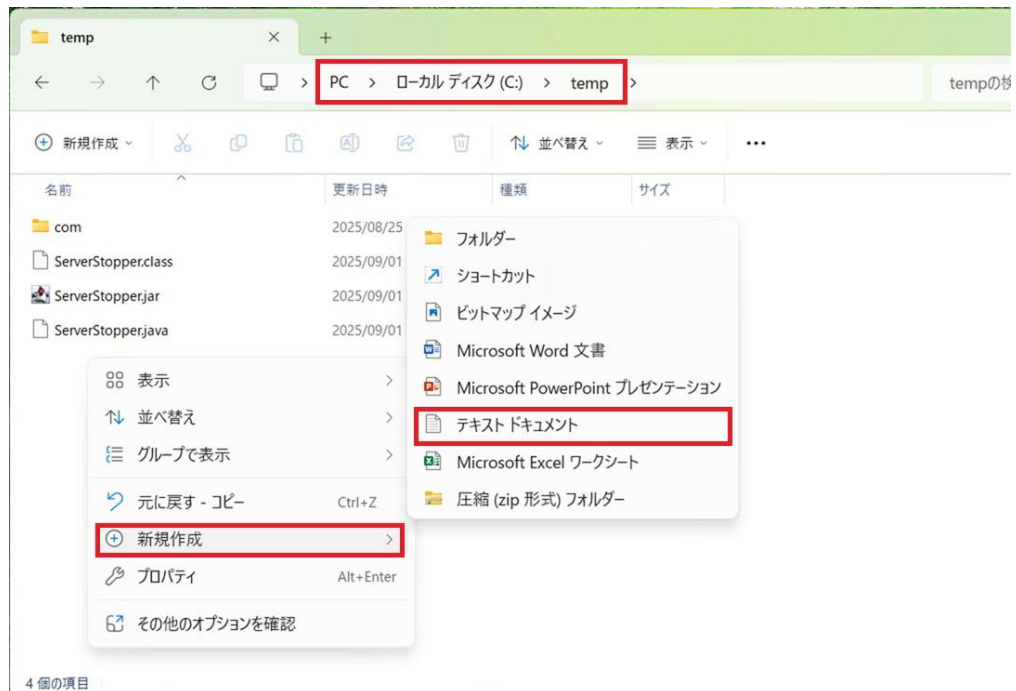
14. 「C:\temp」フォルダに作成された「ServerStopper.jar」ファイルをコピーします。



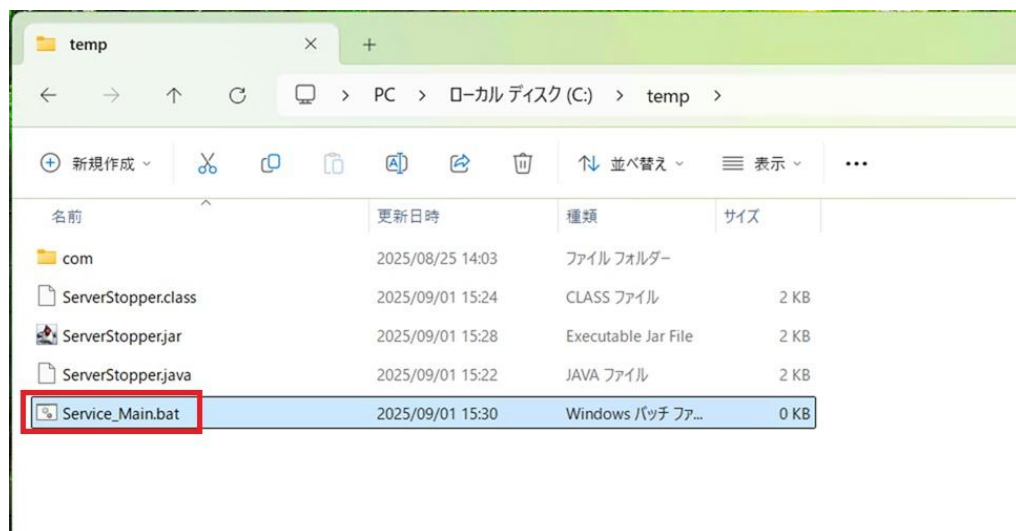
15. 手順 14. でコピーした「ServerStopper.jar」ファイルを、「C:\\$Kokuho\PP\Weblogic\user_projects\domains\noufukin\myJar」フォルダに貼り付けます。



16. 「C:\temp」フォルダ配下で右クリックし、「新規作成」-「テキスト ドキュメント」をクリックします。



17. 手順 16. で作成したテキストファイルのファイル名を「Service_Main.bat」へ変更します。



18. 「Service_Main.bat」をメモ帳で開いてください。



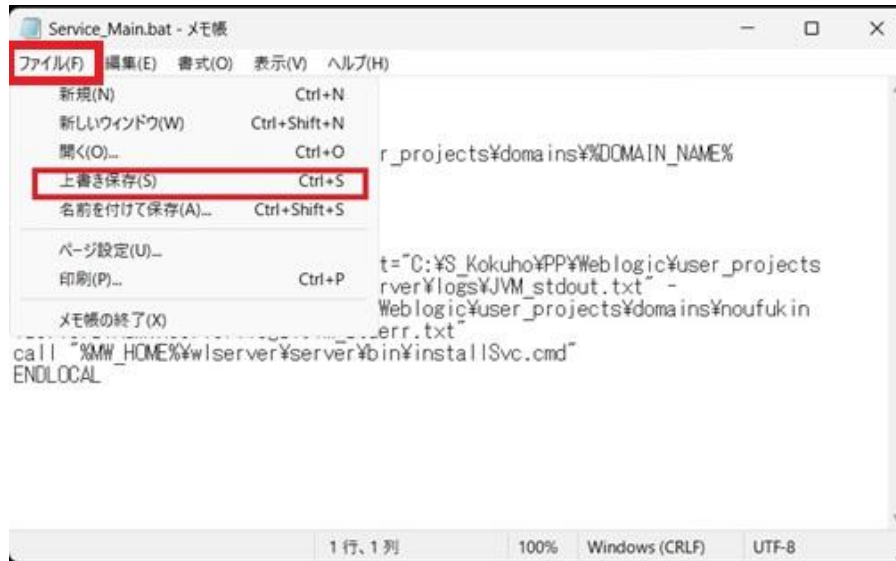
19. 「Service_Main.bat - メモ帳」画面で、次に示す内容を記載します。

```
echo on
SETLOCAL
set DOMAIN_NAME=noufukin
set
USERDOMAIN_HOME=%MW_HOME%\user_projects\domains\%DOMAIN_NAME%
set SERVER_NAME=AdminServer
set WLS_USER=<weblogic のユーザー>
set WLS_PW=<weblogic のパスワード>
set PRODUCTION_MODE=true
set                                     JAVA_OPTIONS=-
Dweblogic.Stdout="C:\S_Kokuho\PP\Weblogic\user_projects\domains\noufukin
\servers\AdminServer\logs\JVM_stdout.txt"
Dweblogic.Stderr="C:\S_Kokuho\PP\Weblogic\user_projects\domains\noufukin\
servers\AdminServer\logs\JVM_stderr.txt"
call "%MW_HOME%\wls_server\server\bin\installSvc.cmd"
```

 注意事項

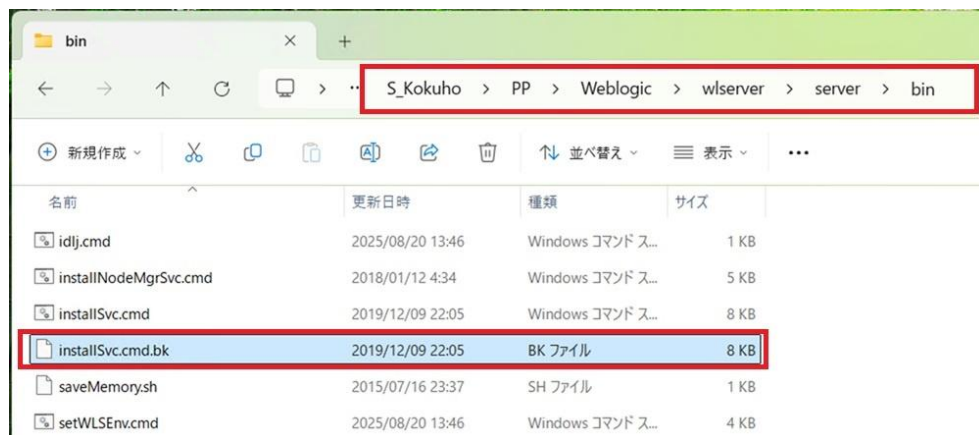
<weblogic のユーザー>および<weblogic のパスワード>は、「付録.B.2 ミドルウェアのインストール」の「(3) Oracle WebLogic Server Standard Edition のインストール」で設定したユーザー名、パスワードを入力してください。

20. 「ファイル」 - 「上書き保存」をクリックします。

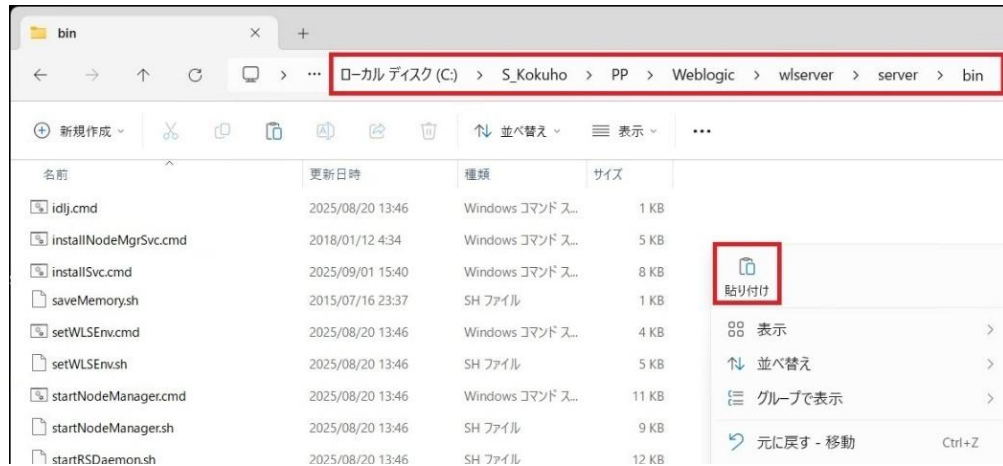


21. メモ帳、コマンドプロンプトを閉じます。

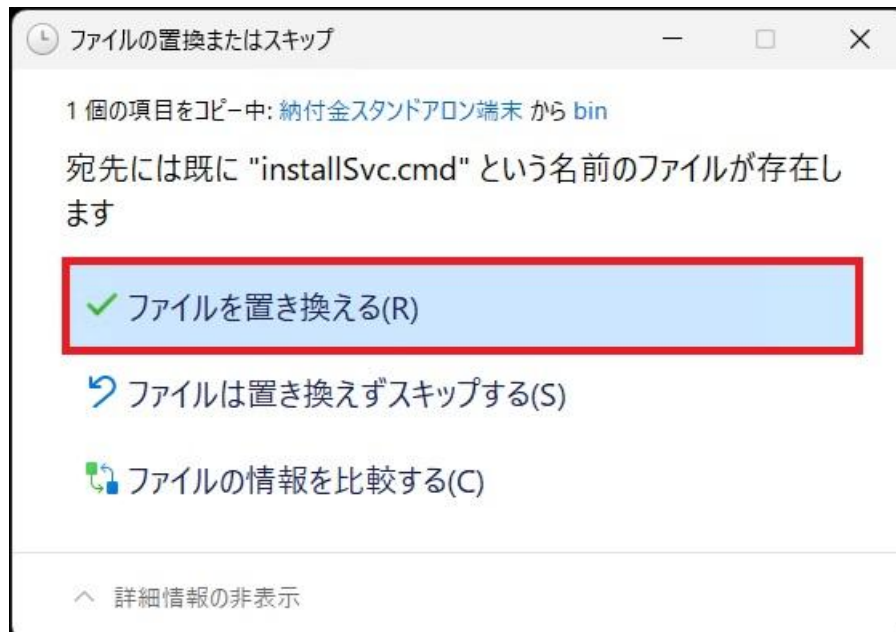
22. 「C:¥S_Kokuho¥PP¥Weblogic¥wlservr¥server¥bin」フォルダ配下の「installSvc.cmd」ファイルをコピーし、同じフォルダに貼り付け、ファイル名を「installSvc.cmd.bk」と変更してください。



23. 「3.1.5(1) アプリケーションサーバソフトウェアの詳細設定ファイルの取得」で取得した「アプリケーションサーバソフトウェアの詳細設定ファイル¥納付金スタンドアロン端末 ¥installSvc.cmd」ファイルを、「C:¥\$¥_Kokuho¥PP¥Weblogic¥wlserver¥server¥bin」フォルダ配下にコピーします。



24. 「ファイルの置換またはスキップ」画面で、「ファイルを置き換える」をクリックします。

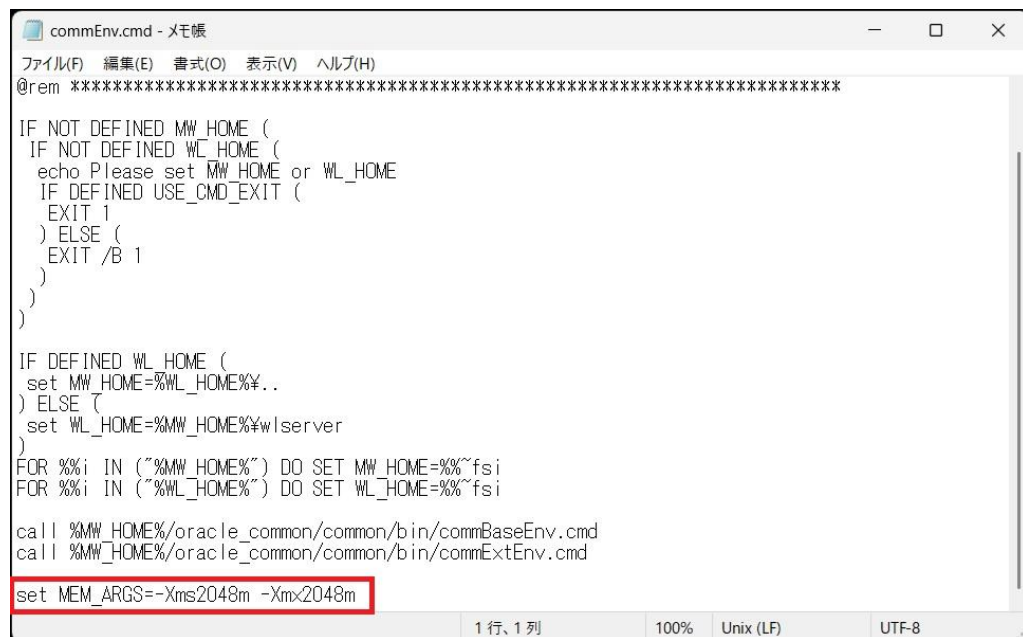


25. 「C:\\$S_Kokuho\PP¥Weblogic¥oracle_common¥common¥bin」フォルダ配下の「commEnv.cmd」ファイルをコピーし、同じフォルダに「commEnv.cmd.bk」として貼り付けます。

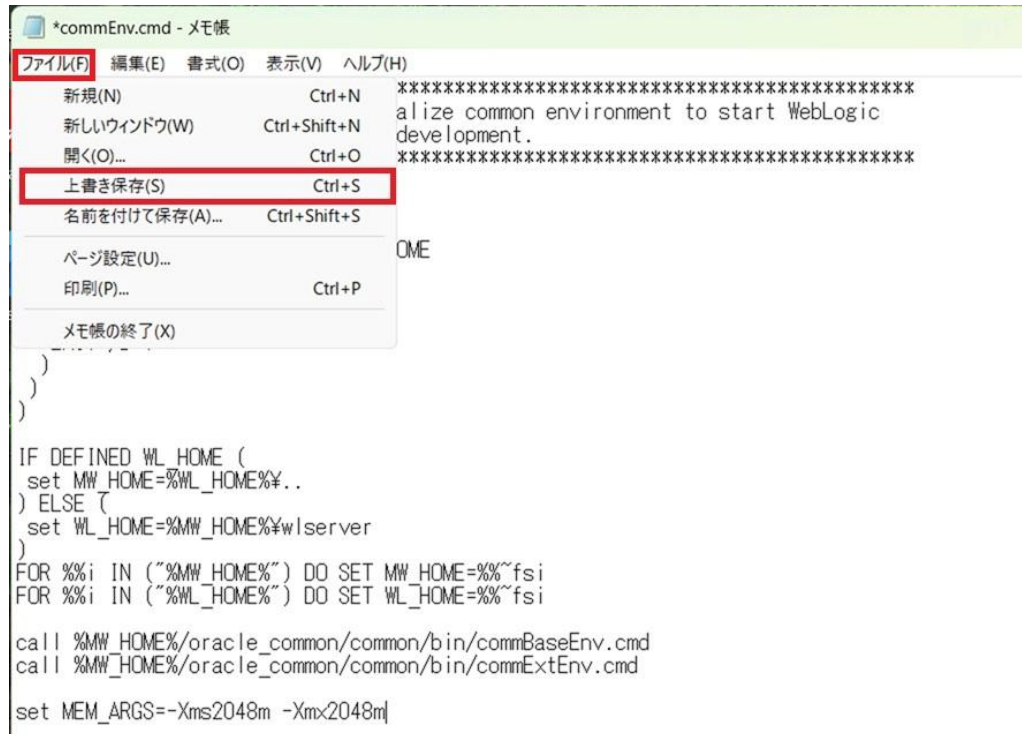


26. 「commEnv.cmd」をメモ帳で開き、「commEnv.cmd - メモ帳」画面で、一番下の行に次に示す内容を追記します。

```
set MEM_ARGS=-Xms2048m -Xmx2048m
```

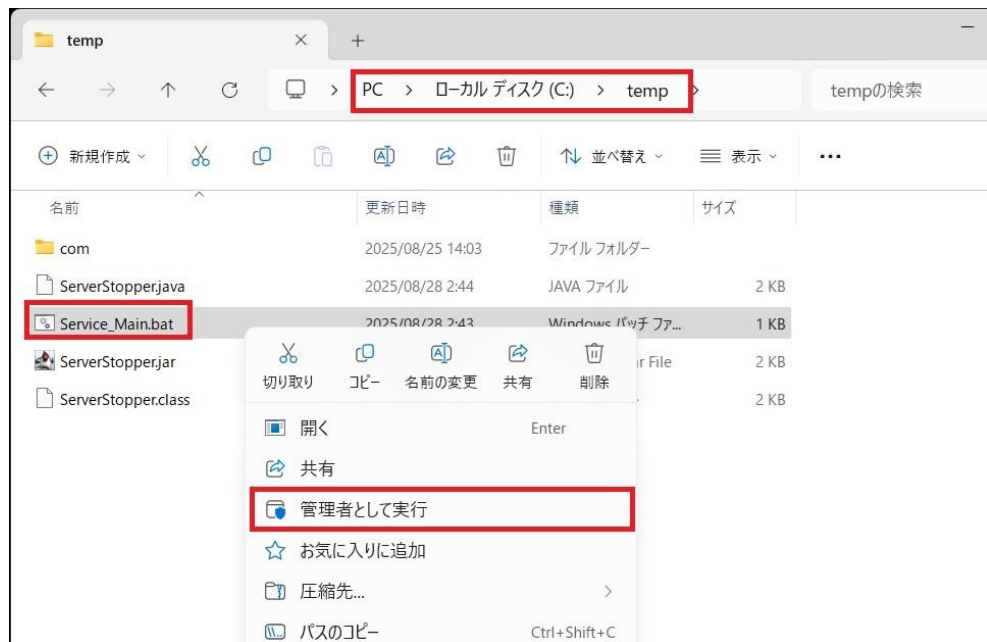


27. 「ファイル」 - 「上書き保存」をクリックします。



28. メモ帳を閉じます。

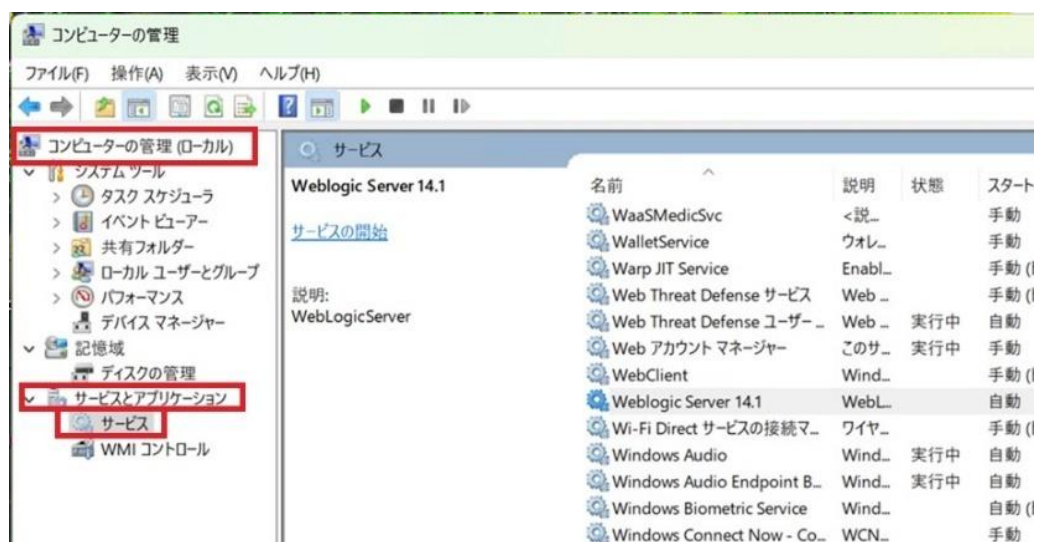
29. 「C:\temp」フォルダ内の「Service_Main.bat」を右クリックし、「管理者として実行」をクリックします。



30. [スタート]アイコンを右クリックし、「コンピューターの管理」をクリックします。

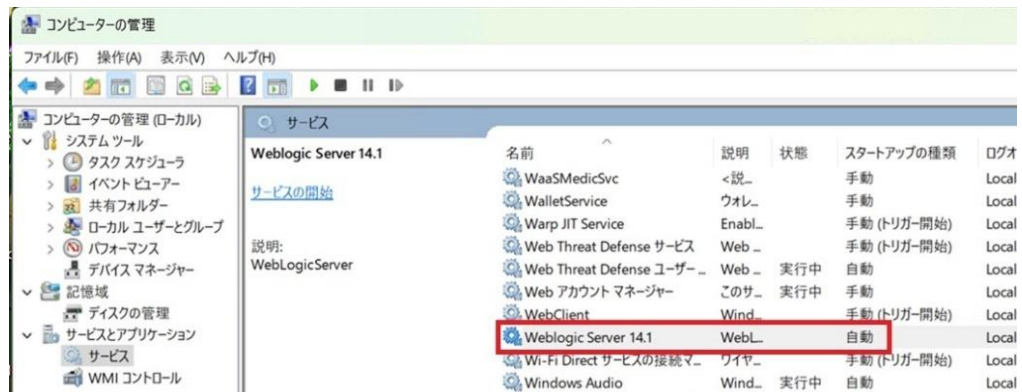


31. 「コンピューターの管理」画面で、画面左側から「コンピューターの管理 (ローカル)」 - 「サービスとアプリケーション」 - 「サービス」をクリックします。

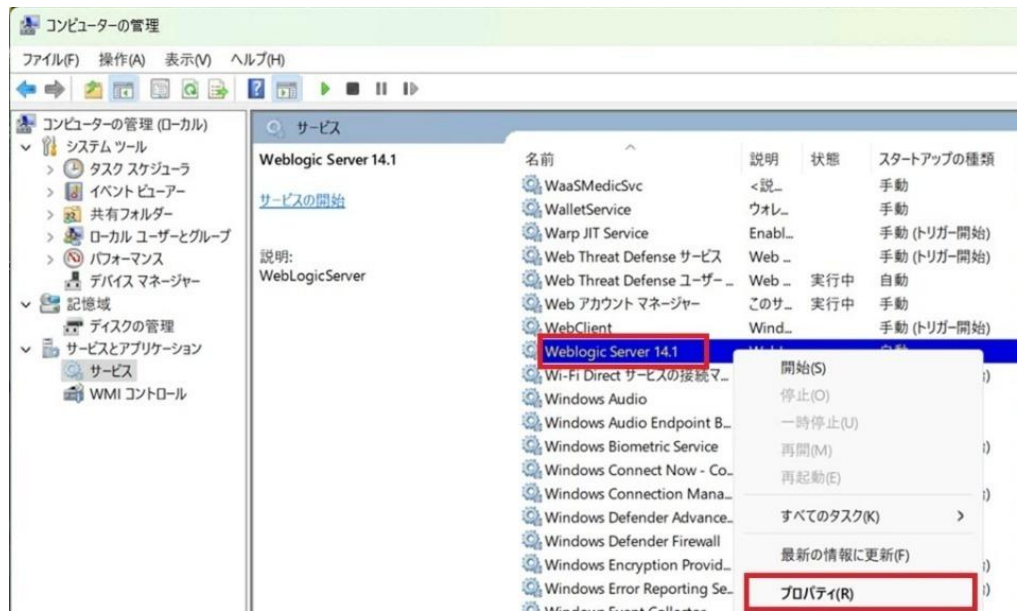


3 ミドルウェアの詳細設定

32. 画面中央の「サービス」に「Weblogic Server 14.1」が表示されている事を確認します。



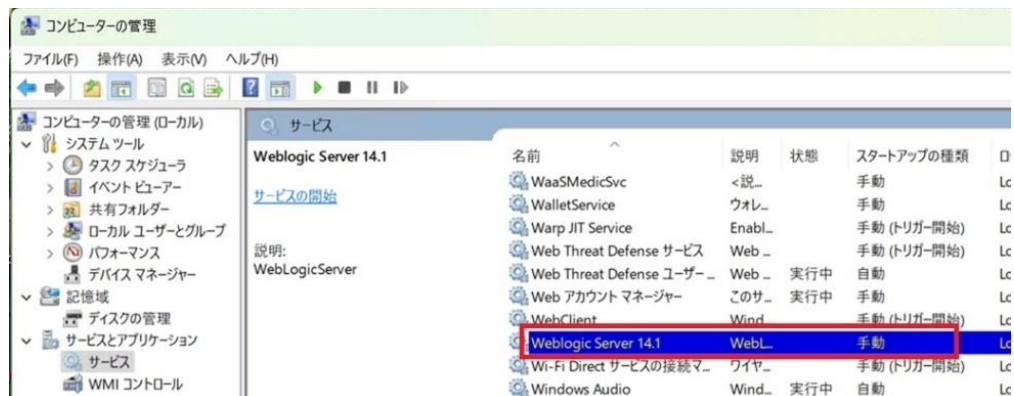
33. 「Weblogic Server 14.1」を右クリックし、「プロパティ」をクリックします。



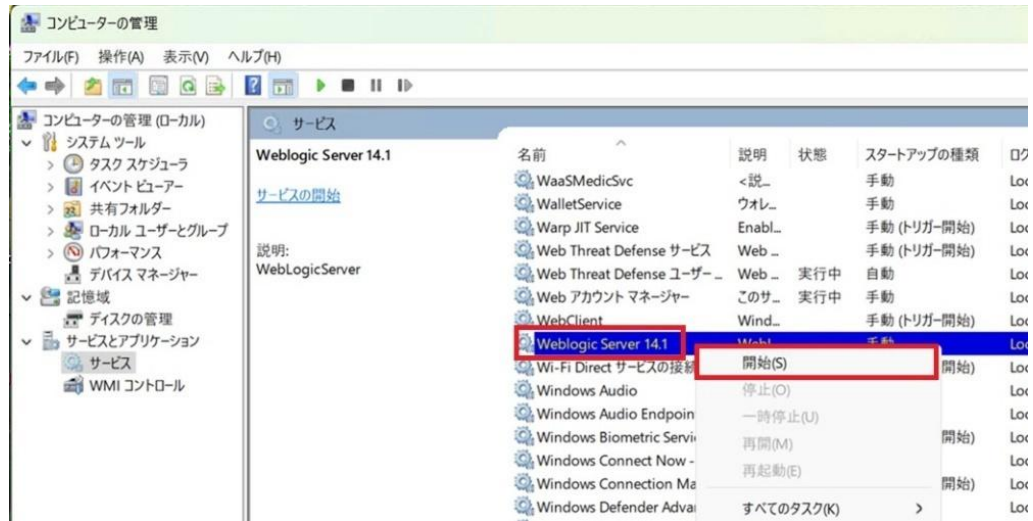
34. 「(ローカルコンピュータ) Weblogic Server 14.1 のプロパティ」画面で、「スタートアップの種類」から「手動」を選択し、「適用」をクリックし、「OK」をクリックします。



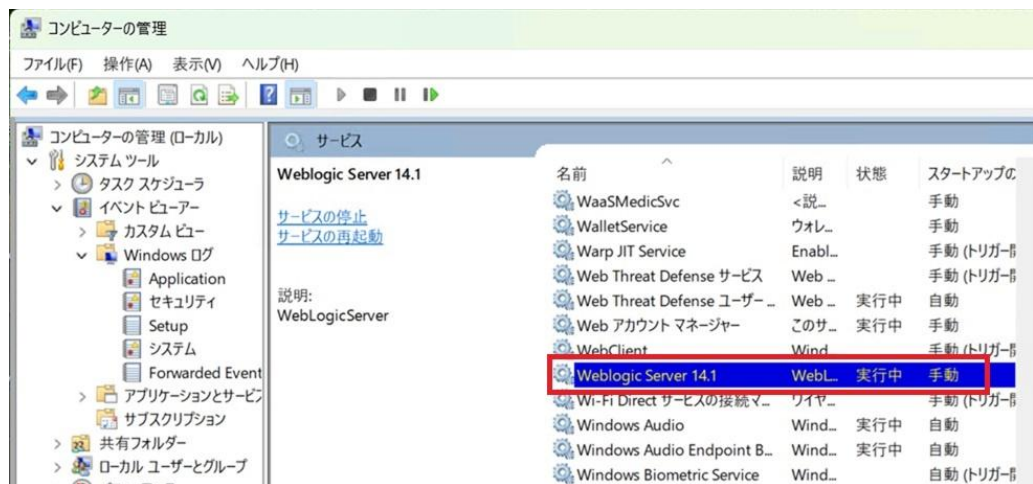
35. 「Weblogic Server 14.1」の「スタートアップの種類」が「手動」と表示されていることを確認します。



36. 「Weblogic Server 14.1」を右クリックし、「開始」をクリックします。



37. 「Weblogic Server 14.1」の「状態」が「実行中」と表示されていることを確認し、「コンピューターの管理」画面を閉じます。

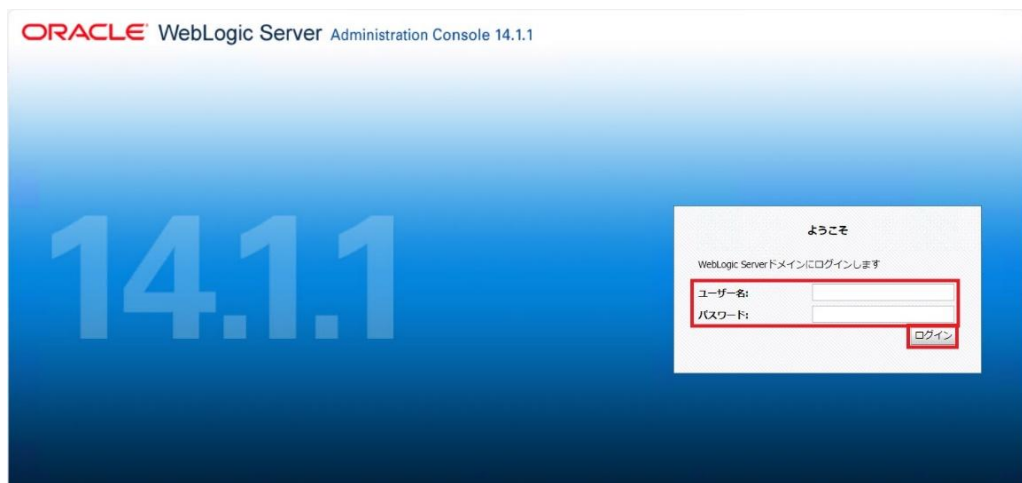


(b) JDBC の設定

1. [スタート]アイコンをクリックし、検索ボックス欄に「Microsoft Edge」と入力し、「開く」をクリックします。



2. アドレス欄に「http://localhost:7001/console」と入力し、「Enter」キーを押下します。
3. 「ORACLE WebLogic Server Administration Console 14.1.1」画面で、ユーザー名とパスワードを入力し、「ログイン」をクリックします。



 注意事項

ようこそ画面のユーザー名、パスワードは、「付録.B.2 ミドルウェアのインストール」の (3) Oracle WebLogic Server Standard Edition のインストールで設定したユーザー名、パスワードを入力してください。

4. 「WebLogic Server 管理コンソール 14.1.1」画面で、「チェンジ・センター」欄 – 「ロックして編集」をクリックします。



5. 「ドメイン構造」 – 「サービス」 – 「データ・ソース」をクリックし、画面右側から「新規」 – 「汎用データ・ソース」をクリックします。



6. 下記画面例を参考に表 3-23 の設定値を入力し、「次」をクリックします。

ORACLE WebLogic Server 管理コンソール 14.1.1

ホーム ログアウト プリファレンス 記録 ヘルプ

ホーム > JDBCデータ・ソースのサマリー

新しいJDBCデータ・ソースの作成

戻る 次 終了 取消

JDBCデータ・ソースのプロパティ

次のプロパティは、新しいJDBCデータ・ソースを識別するために使用されます。

*は必須フィールドです

新しいJDBCデータ・ソースの名前を指定してください。

*名前: noufukin JDBC Data Source-0

新しいJDBCデータ・ソースのJNDI名を指定してください。

JNDI名: noufukin-dataSource-oraclePool-0

データベースのタイプを選択してください。

データベースのタイプ: Oracle

戻る 次 終了 取消

表 3-23 新しい JDBC データ・ソースの作成 1

No	対象機器	設定項目	設定値
1	納付金ス	名前	noufukin JDBC Data Source-0
2	タンドア	JNDI 名	noufukin-dataSource-oraclePool-0
3	ロン端末	データベースのタイプ	Oracle

7. 「データベース・ドライバ」のプルダウンメニューから、「Oracle's Driver (Thin) for Instance connections; Version:Any」を選択し、「次」をクリックします。

ORACLE WebLogic Server 管理コンソール 14.1.1

ホーム ログアウト プリファレンス 記録 ヘルプ

ホーム > JDBCデータ・ソースのサマリー

新しいJDBCデータ・ソースの作成

戻る 次 終了 取消

JDBCデータ・ソースのプロパティ

次のプロパティは、新しいJDBCデータ・ソースを識別するために使用されます。

データベースのタイプ: Oracle

データベース接続の作成に使用するデータベース・ドライバを指定してください。注意: *はドライバがOracle WebLogic Serverに明示的にサポートされていることを示します。

データベース・ドライバ: Oracle's Driver (Thin) for Instance connections; Version:Any

戻る 次 終了 取消

8. 下記画面例を参考に表 3-24 の設定値を入力し、「次」をクリックします。

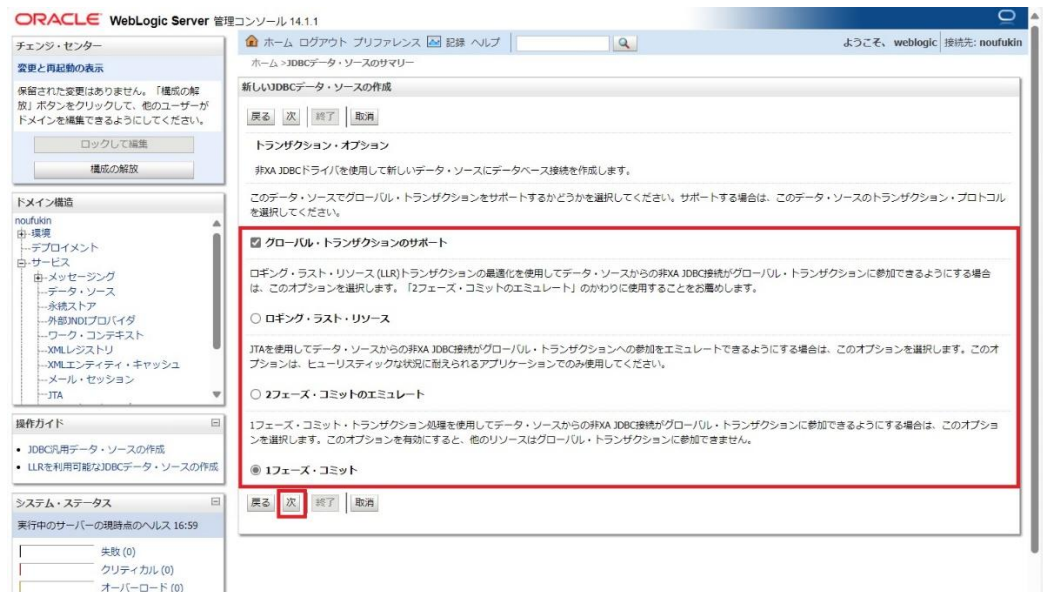


表 3-24 新しい JDBC データ・ソースの作成 2

No	対象機器	設定項目	設定値
1	納付金スタンドアロン端末	グローバル・トランザクションのサポート	チェックあり
2		ロギング・ラスト・リソース	チェックなし
3		2 フェーズ・コミットのエミュレート	チェックなし
4		1 フェーズ・コミット	チェックあり

9. 下記画面例を参考に表 3-25 の設定値を入力し、「次」をクリックします。

表 3-25 新しい JDBC データ・ソースの作成 3

No.	対象機器	設定項目	設定値
1	納付金システム タンドア ロン端末	データベース名	Noufukin
2		ホスト名	localhost
3		ポート名	1521
4		データベース・ユーザー名	noufukindbgym
5		パスワード	(No.4 で指定したユーザーのパスワード)
6		oracle.jdbc.DRCPConnectionClass	空白

10. 「構成のテスト」をクリックし、「メッセージ」に「接続テストが成功しました。」と表示されることを確認し、「次」をクリックします。



11. 「サーバー」 - 「AdminServer」にチェックし、「終了」をクリックします。



12. 「チェンジ・センター」欄 - 「変更のアクティブ化」をクリックします。



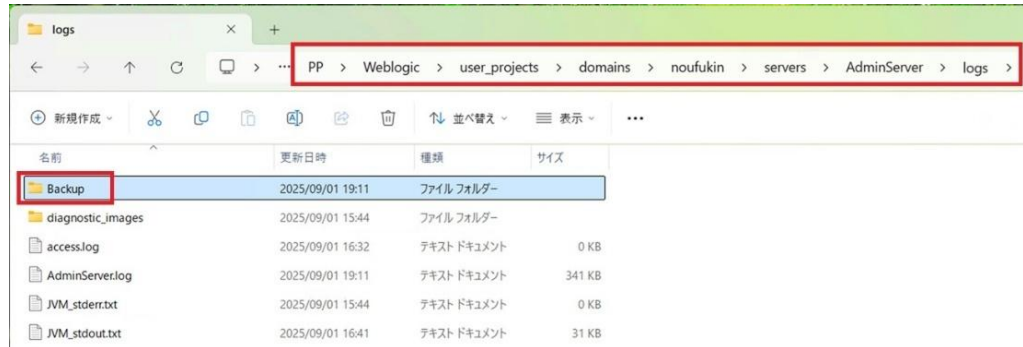
13. 「メッセージ」欄に「すべての変更がアクティブ化されました。再起動は不要です。」と表示されることを確認し、「ログアウト」をクリックします。



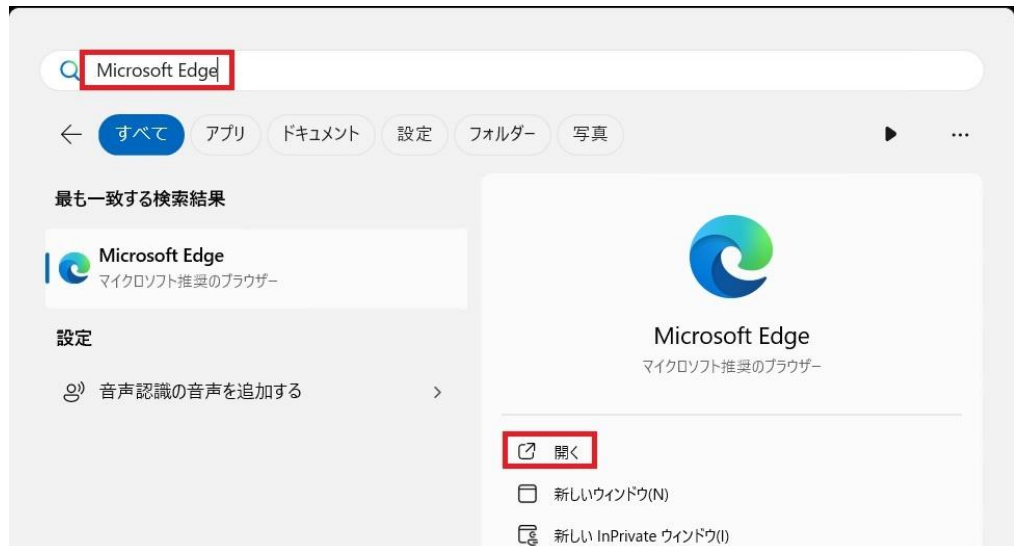
14. Microsoft Edge を閉じます。

(c) ログローテーションの設定

1. エクスプローラーを起動し、
「C:\\$S_Kokuho¥PP¥Weblogic¥user_projects¥domains¥noufukin¥servers¥AdminServer¥logs」フォルダ内に、「Backup」フォルダを作成します。

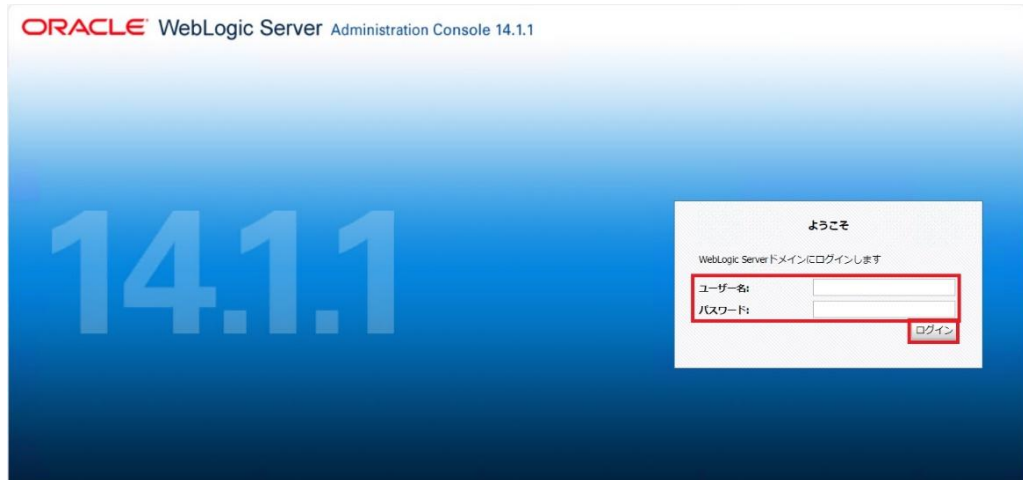


2. [スタート]アイコンをクリックし、検索ボックス欄に「Microsoft Edge」と入力し、「開く」をクリックします。



3. アドレス欄に「http://localhost:7001/console」と入力し、「Enter」キーを押下します。

4. 「ORACLE WebLogic Server Administration Console 14.1.1」画面で、ユーザー名とパスワードを入力し、「ログイン」をクリックします。



⚠ 注意事項

ようこそ画面のユーザー名、パスワードは、「付録.B.2 ミドルウェアのインストール」の(3) Oracle WebLogic Server Standard Edition のインストールで設定したユーザー名、パスワードを入力してください。

5. 「WebLogic Server 管理コンソール 14.1.1」画面で、「チェンジ・センター」欄 – 「ロックして編集」をクリックします。



6. 「ドメイン構成」－「環境」欄の「サーバー」をクリックします。

7. 「名前」欄の「AdminServer(管理サーバー)」をクリックします。

名前	タイプ	クラス	マシン	状態	ヘルプ
AdminServer(管理サーバー)	構成済			RUNNING	ヘルプ

8. 「ロギング」タブをクリックし、「一般」タブをクリックし、下記画面例を参考に表 3-26 の設定値を入力し、「保存」をクリックします。

表 3-26 ログローテーションの設定 1

No	対象機器	設定項目	設定値
1	納付金スタンダード ローン端末	ログ・ファイル名	logs/AdminServer.log
2		ローテーション・タイプ	時間による
3		ローテーション開始時間	00:00
4		ローテーション間隔	24
5		保存するファイル数の制限	チェックあり
6		保存するファイル数	61
7		ログ・ファイル・ローテーションのディレクトリ	logs/Backup
8		起動時にログ・ファイルをローテーション	チェックなし

9. 「メッセージ」欄に「設定が正常に更新されました。」と表示されることを確認します。



10. 「HTTP」タブをクリックし、下記画面例を参考に表 3-27 の設定値を入力し、「保存」をクリックします。

ORACLE WebLogic Server 管理コンソール 14.1.1

ホーム ログアウト プリファレンス 記録 ヘルプ

ホーム > サーバーのサマリー > AdminServer > サーバーのサマリー > AdminServer

AdminServerの設定

構成 プロトコル ログイン デバッグ モニタリング 制御 デプロイメント サービス セキュリティ ノート

一般 HTTP データ・ソース 診断イメージ

保存

このページでは、サーバーのHTTPロギングを構成します。デフォルトではHTTPロギングは有効で、サーバーはHTTPリクエストを個別のログ・

☒ HTTPアクセス・ログ・ファイルの有効化

ログ・ファイル名: logs/access.log

ローテーション

ローテーション・タイプ: 時間による

ローテーション・ファイル・サイズ: 5000

ローテーション開始時間: 00:00

ローテーション間隔: 24

☒ 保存するファイル数の制限

保存するファイル数: 61

ログ・ファイル・ローテーションのディレクトリ: logs/Backup

☐ 起動時にログ・ファイルをローテーション

詳細

保存

表 3-27 ログローテーションの設定 2

No.	対象機器	設定項目	設定値
1	納付金スタンドアロン端末	HTTP アクセス・ログ・ファイルの有効化	チェックあり
2		ログ・ファイル名	logs/access.log
3		ローテーション・タイプ	時間による
4		ローテーション開始時間	00:00
5		ローテーション間隔	24
6		保存するファイル数の制限	チェックあり
7		保存するファイル数	61
8		ログ・ファイル・ローテーションのディレクトリ	logs/Backup
9		起動時にログ・ファイルをローテーション	チェックなし

11. 「メッセージ」欄に「設定が正常に更新されました。」と表示されることを確認します。



12. 「データ・ソース」タブをクリックし、下記画面例を参考に表 3-28 の設定値を入力し、「保存」をクリックします。

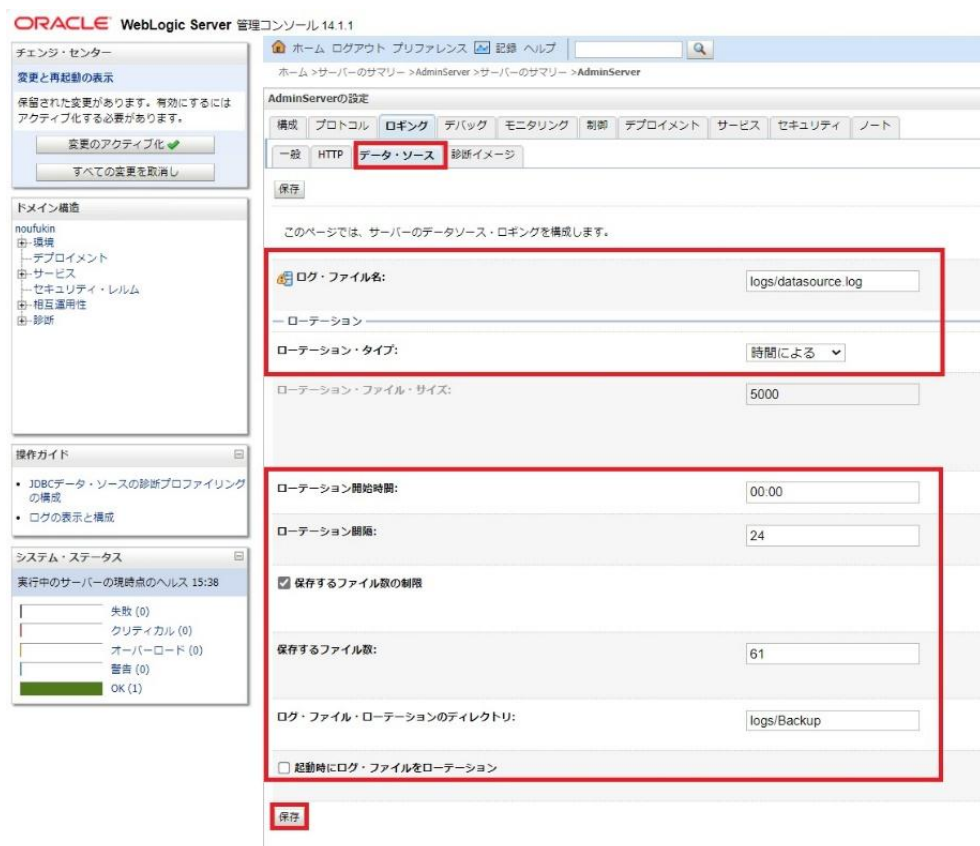
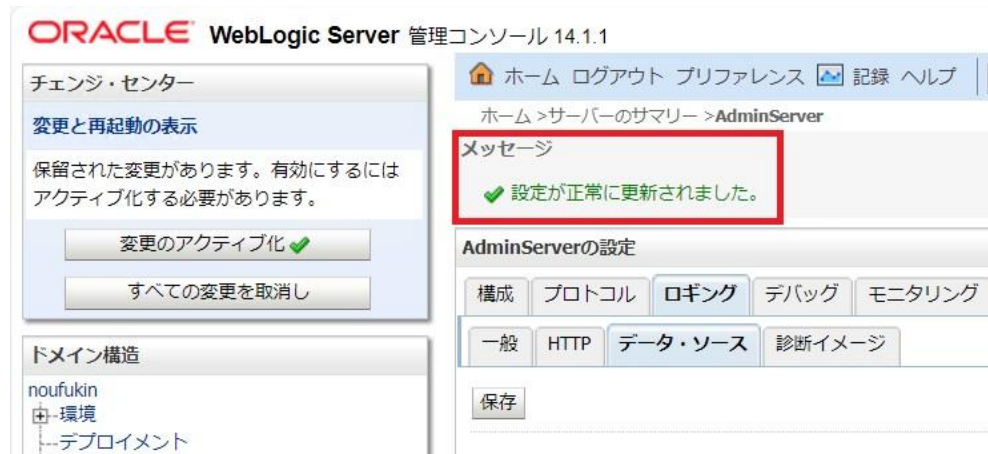


表 3-28 ログローテーションの設定 3

No.	対象機器	設定項目	設定値
1	納付金スタンドアロン端末	ログ・ファイル名	logs/datasource.log
2		ローテーション・タイプ	時間による
3		ローテーション開始時間	00:00
4		ローテーション間隔	24
5		保存するファイル数の制限	チェックあり
6		保存するファイル数	61
7		ログ・ファイル・ローテーションのディレクトリ	logs/Backup
8		起動時にログ・ファイルをローテ	チェックなし

		シヨン	
--	--	-----	--

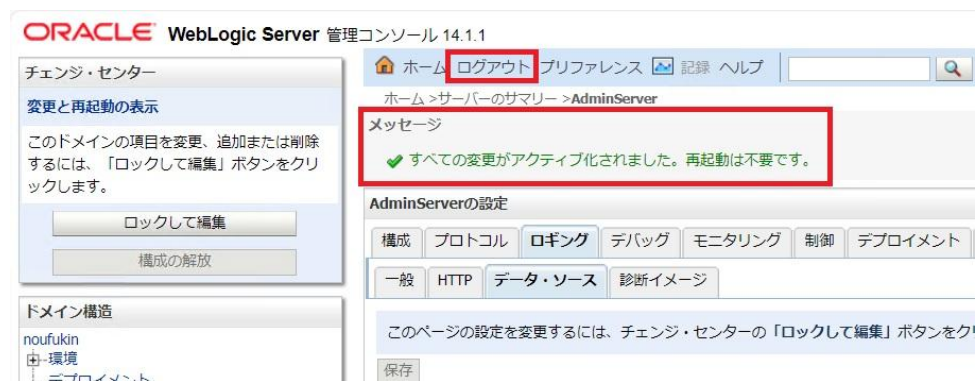
13. 「メッセージ」欄に「設定が正常に更新されました。」と表示されることを確認します。



14. 「チェンジ・センター」 - 「変更のアクティブ化」をクリックします。



15. 「メッセージ」欄に「すべての変更がアクティブ化されました。再起動は不要です。」と表示されることを確認し、「ログアウト」をクリックします。



16. Microsoft Edge を閉じます。

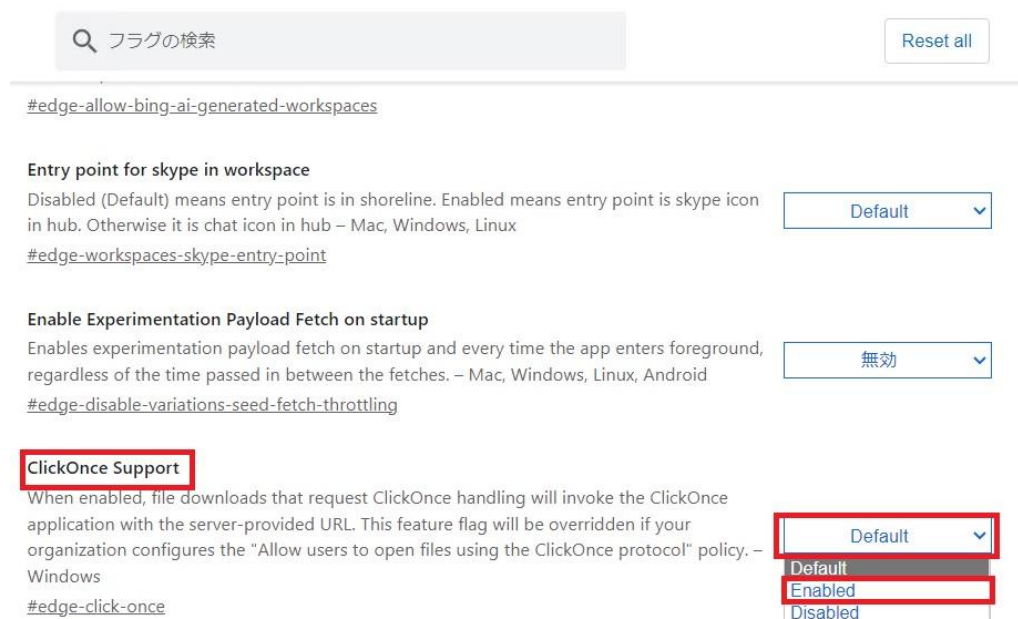
3.1.6 帳票ソフトウェアの詳細設定

(1) SVF KJNSS パック（クライアント版）環境設定

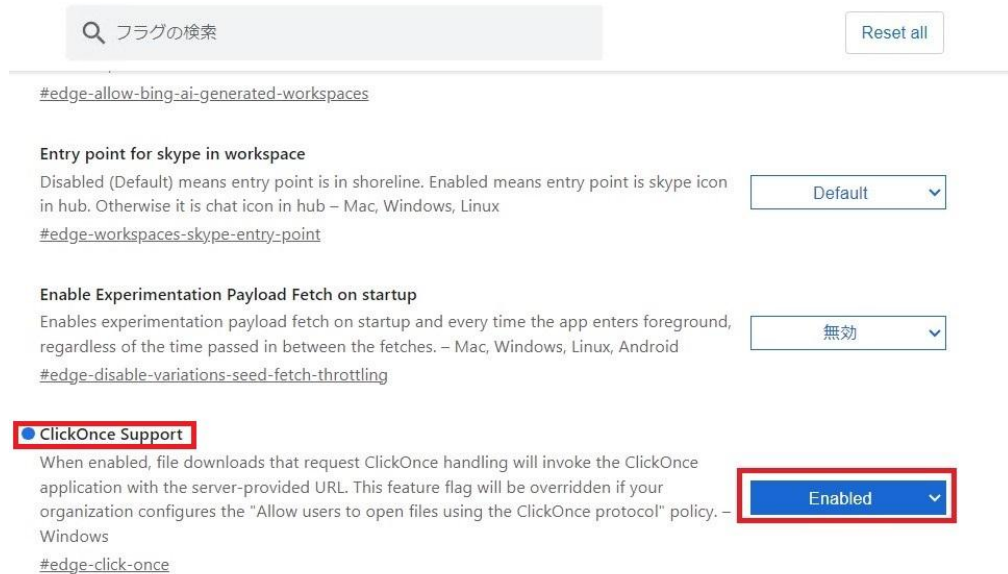
1. [スタート]アイコンをクリックし、検索ボックス欄に「Microsoft Edge」と入力し、「開く」をクリックします。



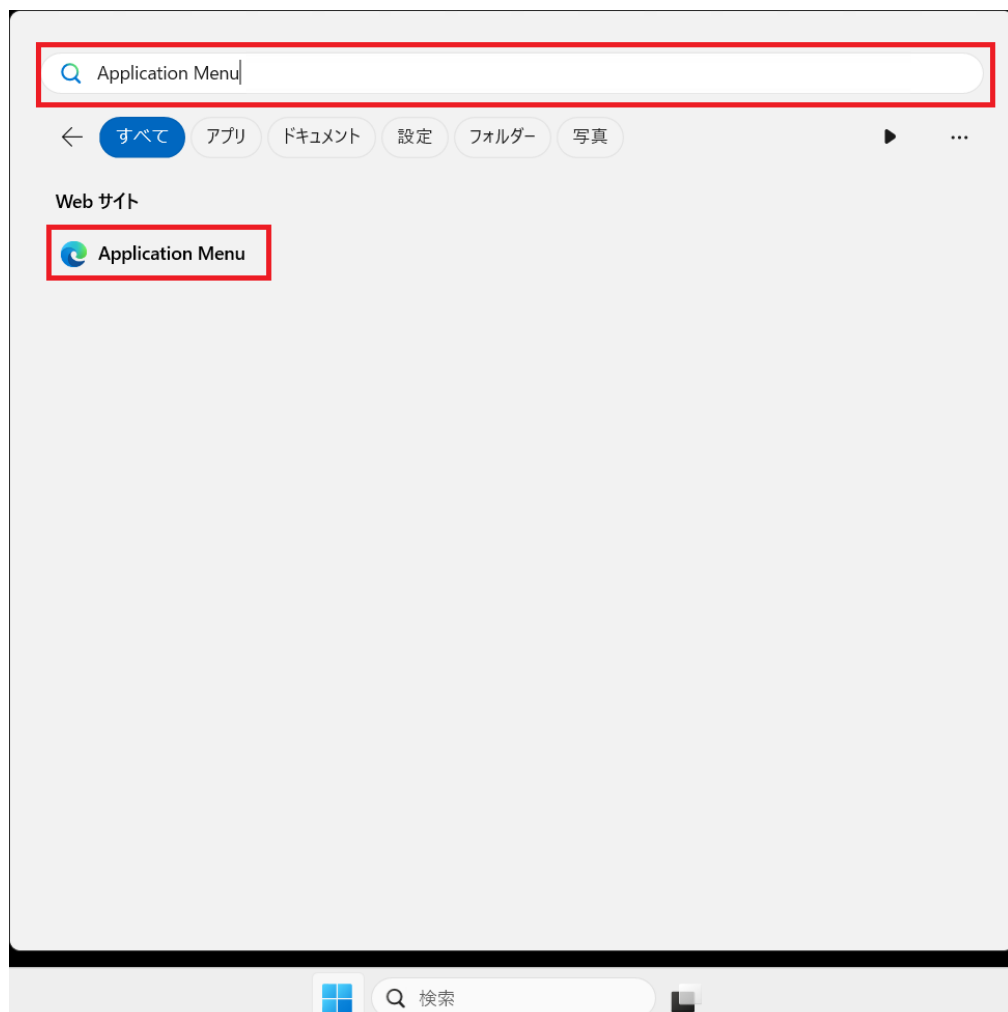
2. アドレス欄に「Edge://flags/#Edge-click-once」と入力し、「Enter」キーを押下します。
3. 表示された画面で、「ClickOnce Support」の「Default」のプルダウンから、「Enabled」をクリックします。



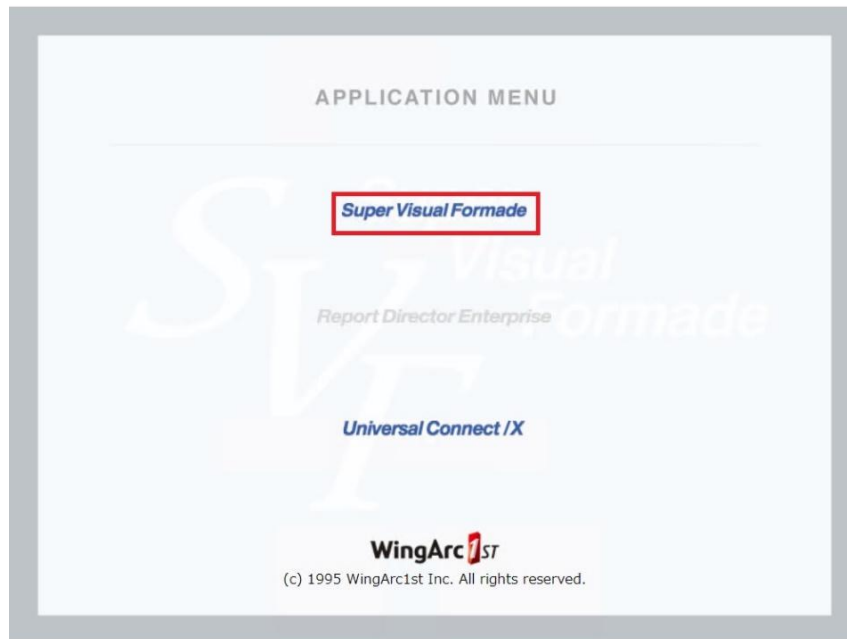
4. 「ClickOnce Support」が「Enabled」となっていることを確認し、Microsoft Edge を閉じます。



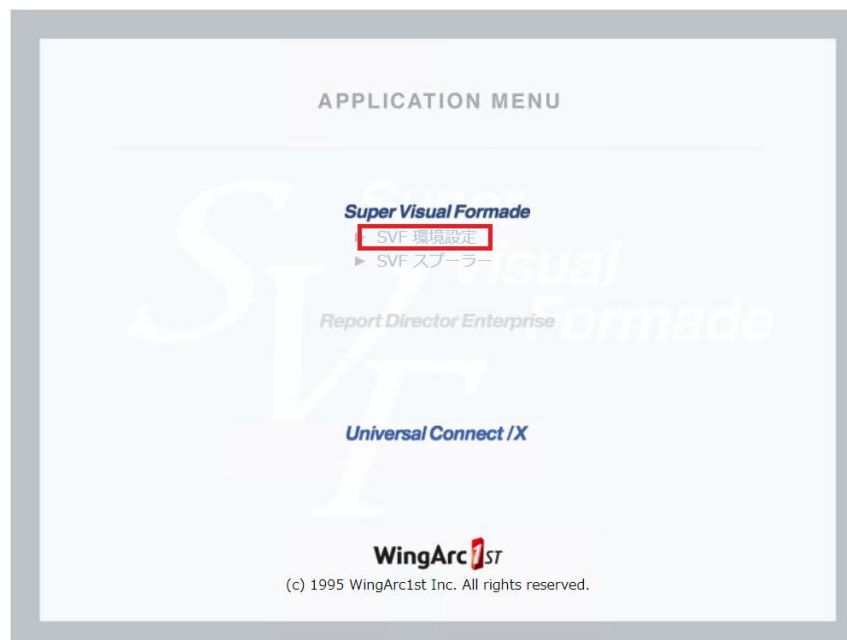
5. [スタート]アイコンをクリックし、検索ボックス欄に「Application Menu」と入力し、「Application Menu」をクリックします。



6. 「APPLICATION MENU」画面で、「Super Visual Formade」にマウスカーソルを合わせます。



7. 「SVF 環境設定」をクリックします。



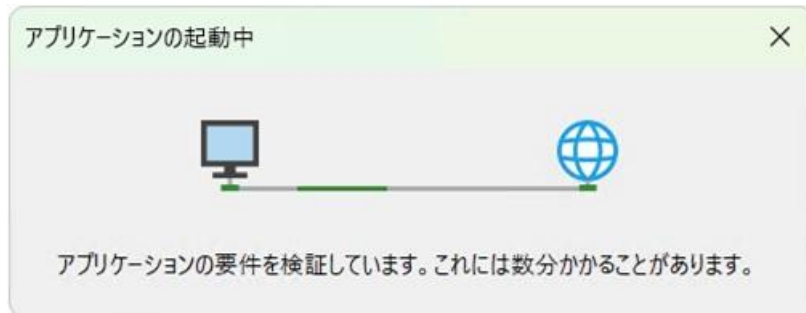
8. 「このファイルを開きますか？」画面で、「開く」をクリックします。



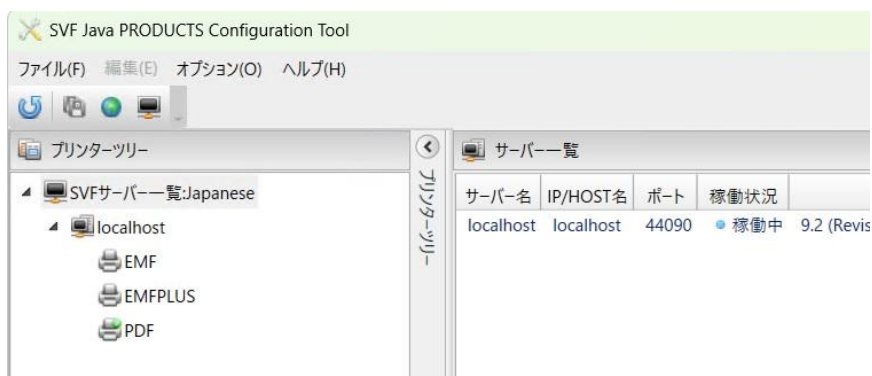
9. 「アプリケーションの実行-セキュリティの警告」画面で、「実行」をクリックします。



10. 「アプリケーションの起動中」画面で、アプリケーションの要件検証が実行されるので、しばらく待ちます。（しばらく待つと、手順 11. の画面が表示されます。）

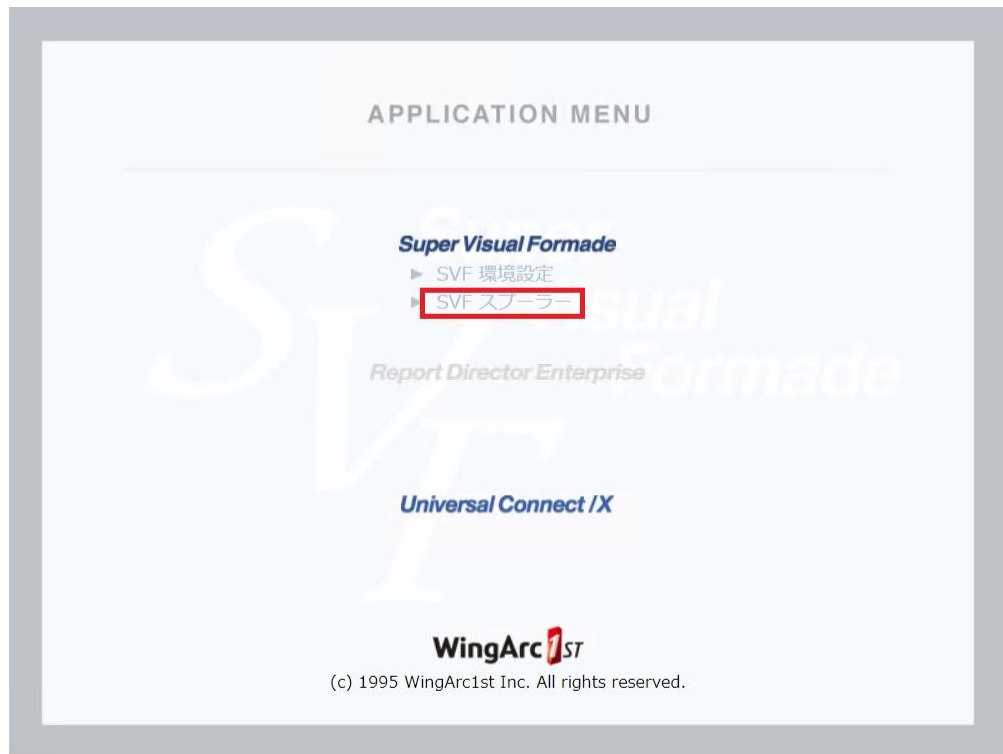


11. 「SVF Java PRODUCTS Configuration Tool」画面が表示されることを確認します。



12. 「SVF Java PRODUCTS Configuration Tool」画面を閉じます。

13. APPLICATION MENU」画面で、「SVF スプーラー」をクリックします。



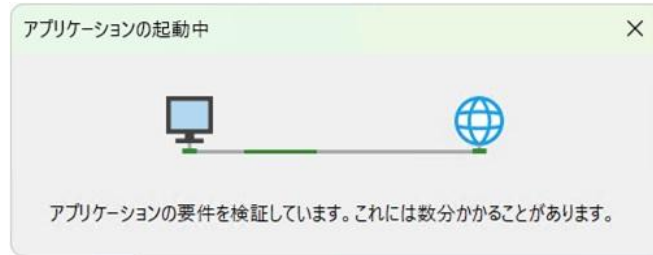
14. 「このファイルを開きますか？」画面で、「開く」をクリックします。



15. 「アプリケーションの実行-セキュリティの警告」画面で、「実行」をクリックします。



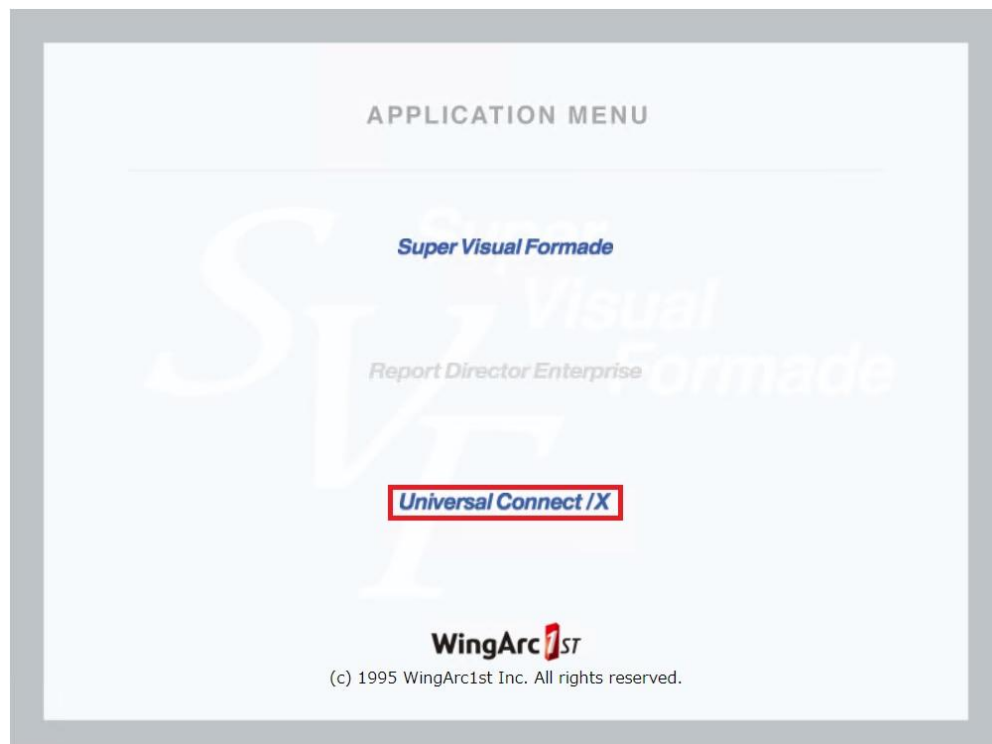
16. 「アプリケーションの起動中」画面で、アプリケーションの要件検証が実行されるので、しばらく待ちます。（しばらく待つと、手順 17. の画面が表示されます。）



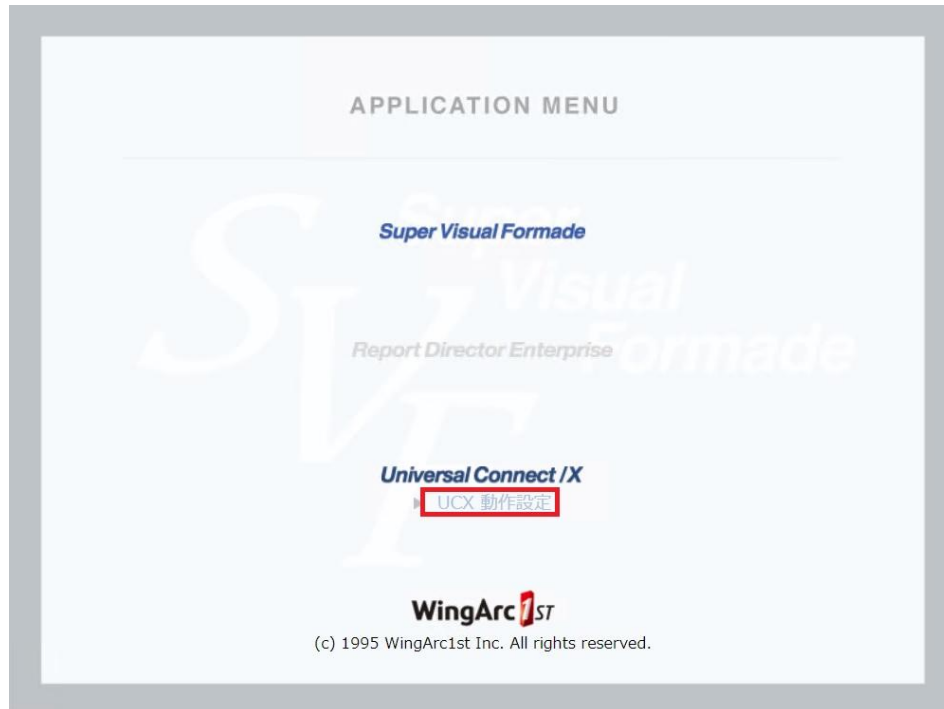
17. 「SVF スプーラー : localhost」画面が表示されることを確認します。



18. 「SVF スプーラー : localhost」画面を閉じます。
19. 「APPLICATION MENU」画面で、「Universal Connect/X」にマウスカーソルを合わせます。



20. 「UCX 動作設定」をクリックします。



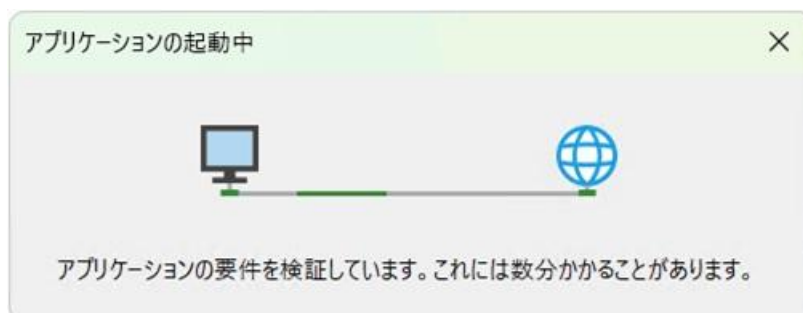
21. 「このファイルを開きますか？」画面で、「開く」をクリックします。



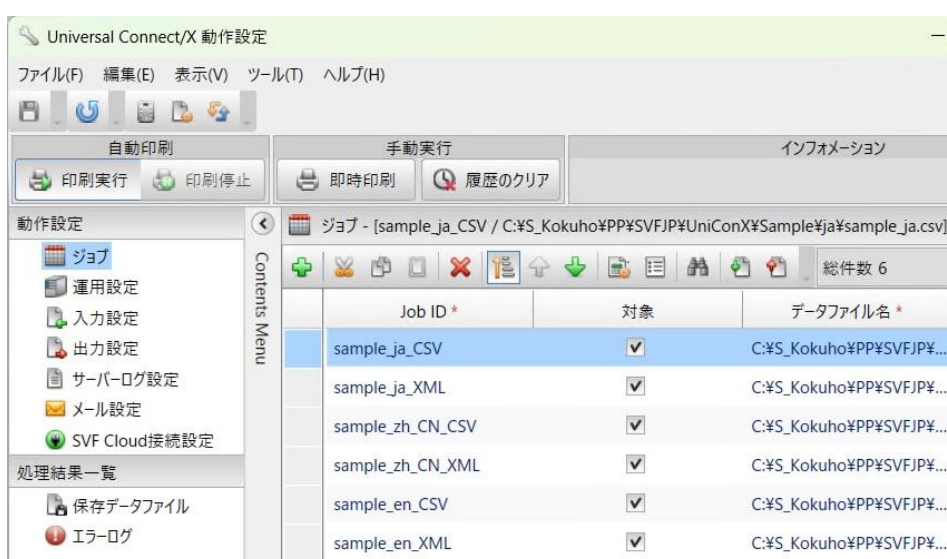
22. 「アプリケーションの実行-セキュリティの警告」画面で、「実行」をクリックします。



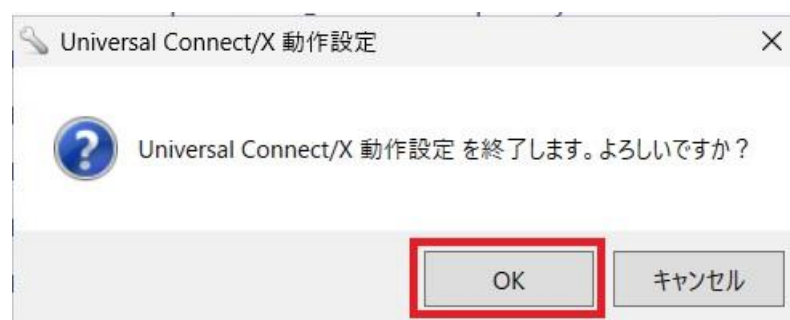
23. 「アプリケーションの起動中」画面で、アプリケーションの要件検証が実行されるので、しばらく待ちます。（しばらく待つと、手順 24. の画面が表示されます。）



24. 「Universal Connect/X 動作設定」画面が表示されることを確認し、画面を閉じます。



25. 「Universal Connect/X 動作設定 を終了します。よろしいですか？」画面で、「OK」をクリックします。



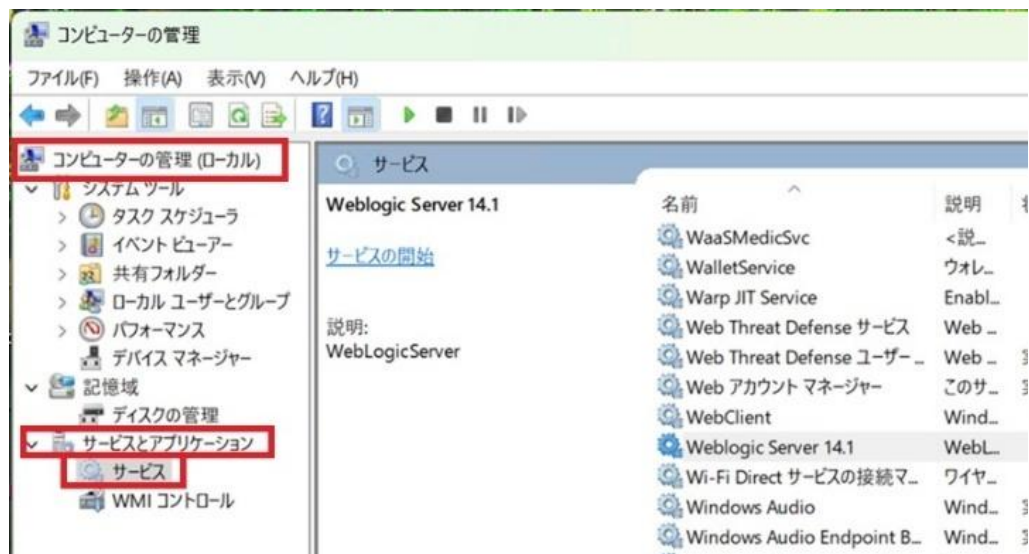
26. Microsoft Edge を閉じます。

(2) Java 入れ替え手順

1. [スタート]アイコンを右クリックし、「コンピューターの管理」をクリックします。

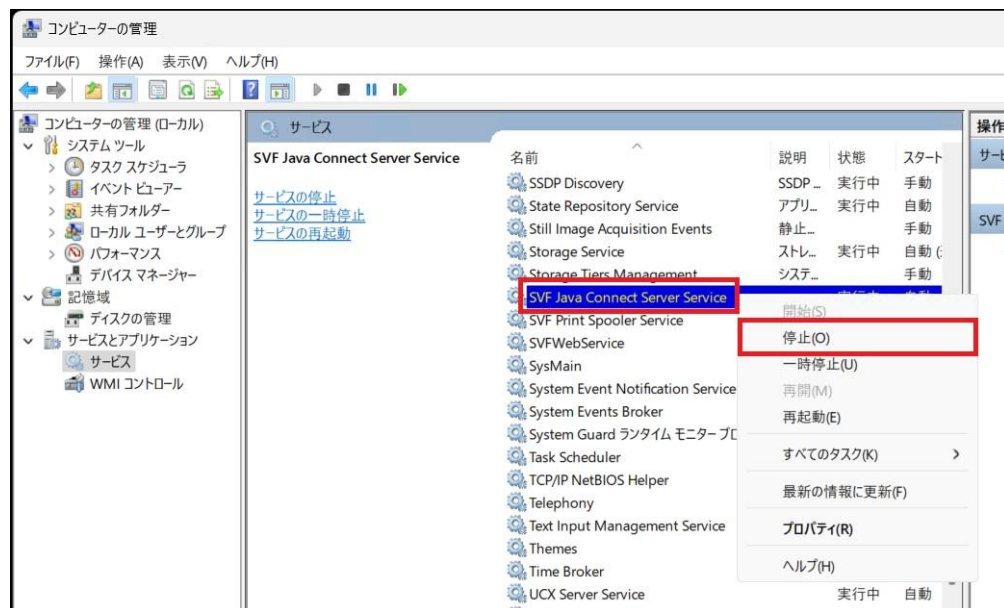


2. 「コンピューターの管理」画面で、画面左側から「コンピューターの管理 (ローカル)」 - 「サービスとアプリケーション」 - 「サービス」をクリックします。

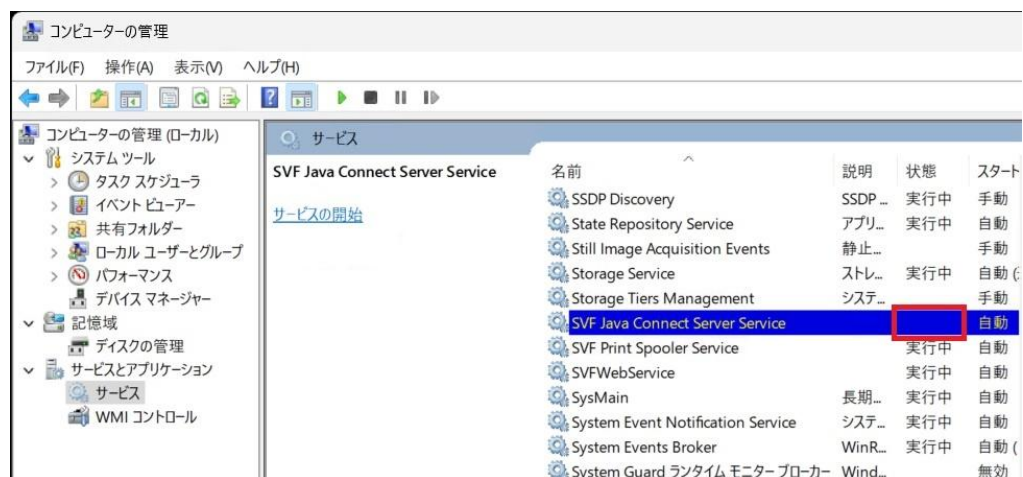


3. 下記画面例を参考に、次の順番でサービスを右クリックし、「停止」をクリックします。

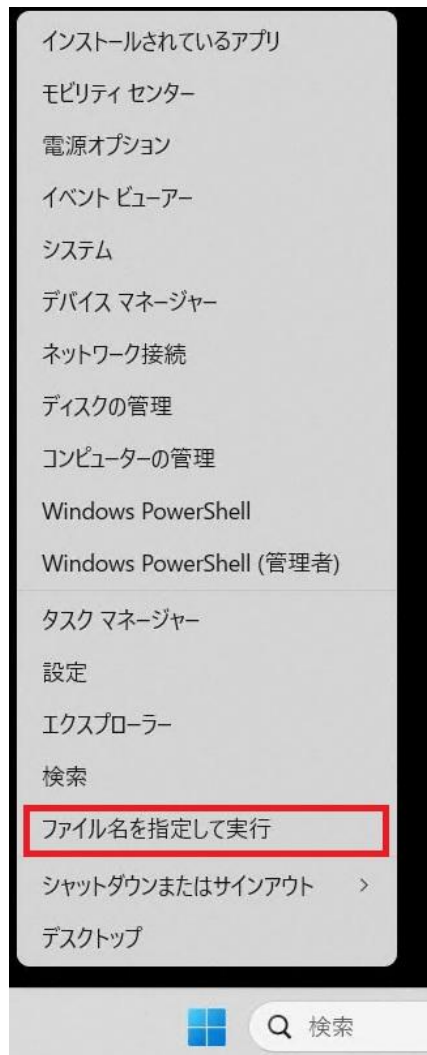
1. SVF Java Connect Server Service
2. UCX Server Service
3. SVFWebService
4. SVF Print Spooler Service



4. 手順 3. で停止したサービスの「状態」欄が、「実行中」から「空白」になったことを確認します。



5. [スタート]アイコンを右クリックし、「ファイル名を指定して実行」をクリックします。



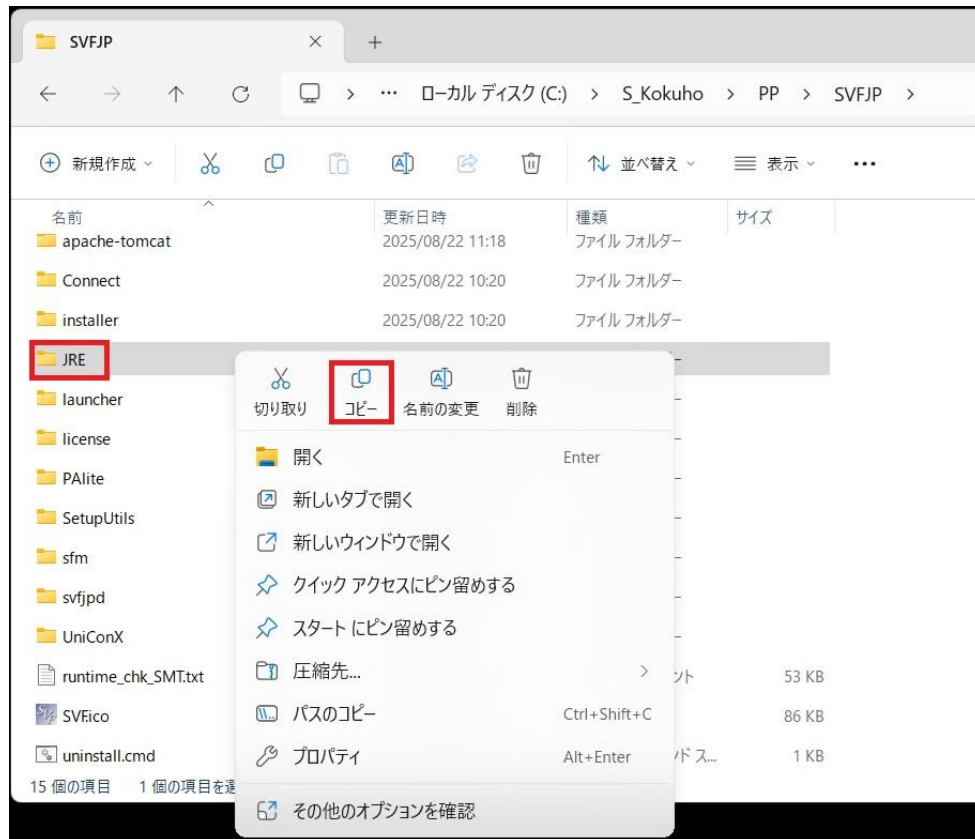
6. 「ファイル名を指定して実行」画面で、「名前」に「%FIT_PRODUCTS_BASE%¥JRE」と入力し、「OK」をクリックします。



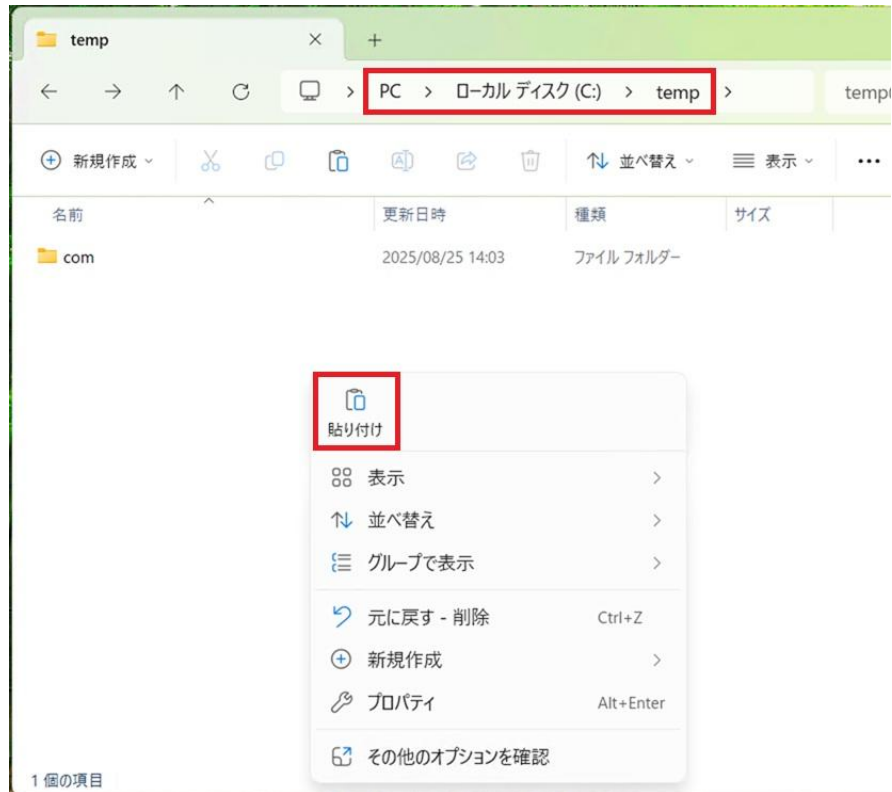
7. 「C:\\$S_Kokuho¥PP¥SVFJP」をクリックし、移動します。



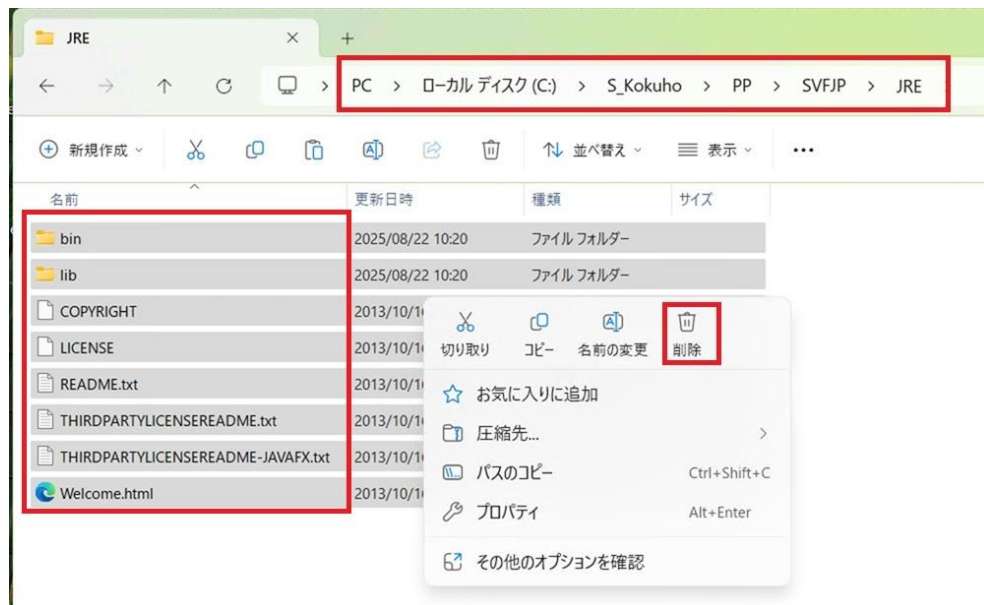
8. 「C:\\$S_Kokuho¥PP¥SVFJP¥JRE」を選択し、コピーします。



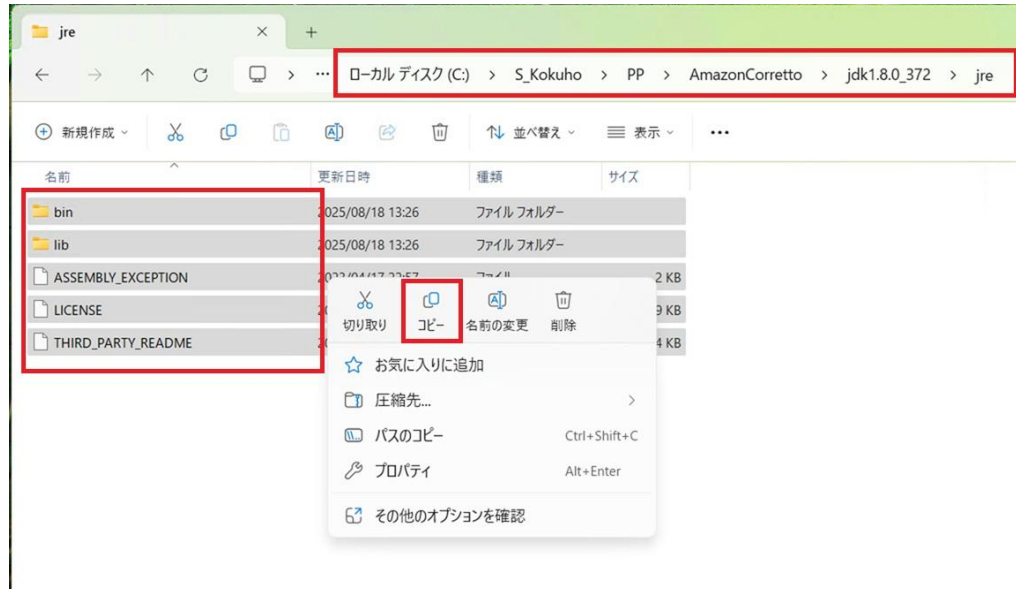
9. 手順 8. でコピーしたファイルを、「C:\temp」フォルダに貼り付けます。



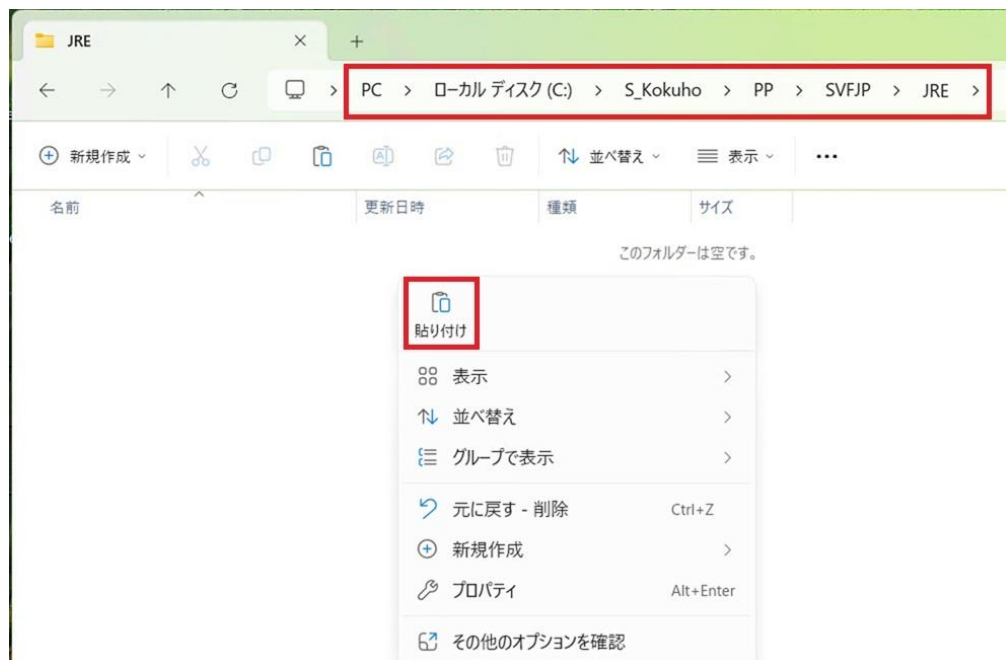
10. 「C:\\$Kokuho\PP\SVF\JRE」フォルダ配下をすべて選択し、削除します。



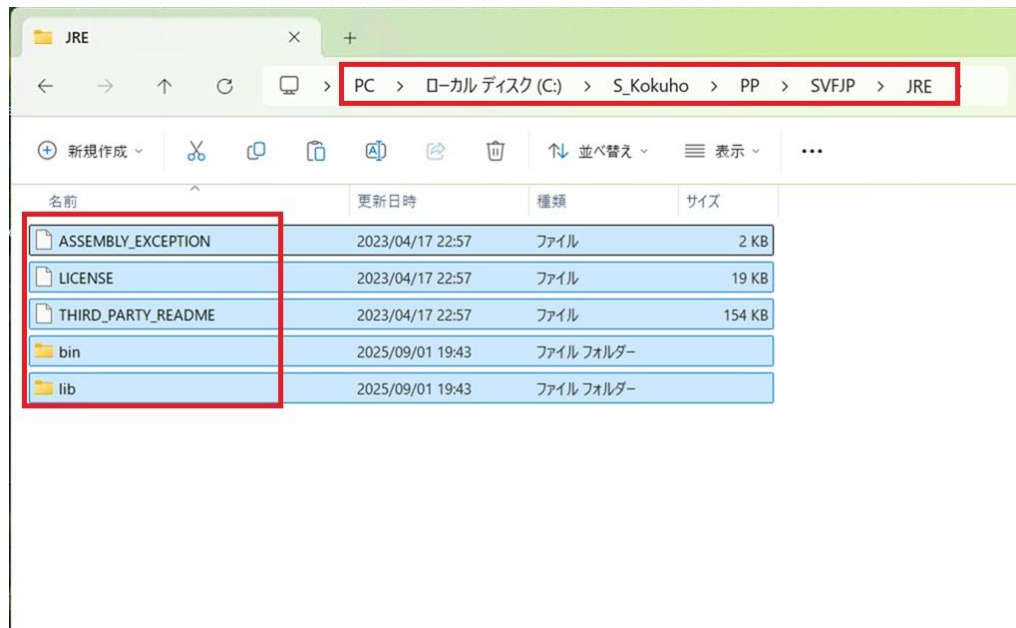
11. 「C:\\$S_Kokuho¥PP¥AmazonCorretto¥jdk1.8.0_372¥jre」フォルダ配下をすべて選択し、コピーします。



12. 手順 11. でコピーしたファイルを、「C:\\$S_Kokuho¥PP¥SVFJP¥JRE」フォルダに貼り付けます。



13. 「G:\\$S_Kokuho\PP\SVF\JP\JRE」フォルダ配下に手順 11. でコピーしたファイルが存在することを確認し、エクスプローラーを閉じます。



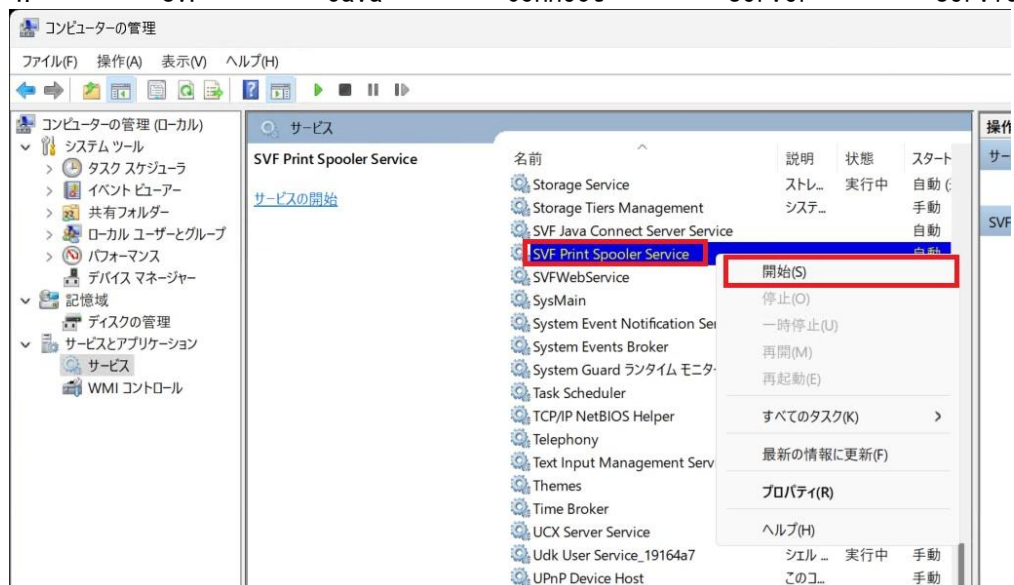
14. 「コンピューターの管理」画面で、下記画面例を参考に、次の順番でサービスを右クリックし、「開始」をクリックします。

1. SVF Print Spooler Service

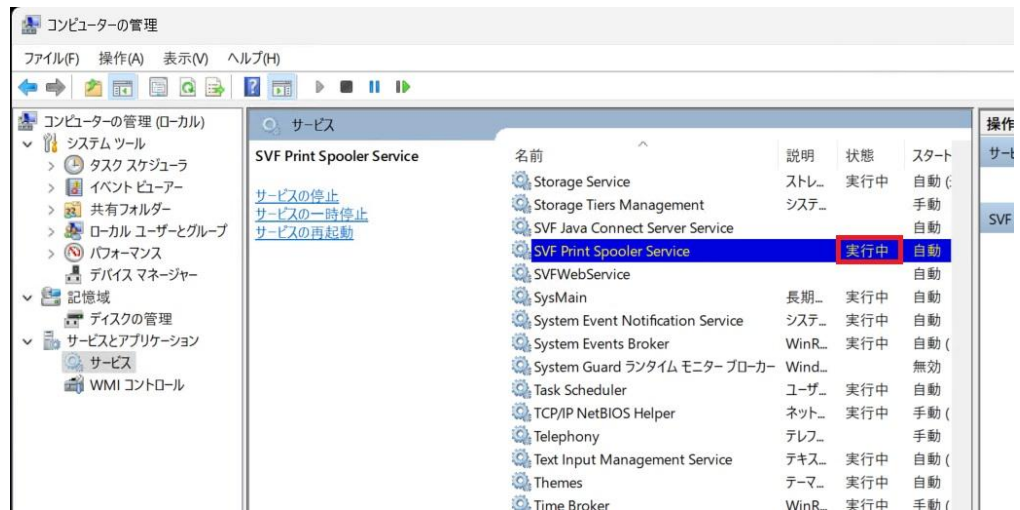
2. SVFWebService

3. UCX Server Service

4. SVF Java Connect Server Service



15. 手順 14. で開始したサービスの「状態」欄が、「空白」から「実行中」になったことを確認し、「コンピューターの管理」を閉じます。



3.1.7 バックアップソフトウェアの詳細設定

バックアップソフトウェアは、納付金スタンドアロン端末に対して製品未指定となりますので、採用する製品マニュアルを参照してください。

3.1.8 ウィルス対策ソフトウェアの詳細設定

ウィルス対策ソフトウェアは、納付金スタンドアロン端末に対して製品未指定となりますので、採用する製品マニュアルを参照してください。

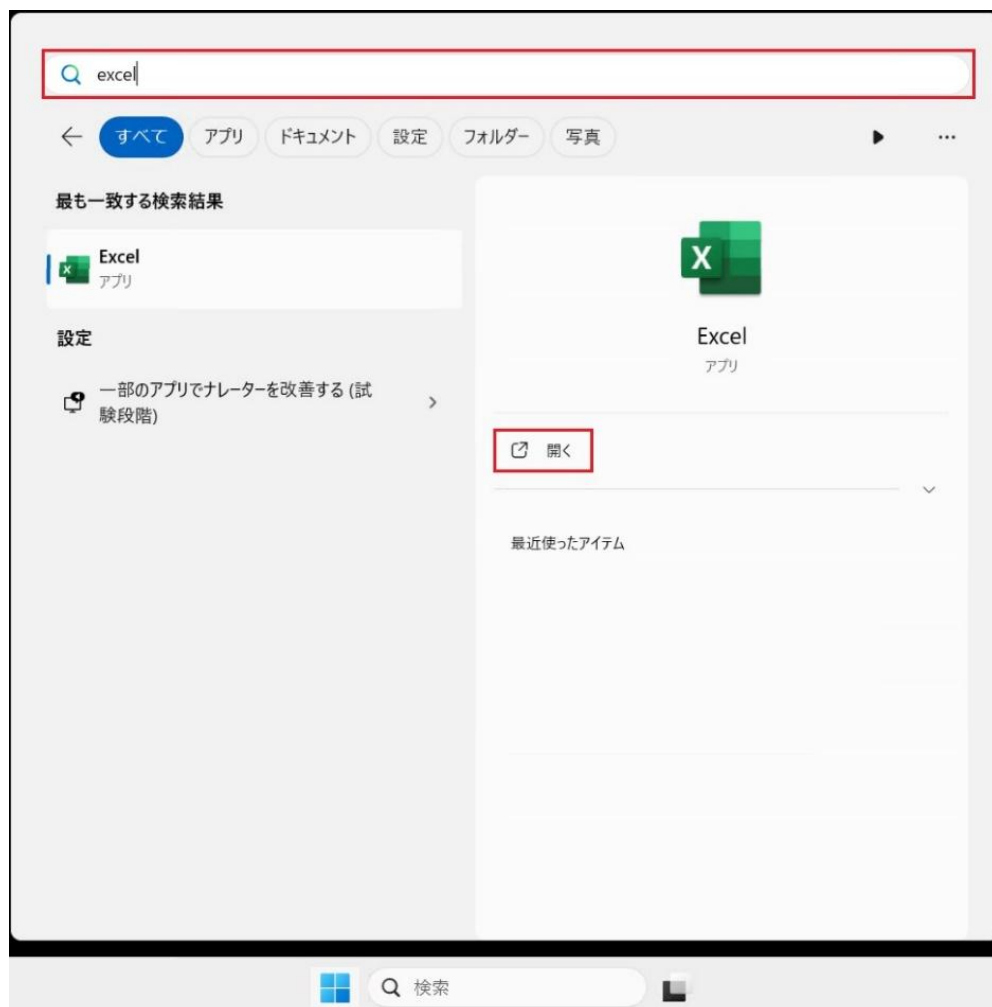
3.1.9 オフィス製品の詳細設定

(1) Microsoft Office 2024 のオプション設定

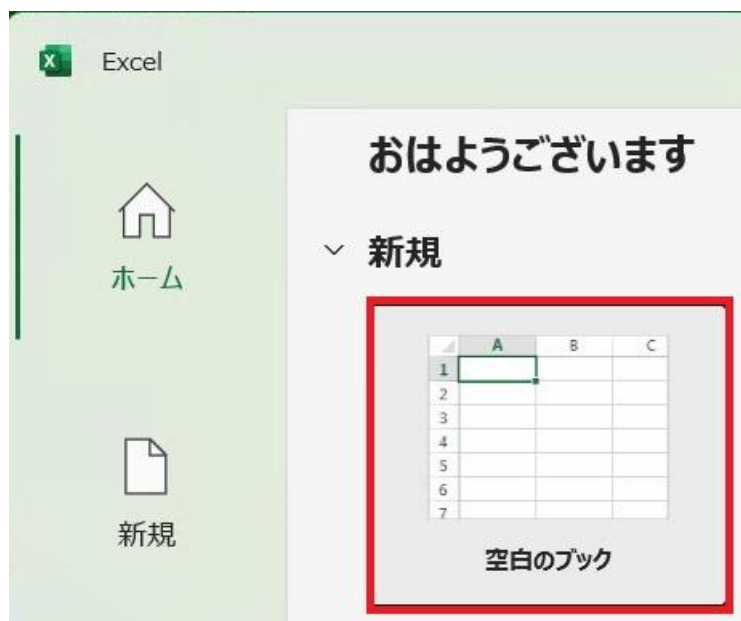
注意事項

本手順では、Microsoft Office LTSC Standard 2024 のオプション設定手順例となります。Microsoft Office LTSC Professional Plus 2024 のオプション設定をする場合は、画面イメージに差異がある場合があります。

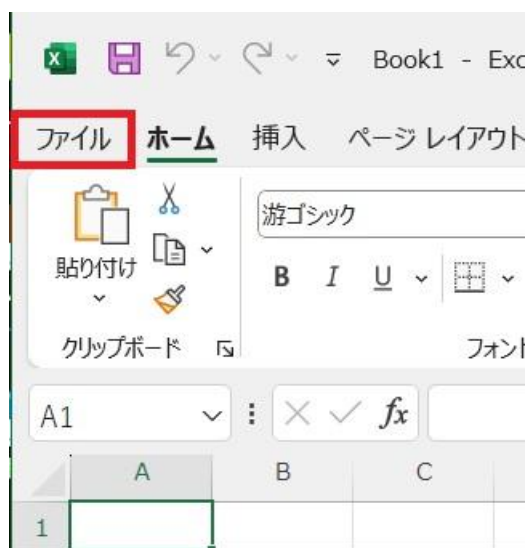
1. [スタート]アイコンをクリックし、検索ボックス欄に「excel」と入力し、「開く」をクリックします。



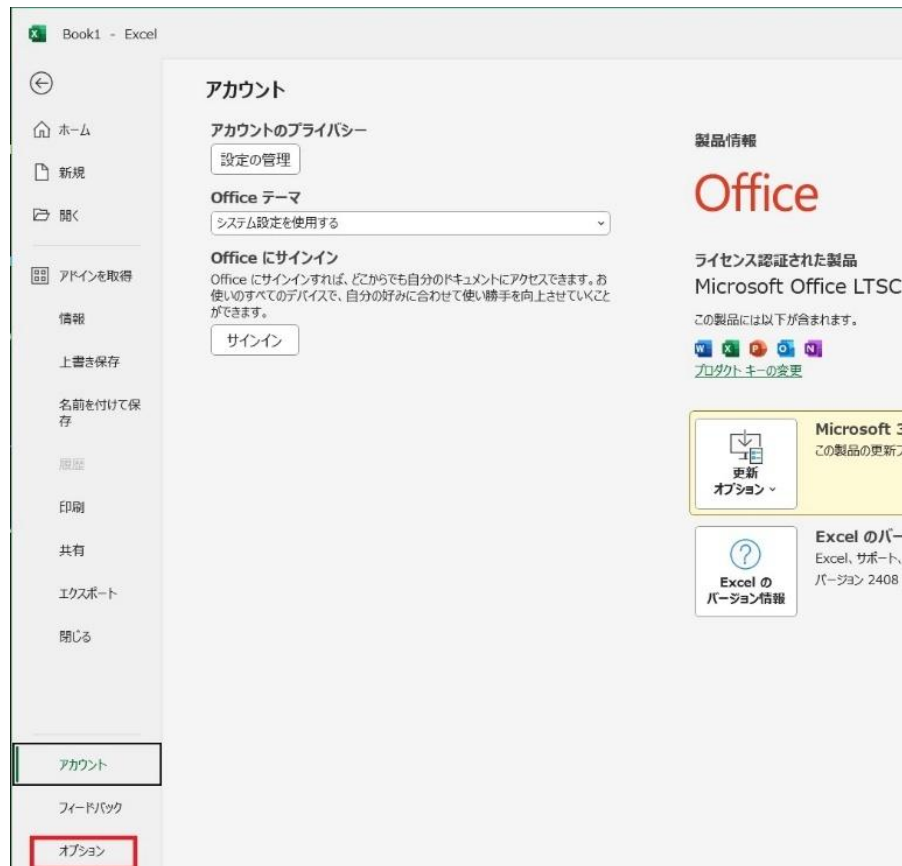
2. 表示された画面で、「空白のブック」をクリックします。



3. 表示された画面で、「ファイル」をクリックします。



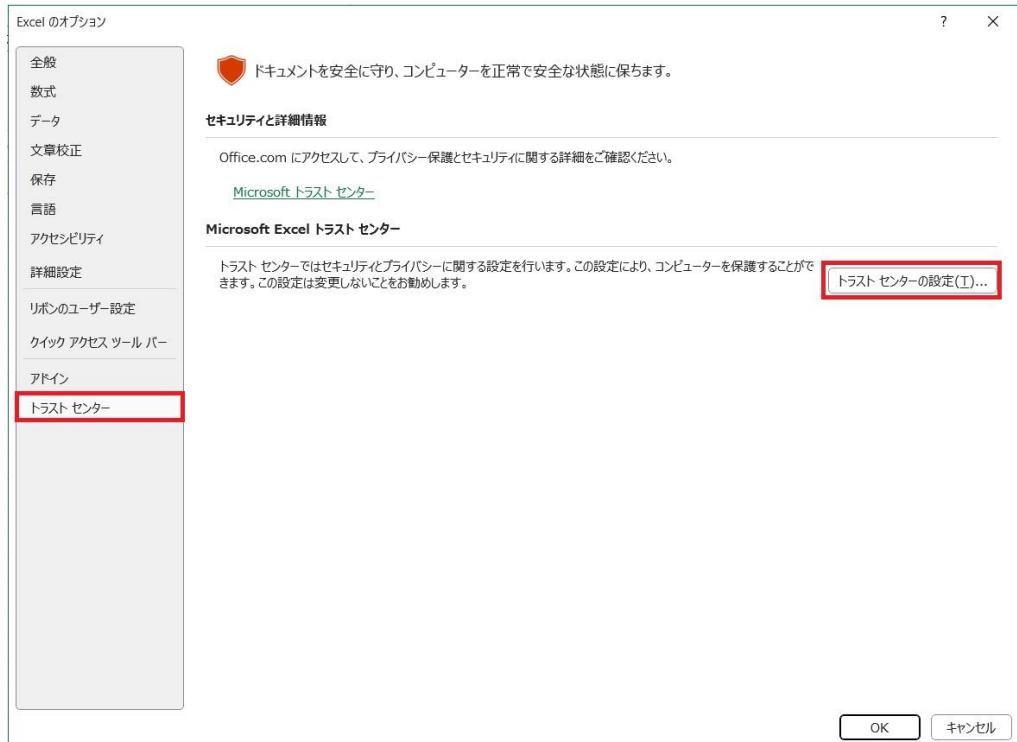
4. 画面左側の「オプション」をクリックします。



5. 「Excel のオプション」画面で、画面左側の「データ」をクリックし、「.csv ファイルまたは同様のファイルを読み込む際に自動データ変換があれば通知する」のチェックを外します。



6. 画面左側の「トラスト センター」をクリックし、「トラスト センターの設定」をクリックします。

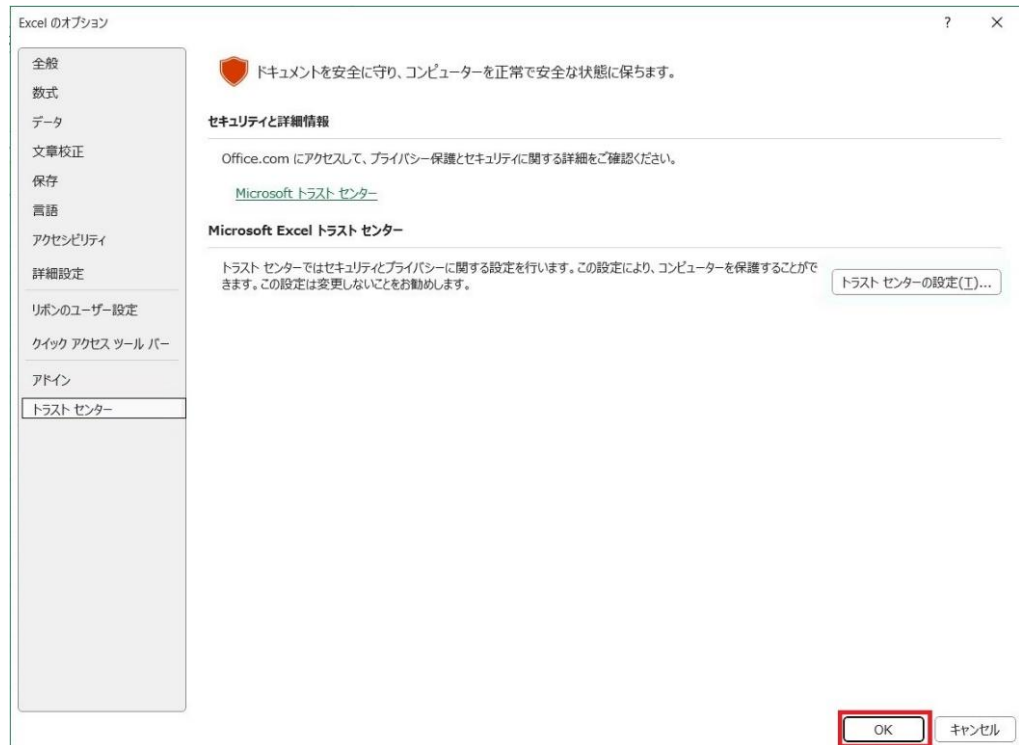


7. 「トラスト センター」画面で、画面左側の「ActiveX の設定」をクリックし、「先に確認メッセージを表示してから、最低限の制限を適用してすべてのコントロールを有効にする」を選択します。また、「セーフモード(コンピューターに対するコントロールのアクセスを制限します)」のチェックが外れている場合は、チェックし、「OK」をクリックします。



3 ミドルウェアの詳細設定

8. 「Excel のオプション」画面で、「OK」をクリックします。



9. Excel を閉じます。